

横壁中村遺跡 (11)

— 縄文時代の列石・配石遺構 —

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

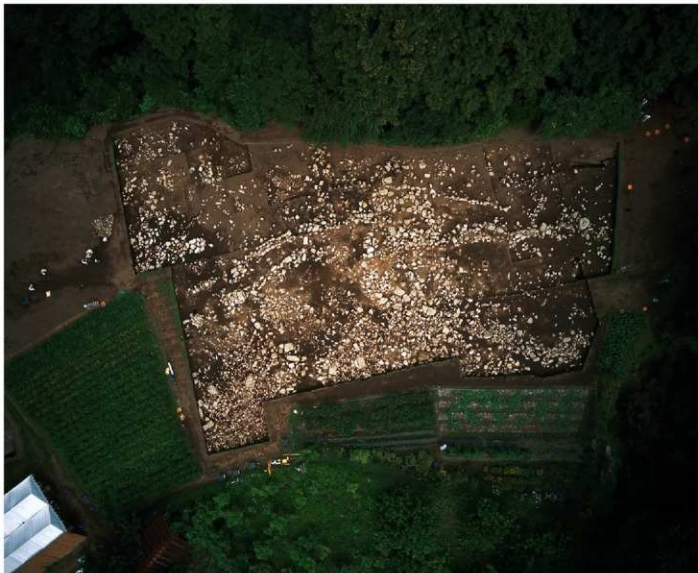
横壁中村遺跡 (11)

— 縄文時代の列石・配石遺構 —

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



18区～28区列石・配石群確認状況 上が北

29区3号・4号列石(南東から) 中央の大型住居は
3号住居 左手上方が山横沢

29区4号列石に伴う立石群



29区配石墓群調査状況 上が北



29区配石墓群中央部の状況 上が北 中央の石数きが26号配石



29区26号配石（北から） 底面に石敷きを伴う



29区15号配石（東から） 底面に石敷きを伴う



29区16号配石（西から）



29区26号配石 耳飾り出土状況



29区26号配石出土の一对の耳飾り



29区16号配石出土の主要土器



29区16号配石出土の石器類



29区27号配石 (北から)



29区28号配石 (西から)



29区42号配石 (東から)



29区27号配石出土の石器群



29区28号配石 土偶と丸石



29区28号配石 土偶出土状況



29区28号配石出土の中空土偶

序

ハッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

ハッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で16年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成8年度から発掘調査が開始され、平成18年度以降も調査の継続が予定されており、長期にわたる大規模な調査となりました。また調査された遺構や遺物は本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大きく、また長く続いた集落であることを示しております。これら膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は縄文時代中期から後期の列石・配石遺構に関する報告を纏めることができました。本書は縄文時代の集落の構造を考える上で、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上で重要な資料となると考えております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で永らく活用されることを願い序といたします。

平成22年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成8年度から実施されている「横壁中村遺跡」の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」を第1冊目として、既に9冊が刊行されている。本書は、横壁中村遺跡で検出された縄文時代の列石・配石遺構と出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第11冊目である。
- 2 横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、ハツ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ハツ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は平成8年4月1日から平成18年3月31日まで実施された。今回報告する住居の調査年度は、第3章第1節内で遺構ごとに記載しているが、おもに平成8～10年度に調査されたものである。
- 5 発掘調査組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 小寺弘之（平成8・9年度）、菅野 清（平成10年度）、小野宇三郎（平成11～17年7月まで）、高橋勇夫（平成17年7月から平成18年度）

常務理事 菅野 清（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～12年度）、吉田 豊（13・14年度）、住谷永市（平成15・16年度）、木村裕紀（平成17・18年度）

事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～13年度）

事業局長 神保侑史（平成14～16年度）、津金澤吉茂（平成17・18年度）

管理部長 蜂果 実（平成8年度）、渡辺 健（平成9・10年度）、住谷 進（平成11～13年度）、萩原利通（平成14・15年度）、矢崎俊夫（平成16・17年度）、萩原 勉（平成18年度）

調査研究部長 赤山容造（平成8～10年度）、神保侑史（平成11年度）、能登 健（平成12・13年度）、市 隆之（平成14年度）、右島和夫（平成15・16年度）西田健彦（平成17・18年度）

調査研究課長 岸田治男（平成8年度）、能登 健（平成9～11年度）、飯島義雄（平成12年度）、下城 正（平成13年度）

ハツ場ダム調査事務所長 水田 稔（平成14・15年度）、市 隆之（平成16～18年度）

同調査研究部長 津金澤吉茂（平成14・15年度）、佐藤明人（平成16～18年度）

同調査研究課長 下城 正（平成14年度）、齋藤和之（平成15・16年度）、中沢 悟（平成17年度）、佐藤明人（平成18年度兼務）

事務担当 井上 剛、大島信夫、岡島伸昌、小淵 淳、笠原秀樹、片岡徳雄、国定 均、小

山建夫、坂本敏夫、鈴木理佐、須田朋子、野口富太郎、町田文雄、宮崎忠司、
富沢よねこ、森下弘美、矢嶋知恵子、柳岡良宏、吉田有光、若林正人

調査担当 阿久津 聡、飯田陽一、飯森康広、池田政志、石坂 聡、石田 真、今井和久、
岡部 豊、小野和之、金井 武、唐沢友之、久保 学、見島良昌、小林大悟、
斎藤幸男、篠原正洋、関 俊明、田村公夫、田村邦宏、友廣哲也、原 雅信、
樺沢健二、廣津英一、藤巻幸男、松原孝志、森田真一、諸田康成、山川剛史、
渡辺弘幸、綿貫邦男

6 整理期間は平成19年4月1日から平成21年3月31日である。

7 整理組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫

常務理事 木村裕紀、津金澤吉茂（平成20年度）

事業局長 津金澤吉茂（平成19年度）

ハッ場ダム調査事務所長 巾 隆之（平成19年度）、中東耕志（平成20年度）

ハッ場ダム調査事務所 調査研究部長 中東耕志（平成19年度）、
中沢 悟（平成20年度）

事務担当 ハッ場ダム調査事務所 庶務GL 吉田有光、若林正人

整理担当 石田 真（平成19年度）、藤巻幸男（平成20年度）

8 本報告書作成の担当

編 集 藤巻幸男

本文執筆 石田 真（第3章第3節18区～28区配石本文、出土石器総量把握及び石器観察表）
藤巻幸男（上記以外）

石材鑑定 渡辺弘幸

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

デジタル図版作成 牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、荒木絵美、
高梨由美子、矢嶋真観、横塚由香、下川陽子

機械実測 田所順子 伊東博子 岸 弘子

委託関係 遺構測量および空中写真 株式会社測研

遺構図デジタル編集 株式会社測研

整理補助 石村千恵美 川津えみ子 日野亮子 富澤友理

懐歴史の杜（井草峯子、丸山里美、篠原信子、岩田聡子、星野富士枝、
吉田豊子、石村千恵美、黒岩由美子、市村富美江、秋山悦子）

9 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関、諸氏から貴重なご教示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

国土交通省関東地方建設局ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会
大竹幸恵 金子直行 小池岳史 佐藤雅一 白石光男 大工原豊 寺内隆夫 富田孝彦 能登 健
萩原昭朗 平林 彰 福島 永 松島榮治 綿田弘実 渡辺清志

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 調査範囲には4 m×4 mのグリッド網を設定し、各グリッドの呼称は南東隅の交点を当てている。
- 3 遺構図の縮尺は、列石にかかる図は1/80、配石にかかる図は1/40を基本とした。
- 4 遺構番号は、調査時の番号を用いている。当遺跡では調査中あるいは整理段階で各遺構の再検討を行っており、他の遺構に組み入れられたものや、遺構認定から外されたものもあるため、遺構番号は連続しない。
- 5 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器、▲は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 6 遺物図の縮尺は土器実測図は1/4、土器拓本は1/3、石器1/3を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。その場合は各遺物実測図に記した。
- 7 石器実測図では、自然面を点描、磨り面と欠損面を白抜きとしている。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
- 9 遺物観察表、石器計測表の記載方法は下記の通りである。
 - (1) 土器の計測値の単位はcmである。
 - (2) 石器の計測値の単位はmmである。
 - (3) 石器類の重量はすべて残存値であり、単位はgである。
 - (4) 色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
写真目次	
表目次	
抄録	

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	4

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本土層	12
第3節 縄文時代の列石遺構	15
第4節 縄文時代の配石遺構	113

第4章 発掘調査の成果とまとめ

1 列石遺構について	331
2 配石遺構について	331
3 後期集落の変遷と配石基群	332

遺物観察表	353~388
写真図版	PL1~PL119
付図(4枚)	

插图目次

- 第1图 年度别調査区全体図
第2图 遺跡の位置と周辺遺跡
第3图 横壁中村遺跡基本土層
第4图 横壁中村遺跡全体図
第5图 縄文時代の列石・配石遺構分布図
第6图 18・28区列石・配石遺構分布図
第7图 18・28区列石・配石遺構分布図（現況図）
第8图 18区1号・2号列石
第9图 18区1号列石出土遺物
第10图 18区3号列石
第11图 18区7号列石
第12图 18区7号列石出土遺物（1）
第13图 18区7号列石出土遺物（2）
第14图 20区5号列石
第15图 20区5号列石出土遺物（1）
第16图 20区5号列石出土遺物（2）
第17图 28区1号・5号列石
第18图 28区6号・8号列石
第19图 28区9号列石
第20图 28区12号列石
第21图 28区1号・2号列石出土遺物
第22图 28区2号列石出土遺物
第23图 28区3号・7号・8号列石出土遺物
第24图 28区5号列石出土遺物
第25图 28区12号列石出土遺物（1）
第26图 28区12号列石出土遺物（2）
第27图 29区列石・配石遺構分布図
第28图 29区3号・5号列石遺構全体図
第29图 29区3号列石（1）
第30图 29区3号列石（2）
第31图 29区3号列石（3）出土遺物分布図
第32图 29区4号・5号列石（1）
第33图 29区4号・5号列石（2）出土遺物分布図
第34图 29区4号・5号列石（3）
第35图 29区4号・5号列石（4）出土遺物分布図
第36图 29区4号・5号列石（5）
第37图 29区4号・5号列石（6）出土遺物分布図
第38图 29区3号列石出土遺物（1）
第39图 29区3号列石出土遺物（2）
第40图 29区3号列石出土遺物（3）
第41图 29区4号列石出土遺物（1）
第42图 29区4号列石出土遺物（2）
第43图 29区4号列石出土遺物（3）
第44图 29区4号列石出土遺物（4）
第45图 29区4号列石出土遺物（5）
第46图 29区4号列石出土遺物（6）
第47图 29区4号列石出土遺物（7）
第48图 29区4号列石出土遺物（8）
第49图 29区4号・5号列石出土遺物
第50图 29区3号・5号列石周辺グッド遺物出土状況
第51图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（1）
第52图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（2）
第53图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（3）
第54图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（4）
第55图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（5）
第56图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（6）
第57图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（7）
第58图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（8）
第59图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（9）
第60图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（10）
第61图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（11）
第62图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（12）
第63图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（13）
第64图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（14）
第65图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（15）
第66图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（16）
第67图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（17）
第68图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（18）
第69图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（19）
第70图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（20）
第71图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（21）
第72图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（22）
第73图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（23）
第74图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（24）
第75图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（25）
第76图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（26）
第77图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（27）
第78图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（28）
第79图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（29）
第80图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（30）
第81图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（31）
第82图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（32）
第83图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（33）
第84图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（34）
第85图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（35）
第86图 29区3号・5号列石周辺包含層出土遺物（36）
第87图 18区1号・2号配石
第88图 18区3号・6号配石（1）
第89图 18区3号・6号配石（2）
第90图 18区7号・8号配石
第91图 18区9号・11号配石
第92图 18区13号・14号配石
第93图 18区15号・16号配石
第94图 18区17号配石
第95图 18区18号・20号配石
第96图 18区33号配石
第97图 18区39号・44号配石遺構分布図
第98图 18区39号配石
第99图 18区40号・42号配石
第100图 18区41号配石
第101图 18区44号配石
第102图 18区45号・49号配石遺構分布図
第103图 18区45号・49号配石
第104图 18区3号・4号配石出土遺物
第105图 18区6号・8号・10号配石出土遺物
第106图 18区11号・14号・15号配石出土遺物
第107图 18区15号配石出土遺物
第108图 18区15号・16号配石出土遺物
第109图 18区17号配石出土遺物
第110图 18区17号・18号・20号配石出土遺物
第111图 18区18号・33号配石出土遺物
第112图 18区33号・39号・40号配石出土遺物
第113图 18区41号配石出土遺物（1）
第114图 18区41号配石出土遺物（2）
第115图 18区41号配石出土遺物（3）
第116图 18区44号配石出土遺物（1）

第1178区	18区44号配石出土文物 (2)	第1790区	29区24号配石
第1180区	19区1号配石遗槽位置图	第1800区	29区26号配石 (1)
第1190区	19区1号、8号配石	第1810区	29区26号配石 (2)
第1200区	20区1号、2号配石	第1820区	29区27号配石 (1)
第1210区	20区3号配石	第1830区	29区27号配石 (2)
第1220区	20区5号、6号配石	第1840区	29区27号配石 (3)
第1230区	20区9号~11号配石	第1850区	29区28号、29号配石
第1240区	20区14号配石	第1860区	29区28号配石 (1)
第1250区	20区15号配石	第1870区	29区28号配石 (2)
第1260区	20区23号~26号配石遗槽分布图	第1880区	29区30号配石 (1)
第1270区	20区23号配石	第1890区	29区30号配石 (2)
第1280区	20区24号配石	第1900区	29区30号配石 (3)
第1290区	20区25号配石	第1910区	29区31号配石
第1300区	20区26号配石	第1920区	29区32号、33号配石
第1310区	20区2号、3号配石出土文物	第1930区	29区34号配石
第1320区	20区6号、9号、10号配石出土文物	第1940区	29区35号配石
第1330区	20区14号、16号配石出土文物	第1950区	29区36号配石
第1340区	20区15号配石出土文物	第1960区	29区37号配石
第1350区	20区23号配石出土文物 (1)	第1970区	29区38号、39号配石
第1360区	20区23号配石出土文物 (2)	第1980区	29区40号、41号配石
第1370区	20区23号、24号配石出土文物	第1990区	29区42号、43号配石
第1380区	20区24号、25号配石出土文物	第2000区	29区42号配石
第1390区	20区25号配石出土文物 (2)	第2010区	29区44号、45号配石
第1400区	20区25号配石出土文物 (3)	第2020区	29区46号配石
第1410区	28区2号配石	第2030区	29区47号、48号配石
第1420区	28区3号配石	第2040区	29区49号、50号配石
第1430区	28区4号配石	第2050区	29区1号、3号、4号、7号配石出土文物
第1440区	28区5号配石 (1)	第2060区	29区7号、8号配石出土文物
第1450区	28区5号配石 (2)	第2070区	29区9号、11号配石出土文物
第1460区	28区6号、10号配石	第2080区	29区10号、12号、13号、15号配石出土文物
第1470区	28区7号配石	第2090区	29区14号、17号、18号、20号配石出土文物
第1480区	28区8号配石	第2100区	29区16号配石出土文物 (1)
第1490区	28区9号配石	第2110区	29区16号配石出土文物 (2)
第1500区	28区11号~13号配石	第2120区	29区16号配石出土文物 (3)
第1510区	28区14号配石	第2130区	29区16号配石出土文物 (4)
第1520区	28区15号配石	第2140区	29区16号、21号配石出土文物
第1530区	28区17号配石	第2150区	29区23号、24号配石出土文物
第1540区	28区2号配石出土文物	第2160区	29区24号配石出土文物 (2)
第1550区	28区3号、4号配石出土文物	第2170区	29区24号配石出土文物 (3)
第1560区	28区4号配石出土文物	第2180区	29区26号配石出土文物 (1)
第1570区	28区4号~6号配石出土文物	第2190区	29区26号配石出土文物 (2)
第1580区	28区6号、7号配石出土文物	第2200区	29区27号配石出土文物 (1)
第1590区	28区7号配石出土文物	第2210区	29区27号配石出土文物 (2)
第1600区	28区7号~9号配石出土文物	第2220区	29区28号配石出土文物 (1)
第1610区	28区10号、13号、14号配石出土文物	第2230区	29区28号配石出土文物 (2)
第1620区	28区11号配石出土文物	第2240区	29区29号、31号~33号配石出土文物
第1630区	28区15号配石出土文物 (1)	第2250区	29区30号配石出土文物 (1)
第1640区	28区15号配石出土文物 (2)	第2260区	29区30号配石出土文物 (2)
第1650区	28区17号配石出土文物	第2270区	29区30号配石出土文物 (3)
第1660区	29区1号、2号、4号配石	第2280区	29区30号配石出土文物 (4)
第1670区	29区7号、8号配石	第2290区	29区30号配石出土文物 (5)
第1680区	29区9号配石	第2300区	29区30号配石出土文物 (6)
第1690区	29区10号、11号配石	第2310区	29区34号配石出土文物
第1700区	29区12号、13号配石	第2320区	29区35号配石出土文物
第1710区	29区14号、15号配石	第2330区	29区36号、37号、39号、40号、43号配石出土文物
第1720区	29区16号配石 (1)	第2340区	29区42号配石出土文物 (1)
第1730区	29区16号配石 (2)	第2350区	29区42号配石出土文物 (2)
第1740区	29区16号配石 (3)	第2360区	29区42号配石出土文物 (3)
第1750区	29区17号、18号配石	第2370区	29区42号配石出土文物 (4)
第1760区	29区19号~21号配石	第2380区	29区42号配石出土文物 (5)
第1770区	29区22号、23号配石	第2390区	29区44号配石出土文物 (1)
第1780区	29区24号、25号配石	第2400区	29区44号配石出土文物 (2)

第241図	29区45号・46号配石出土遺物	第254図	30区4号・8号・15号配石出土遺物
第242図	29区46号配石出土遺物(2)	第255図	縄文時代後期時期別遺構分布(全体)
第243図	29区47号・48号配石出土遺物	第256図	縄文時代後期時期別遺構分布(称名寺式期)
第244図	29区48号・49号配石出土遺物	第257図	縄文時代後期時期別遺構分布(堀之内1式期)
第245図	29区49号・50号配石出土遺物	第258図	縄文時代後期時期別遺構分布(堀之内2式期)
第246図	30区4号配石	第259図	縄文時代後期時期別遺構分布(加曾科B式期～高井東式期)
第247図	30区7号・8号・11号配石	第260図	縄文時代後期時期別遺構分布(安行式期)
第248図	30区12号・15号～17号配石	第261図	横壁中村遺跡29区配石墓群位置図
第249図	30区20号・22号配石	第262図	横壁中村遺跡29区配石墓群全体図
第250図	30区21号配石	第263図	横壁中村遺跡29区配石墓群模式全体図
第251図	30区4号配石出土遺物(1)	第264図	横壁中村遺跡29区配石墓群構造想定図
第252図	30区4号配石出土遺物(2)		
第253図	30区4号配石出土遺物(3)		

写真目次

P.L.1	1 遺跡遠景(北東から) 手前が菅妻川、上方に丸岩。	2	18区34号配石部分
	2 遺跡遠景(西から) 右手が遺跡地。	3	18区35号配石部分
P.L.2	1 発掘当初の様子(東から) 右方が菅妻川、手前が東沢。	4	20区5号列石(東から)
	2 同上。18区から28区にかけて分布する列石・配石遺構群が見えはじめる。	5	20区5号列石 確認状況
P.L.3	28区列石・配石遺構群(東から)	6	28区1号・2号列石と5号・6号住居(東から)
P.L.4	1 28区列石・配石遺構群の東半部分 上が北	7	28区1号・2号列石と5号・6号住居(西から)
	2 同上 西半部分 上が北	8	28区1号列石
P.L.5	18区～28区列石・配石遺構群(左が北)	P.L.17	1 28区2号列石(西から)
P.L.6	1 18区～28区列石・配石遺構群(東から)	2	28区3号列石(東から)
	2 同上(西から) さらに調査区を拡張。左手が菅妻川。	3	28区8号列石(西から)
P.L.7	1 18区～28区列石・配石遺構群(西半部分) 上が北	4	28区8号列石(西から) 大塚離が2～3列で北ぶ。
	2 同上(東半部分) 上が北	5	28区8号列石(北から)
P.L.8	1 18区～28区列石・配石遺構群(西から)	6	28区8号列石(東から)
	2 28区列石・配石遺構群 上が北	7	28区9号列石(南から)
P.L.9	1 18区～28区列石・配石遺構群(上が北)	8	28区12号列石(西から)
	2 同上	P.L.18	1 29区発掘当初の状況(上が北) 左手が山根沢。
P.L.10	1 28区6号・8号列石と28区4号～10号配石	2	29区列石・配石 確認状況(上が北)
	2 18区13号～15号配石	P.L.19	1 29区1号～5号列石(西から)
P.L.11	1 18区9号配石	2	29区1号～5号列石(南東から)
	2 18区1号列石と18区3号～6号配石	P.L.20	1 29区3号列石(南から)
	3 18区1号列石の東端部分	2	29区3号・4号列石(南東から) 手前が3号、奥が4号。
	4 28区1号列石と28区2号配石	3	29区3号列石(南から)
	5 28区1号～3号列石	4	29区3号・4号列石(西から) 手前が4号、中央が3号。
	6 28区2号～5号列石	P.L.21	1 29区3号列石南半部(北西から)
	7 28区5号配石	2	同上(北西から)
	8 28区5号配石付近の状況	P.L.22	1 29区3号列石(南東から)
P.L.12	1 18区～28区列石・配石遺構群(上が北)	2	同上(北から) 3号列石中央の大型板状立石群。
	2 同上	P.L.23	1 29区3号列石(北から) 列石下の調査状況
P.L.13	1 18区～28区列石・配石遺構群 18区1号列石南側の地山礫。	2	29区3号列石(南から) 南端部の石組み状況
	2 同上。18区8号～15号配石周囲の地山礫。	3	29区3号列石(西から) 南端部の石組み状況
P.L.14	1 18区1号列石と3号住居(上が北) 左手が1号列石。	4	29区3号列石(東から) 中央付近の石組み状況
	2 28区1号・2号列石と5号・6号住居(上が北)	5	29区3号列石(西から) 中央付近の石組み状況
P.L.15	1 18区1号列石	6	29区3号列石 列石下の土層
	2 18区1号列石	7	29区3号列石 列石下の状況
	3 18区3号列石	P.L.24	1 29区3号・4号列石(南東から)
	4 18区7号列石(北西から)	2	29区3号列石(北西から)
P.L.16	1 18区7号列石(北から)	3	29区4号列石 確認状況(北から) 右手がすぐ山根沢。
		4	29区4号列石 確認状況(南から) 左手が山根沢。
		5	29区4号列石(西から) 手前が山根沢。
		P.L.25	1 29区4号列石(南から) 左手が現在の山根沢

	2	29区4号列石 (南西から)	右手奥が3号列石	7	18区41号配石		
	3	29区4号列石 (南から)		8	18区41号配石	下面の状況	
	4	29区4号列石	遺物出土状況	P.L.36	1	18区42号配石	
	5	29区4号列石	遺物出土状況		2	18区42号配石	石囲い部分
P.L.26	1	29区4号列石	北半部 (南から)		3	18区42号配石	掘り方
	2	29区4号列石	北半部 (東から)		4	18区44号配石	(北西から)
			石が立石。		5	18区45号配石	
P.L.27	1	29区4号列石 (南から)			6	18区45号配石	掘り方
	2	29区4号列石 (南から)			7	19区1号配石 (北から)	
	3	29区4号列石 (南から)			8	19区8号配石 (北から)	
	4	29区4号列石 (北西から)		P.L.37	1	20区1号配石	(北東から)
	5	29区4号列石 (南西から)			2	20区2号配石	確認状況
P.L.28	1	29区4号列石 (北から)			3	20区2号配石	掘り方調査
	2	29区4号列石 (南から)			4	20区2号配石	掘り方
P.L.29	1	29区4号列石 (北東から)			5	20区3号配石	確認状況
	2	29区4号列石 (東から)			6	20区3号配石	近接
P.L.30	1	18区1号配石			7	20区3号配石	掘り方確認
	2	18区1号配石	掘り方		8	20区3号配石	掘り方調査
	3	18区2号配石		P.L.38	1	20区3号配石	掘り方の確
	4	18区2号配石	掘り方		2	20区3号配石	掘り方
	5	18区3号配石			3	20区5号配石	
	6	18区3号配石	掘り方		4	20区5号配石	掘り方
	7	18区5号配石			5	20区6号配石	
	8	18区6号配石			6	20区6号配石	掘り方調査
P.L.31	1	18区7号配石 (東から)			7	20区6号配石	掘り方調査
	2	18区7号配石			8	20区6号配石	掘り方
	3	18区7号配石		P.L.39	1	20区9号配石	
	4	18区7号配石	掘り方		2	20区9号配石	掘り方
	5	18区9号配石			3	20区10号配石	
	6	18区10号配石			4	20区10号配石	掘り方
	7	18区11号配石			5	20区11号配石	
	8	18区13号配石			6	20区14号配石 (南西から)	
P.L.32	1	18区13号配石 (北から)			7	20区14号配石 (南東から)	
	2	18区13号配石 (北から)			8	20区14号配石 (南東から)	
	3	18区13号配石	掘り方	P.L.40	1	20区14号配石 (北から)	左手に大形の地山礫が並ぶ。
	4	18区14号配石			2	20区15号配石 (東から)	確認状況
	5	18区14号配石	掘り方調査		3	20区15号配石	深鉢出土状況
	6	18区14号配石	遺物出土状況		4	20区15号配石	深鉢出土状況
	7	18区14号配石	掘り方		5	20区15号配石 (東から)	
	8	18区15号配石		P.L.41	1	20区15号配石 (東から)	掘り方
P.L.33	1	18区15号配石	竪下遺物出土状況		2	20区25号配石	確認状況
	2	18区16号配石			3	20区25号配石	掘り方調査
	3	18区16号配石	掘り方調査		4	20区25号配石	掘り方
	4	18区16号配石	掘り方		5	20区26号配石 (南から)	
	5	18区17号配石 (南東から)			6	20区26号配石 (南から)	掘り方
	6	18区17号配石	立石と掘り方		7	20区26号配石 (北から)	
	7	18区17号配石	立石		8	20区26号配石 (北から)	掘り方
	8	18区17号配石	掘り方	P.L.42	1	28区2号配石 (東から)	上方に延びる石列は1号列石。
P.L.34	1	18区18号配石			2	28区2号配石 (北から)	
	2	18区18号配石	掘り方		3	28区2号配石	大型礫と下部の礫
	3	18区20号配石			4	28区2号配石	大型礫下の状況
	4	18区20号配石	近接		5	28区3号配石 (西から)	立石の頭部は現地表に出ている。
	5	18区33号配石 (南西から)			6	28区3号配石 (北から)	確認状況
	6	18区33号配石 (南から)			7	28区3号配石 (北から)	
	7	18区33号配石	深鉢(1)の出土状況		8	28区3号配石	横から
	8	18区33号配石 (南から)		P.L.43	1	28区3号配石	立石の大きさ
P.L.35	1	18区33号配石 (北から)	掘り方調査		2	28区3号配石	覆土の状況
	2	18区33号配石 (北から)	掘り方		3	28区3号配石	立石周囲の礫を取り除く。
	3	18区34号・35号配石 (北西から)	掘り方		4	28区3号配石 (南から)	立石と石囲い
	4	18区39号配石					
	5	18区39号配石	掘り方				
	6	18区40号配石					

P.L.44	5	28区3号配石 (北から)	立石と石囲い	P.L.55	1	29区1号配石 (北東から)		
	6	28区3号配石 (西から)	立石と石囲い		2	29区1号配石 (北東から)	掘り方調査	
	7	28区3号配石 下部の調査			3	29区1号配石 (北東から)	掘り方調査	
	8	28区3号配石 下部の調査			4	29区2号配石 (北から)		
	1	28区3号配石 (北から)			5	29区3号配石 (東から)		
	2	28区3号配石 掘り方調査			6	29区3号配石 (南から)		
	3	28区3号配石 立石下の状態			7	29区3号配石 (南西から)		
	4	28区4号配石 (東から)			8	29区4号配石		
P.L.45	5	28区4号配石 (西から)	配石から東へのびる8号列石。	P.L.56	1	29区4号配石 掘り方		
	6	28区5号配石 (南から)			2	29区5号配石 (南から)		
	7	28区5号配石 (南から)			3	29区5号配石 (南から)		
	8	28区5号配石 (東から)	掘り方調査		4	29区7号配石 (東から)	掘り方調査	
	1	28区5号配石 (南から)	掘り方調査		5	29区7号配石 (東から)		
	2	28区5号配石 (北から)	掘り方		6	29区8号配石 (南から)		
	3	28区6号配石 (南から)			7	29区8号配石 中央の方形石組みと多孔石		
	4	28区7号配石 (北から)			8	29区8号配石 中央の方形石組みと多孔石		
	5	28区7号配石 (北から)	掘り方調査		P.L.57	1	29区8号配石 中央の方形石組み	
	6	28区7号配石 (北から)	右手は13号配石			2	29区9号配石 (東から)	確認状況
7	28区7号配石 (北から)	掘り方	3	29区9号配石 (南から)		確認状況		
8	28区8号配石 (東から)		4	29区9号配石 (東から)				
P.L.46	1	28区8号配石 (東から)	掘り方	5		29区9号配石 (東から)		
	2	28区9号配石 (北から)	確認状況	6		29区10号配石 (北東から)	確認状況	
	3	28区9号配石 (南から)		7		29区10号配石 (北東から)		
	4	28区9号配石 (東から)	掘り方調査	P.L.58		1	29区11号配石 (北から)	
	5	28区9号配石 (北から)	掘り方調査			2	29区11号配石 (西から)	
	6	28区10号配石 (南から)				3	29区11号配石 (北から)	
	7	28区11号・12号配石 (北東から)	確認状況		4	29区11号配石 (東から)	深鉢の出土状況	
	8	28区11号配石 (北東から)			5	29区12号配石 (東から)	配石内の調査	
	P.L.47	1	28区12号配石 (北東から)			6	29区12号配石 (東から)	確認状況
		2	28区11号・12号配石 (南から)		掘り方	7	29区12号配石 (東から)	底面の石敷き
3		28区13号配石 (北から)	確認状況		2	29区13号配石 (北から)	確認状況	
4		28区13号配石 (北から)			3	29区13号配石 (東から)	配石内の調査	
5		28区13号配石 (北から)	掘り方		4	29区13号配石 (北から)		
6		28区14号配石 (北から)	南にのびる石列は11号列石。	5	29区13号配石 (南東から)			
7		28区14号配石 (北東から)	確認状況	6	29区14号配石 (北から)			
8		28区14号配石 (北西から)		7	29区14号配石 (北から)	手前は15号配石		
P.L.48		1	28区14号配石 (北東から)		8	29区14号配石 (北から)		
		2	28区15号配石 (南東から)		P.L.60	1	29区15号配石 (西から)	埋没状況
	3	28区15号配石 (南から)	大塚麓下の状態	2		29区15号配石 (東から)		
	4	28区17号配石 (北から)	確認状況	3		29区15号配石 (東から)	底面石敷きの状態	
	5	28区17号配石 (北西から)		4		29区15号配石 (南から)	立石の復元	
	6	28区17号配石 掘り方調査		5		29区15号配石 (北から)	同4	
	7	28区17号配石 掘り方調査		6		29区16号配石 (南西から)	確認状況	
	8	28区17号配石 掘り方		7		29区16号配石 (北から)	調査開始	
P.L.49	1	29区・30区遠景 (東から)	右手は吾妻川。	P.L.61		1	29区16号配石 (北西から)	注口土器の出土状態
	2	29区・30区発掘当初の状況 (南西から)			2	29区16号配石 注口土器の出土状態		
	3	29区・30区発掘当初の状況 (北西から)	遺物出土状況		3	29区16号配石 (北西から)	遺物出土状況	
P.L.50	1	29区・30区発掘当初の状況 (上空から)	画面上方が北	4	29区16号配石 (北から)	遺物出土状況		
	2	29区配石基群上層の状態 (上空から)	画面上方が北	5	29区16号配石 (北から)	台付き土器の出土状態		
P.L.51	1	29区配石基群上層の状態 (上空から)	画面上方が北	6	29区16号配石 (南東から)	底面の状態		
	2	29区30号配石付近の上層の状態 (上空から)	画面上方が北東	7	29区16号配石 (西から)	家側種類の石組み状態		
P.L.52	1	29区配石基群遠景 (上空から)	画面上方が北	8	29区16号配石 (西から)	同7		
	2	29区配石基群全景 (上空から)	画面上方が北	P.L.62	1	29区16号配石 (南から)	頸縁の石組み状態	
P.L.53	1	29区配石基群全景 (上空から)	画面上方が北		2	29区16号配石 (東から)	頸縁の石組み状態	
	2	29区配石基群 (上空から)	画面上方が北		3	29区17号配石 (西から)		
P.L.54	1	29区配石基群 (上空から)	画面上方が北		4	29区17号配石 (南から)		
	2	29区配石基群 (上空から)	画面上方が北		5	29区18号配石 (南から)		
P.L.63	1	29区21号配石 (東から)	右手は24号配石 小塚が面をなす。 掘り方		6	29区18号配石 (西から)		
	2	29区21号配石 (東から)			7	29区19号配石 (北から)		

	3	29区22号配石 (西から)		6	29区32号配石 (東から)	
	4	29区23号配石 (南西から) 埋没状況		7	29区33号配石 (東から)	埋没土の調査
	5	29区23号配石 (南東から) 右手奥は26号配石		8	29区33号配石 (東から)	
	6	29区20号・24号配石 (東から) 左が20号、右が24号	P L 70	1	29区34号配石 (北から)	
	7	29区24号配石 (南から) 埋没状況		2	29区34号配石 (北東から)	
P L 64	8	29区24号配石 (東から) 底面の状態		3	29区34号配石 (東から)	手前東側に大きな丸石。
	1	29区25号配石 (南から)		4	29区34号配石 (東から)	配石内西辺の立石
	2	29区26号配石 (北東から) 確認状況		5	29区35号配石 (北から)	確認状況
	3	29区26号配石 底面石敷きと耳飾りの確認状況		6	29区35号配石 (東から)	左手は34号配石
	4	29区26号配石 (西から)		7	29区35号配石 (北から)	
	5	29区26号配石 (北から)	P L 71	8	29区35号配石 (西から)	
	6	29区26号配石 (南から) 底面東半部を掘り方調査		1	29区36号配石 (西から)	上面の墓石
	7	29区26号配石 (西から) 東の側縁		2	29区36号配石 (南から)	墓石下の状況
P L 65	8	29区26号配石 (南東から) 底面石敷きと掘り方		3	29区36号配石 (南から)	全景確認
	1	29区26号配石 (南から) 掘り方調査。手前は55号配石。		4	29区36号配石 (北から)	
	2	29区26号配石 (南から) 北西隅のビット		5	29区38号配石 (北東から)	
	3	29区26号配石 (北西から) 重複する55号配石側縁の確認。		6	29区39号配石 (南東から)	中央27号配石の右手に重複。
	4	29区26号配石 (南から) 掘り方。手前は重複する55号配石。	P L 72	7	29区39号配石 (西から)	27号との重複状況
	5	29区26号配石 (東から) 掘り方。左手は重複する55号配石。		8	29区39号配石 (南東から)	北側縁の状態
	6	29区27号配石 (東から) 確認状況		1	29区40号配石 (東から)	確認状況
	7	29区27号配石 (東から) 埋没状況		2	29区40号配石 (北から)	
	8	29区27号配石 (南東から) 西側に天井石の一部が残る。		3	29区41号配石 (西から)	
P L 66	1	29区27号配石 (東から) 西側に天井石の一部が残る。		4	29区42号配石 (北東から)	確認状況
	2	29区27号配石 (東から) 側縁上の平積み石		5	29区42号配石 (北東から)	集積された丸石
	3	29区27号配石 (北から) 側縁上の平積み石		6	29区42号配石 (北から)	丸石下の状況
	4	29区27号配石 (東から) 平積み石上の小礫を取り除く。		7	29区42号配石 (北東から)	
	5	29区27号配石 (北から) 平積み石上の小礫を取り除く。		8	29区43号配石 (東から)	埋没状況
	6	29区27号配石 (東から) 上面の平積み石を外す。	P L 73	1	29区44号配石 (西から)	埋没状況
	7	29区27号配石 (東から) 掘り方		2	29区44号配石 (西から)	底面の柱穴は18区3号住居の柱2
	8	29区27号配石 (北から) 掘り方		3	29区44号配石 (西から)	掘削の状況
P L 67	1	29区27号配石 (南から) 掘り方。右手に重複する39号配石。		4	29区45号配石 (北から)	埋没土の調査
	2	29区28号配石 (東から) 確認状況		5	29区46号配石 (東から)	深鉢出土状況
	3	29区28号配石 (西から) 遺物出土状況		6	29区46号配石 (北から)	深鉢出土状況
	4	29区28号配石 中空土偶 (18) の出土状況		7	29区46号配石 (東から)	掘り方
	5	29区28号配石 中空土偶 (18) の出土状況		8	29区46号配石 (北から)	掘り方
	6	29区28号配石 丸石の出土状況。中央左手に中空土偶。		1	29区47号配石 (北から)	
	7	29区28号配石 丸石の出土状況		2	29区47号配石 (北から)	
P L 68	8	29区29号配石 (東から)		3	29区47号配石 (北から)	
	1	29区29号配石 (北から)		4	29区48号配石 (南東から)	上面の礫群
	2	29区30号配石 (北から) 北東部の状況		5	29区48号配石 (南東から)	掘り方
	3	29区30号配石 (北から) 中央部の状況		6	29区48号配石 (南東から)	
	4	29区30号配石 (北東から) 中央部の状況	P L 75	1	29区49号配石 (南から)	
	5	29区30号配石 (北東から) 北東部の石棒・丸石の出土状況		2	29区50号配石 (東から)	
	6	29区30号配石 (北から) 石棒 (20) の出土状況		3	29区52号配石 (南東から)	
	7	29区30号配石 (北から) 東部の大型礫群		4	30区4号配石 (南東から)	
P L 69	1	29区31号配石 (南から) 上方は36号配石		5	30区4号配石 (南東から)	
	2	29区31号配石 (南から) 埋没土の調査		6	30区4号配石 (南から)	南半部分の礫
	3	29区31号配石 (東から)		7	30区4号配石 (南から)	南半部分の礫
	4	29区31号配石 (南から)	P L 76	8	30区7号配石 (南西から)	板石
	5	29区32号配石 (東から) 埋没土の調査		1	30区7号配石 (南から)	掘り方
	6	29区30号配石 (北から) 石棒 (20) の出土状況		2	30区8号配石 (南から)	確認状況
	7	29区30号配石 (北から) 東部の大型礫群		3	30区8号配石 (南から)	掘り方調査
P L 69	1	29区31号配石 (南から) 上方は36号配石		4	30区15号配石 (南から)	
	2	29区31号配石 (南から) 埋没土の調査		5	30区16号配石 (南から)	
	3	29区31号配石 (東から)	P L 77	6	30区17号配石 (北から)	
	4	29区31号配石 (南から)		7	30区21号配石 (西から)	
	5	29区32号配石 (東から) 埋没土の調査		8	30区22号配石 (北西から)	
	6	29区30号配石 (北から) 石棒 (20) の出土状況	P L 78	18区1号・7号列石、20区5号列石、28区1号・2号列石出土遺物		
	7	29区30号配石 (北から) 東部の大型礫群		28区2号・3号・5号・7号・8号列石出土遺物		

P.L.79	28区12号列石、29区3号列石出土遺物	P.L.102	28区4号・6号・7号配石出土遺物
P.L.80	29区3号・4号列石出土遺物	P.L.103	28区7号・8号・9号・10号・11号・13号・14号配石出土遺物
P.L.81	29区4号列石出土遺物	P.L.104	28区15号配石出土遺物
P.L.82	29区4号・5号列石出土遺物	P.L.105	28区17号配石、29区1号・3号・4号・7号・8号配石出土遺物
P.L.83	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.106	29区9号・10号・11号・12号・13号・14号・15号・17号・18号・20号配石出土遺物
P.L.84	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.107	29区16号配石出土遺物
P.L.85	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.108	29区16号配石出土遺物
P.L.86	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.109	29区21号・23号・24号・26号配石出土遺物
P.L.87	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.110	29区26号・27号配石出土遺物
P.L.88	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.111	29区28号・29号・30号・31号・32号・33号配石出土遺物
P.L.89	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.112	29区30号配石出土遺物
P.L.90	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.113	29区30号・34号配石出土遺物
P.L.91	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.114	29区35号・36号・37号・39号・42号・43号配石出土遺物
P.L.92	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.115	29区42号配石出土遺物
P.L.93	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.116	29区44号・45号・46号配石出土遺物
P.L.94	29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物	P.L.117	29区46号・47号・48号配石出土遺物
P.L.95	18区3号・4号・6号・8号・10号・11号・14号・15号配石出土遺物	P.L.118	29区49号・50号配石、30区4号配石出土遺物
P.L.96	18区15号・16号・17号・18号配石出土遺物	P.L.119	30区4号・8号・15号・16号配石出土遺物
P.L.97	18区33号・39号・40号・41号配石出土遺物		
P.L.98	18区44号配石、19区6号・8号配石、20区2号・3号配石出土遺物		
P.L.99	20区6号・9号・10号・14号・15号・23号配石出土遺物		
P.L.100	20区23号・24号・25号配石出土遺物		
P.L.101	20区25号配石、28区2号・3号・4号配石出土遺物		

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表	10頁
表2	横塚中村遺跡遺構敷集計表	11頁
表3	横塚中村遺跡列石遺構一覧	16頁
表4	横塚中村遺跡配石遺構一覧	114～115頁
表5	横塚中村遺跡配石墓一覧	341頁
表6	横塚中村遺跡 列石・配石遺構出土土器総量一覧表	346～347頁
表7	横塚中村遺跡 列石・配石遺構出土土器総量一覧	348～349頁
表8	横塚中村遺跡 列石・配石遺構出土黒曜石総量一覧	350～351頁
表9	横塚中村遺跡水洗選別資料一覧表	352頁

抄 録

書名ふりがな	よこかべなかわらいせきかつこじゅういち じょうもんじだいのれっせきはいせきこうへん
書名	横壁中村遺跡(11) 縄文時代の列石・配石遺構編
副書名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	34
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	492
編著者名	石田 真、藤巻幸男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20100319
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	よこかべなかわらいせき
遺跡名	横壁中村遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあぎよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	24
北緯(日本測地系)	363210
東経(日本測地系)	1384025
北緯(世界測地系)	363221
東経(世界測地系)	1384013
調査期間	19960401 - 20061231
調査面積	30000
調査原因	ダム建設
種別	集落
主な時代	縄文
遺跡概要	縄文-列石18+配石120-縄文土器+石器
特記事項	縄文時代後期の弧状列石と配石墓群
要約	吾妻川右岸段丘上の北向き斜面に形成された縄文時代中期～後期の大規模集落で、今回は後期の弧状列石と配石墓群を中心とする報告。遺構では、石敷きの配石墓や大小様々な丸石を集積した配石遺構などがあり、遺物では、一対で出土した赤塗りの耳飾り、お腹の大きな中空土偶、三角柱形の石冠などが注目される。

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成6年3月18日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成6年度から実施されている調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、ハッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成6年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は7遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成6年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も平成6年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成6・7年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成8年度から調査が行われ

ることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する7遺跡のうち上野Ⅳ遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

第2節 調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成8年度より行われた。平成8年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示した通りであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終了した年度を表している。各年度ごとの調査経過を調査日誌を元に抜粋する。

平成8年度 調査事務所の設置、調査区への進入路等の造成工事等を行ったため、本調査は7月1日開始となった。本年度は担当者は3名による1班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

平成9年度 前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は4名の配置であったが、7月から9月まで1名は久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000㎡であ

第1章 調査の方法と経過

る。11月3・4日に当事業団主催の平成9年度出土文化財巡回展示会がハッ場地区で実施され、遺物・パネルを出展した。

平成10年度 平成8・9年度の継続調査である。担当者は年度当初4名の配置であったが、うち1名は林地及び西久保1遺跡の調査を担当することになったため、実質3名の1班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

平成11年度 前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は5名、2班の体制であったが、うち2名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは3名、1班での調査となった。4月29日に前年度に検出された大型敷石住居、環状柱穴列などを現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年8月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、8月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は6,200㎡である。

平成12年度 工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者7名による2班体制で開始する予定であったが、1班は林地の調査に対応することとなり、残る1班も、西久保1遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にパンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡を併せて調査し、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。調査面積1,800㎡であった。

平成13年度 発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が6月4日となった。本年度の調査対象地は遺跡の中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている山根沢の西側は、工事行程にあわせて調査が終了した地

区を順次、工事側に引き渡ししながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月1日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の6,200㎡から5,200㎡となった。

平成14年度 本年度より当事業団ハッ場ダム調査事務所が開所し、ハッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は7名の2班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は6月から8月にかけて担当者2名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者4名が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は5,400㎡であった。

平成15年度 前年度の継続調査の18区と9・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初6名の配置であったが、4月から6月は担当者2名が久々戸遺跡の調査を行い、7月から1名が整理事業への異動となった。また11月からは1名が増員となった。調査は前年度からの継続であり、18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であった。

平成16年度 前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者2名による1班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400㎡であった。

平成17年度 国道145号線部分の調査を、担当者5名による2班体制で行った。調査区は9・10区である。調査面積は約14,000㎡であった。

平成18年度 10・20区の平成17年度調査で経塚が検出された地点を中心に、4月1日から4月13日まで担当者3名による短期間の調査を実施した。調査面

積は188m²である。

第3節 調査の方法

(1) 調査の手順

調査は初めはバックホーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑、水田、道路であった。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したのものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがあつた。縮尺については、住居・土坑・配石等は1/20、炉・埋壘・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、バルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35mmモノクローム及びリバーサル、6×7判モノクロームで撮影し、一部6×7判リバーサルも状況に応じて使用している。

(2) 遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名+小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成8年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—」(長野原町教育委員会 1990)によると本遺跡は「観音堂遺跡」「上野IV遺跡」の範囲に入っている。さ

らに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

(3) 調査区の設定

調査区の設定については、1994(平成6)年度から始まったハッ場ダム建設事に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、「ハッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、「長野原一本松遺跡(1)」(群埋文2002)に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、ハッ場ダム建設事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)を使用し、吾妻郡吾妻町(現東吾妻町)大柏木の東部付近を基点(X=58000.00、Y=-97000.00)とした。そして、まずこの基点から1km四方の地区(大グリッド)を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の区(中グリッド)に区分し、東南隅から西に1~10区、次の列を11~20区のように100区に区分した。さらに各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは、東南を基点に西へA~Y、北へ1~25までの番号を付し、組み合わせでグリッド名としている(例:20区A-1)。

本遺跡の調査区は、地区では「27地区」を中心とし、一部「28地区」にかかり、「区」では27地区は「9・10・17・18・19・20・28・29・30区」、28地区は「1・11区」に相当している。遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

第2章 遺跡の環境

ハッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の『長野原一本松遺跡（1）』（群埋文2002）および『ハッ場ダム発掘調査集成（1）』（群埋文2003）に評述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

第1節 地理的環境

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬭恋村、六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県境の烏居峠付近に源を発し、東流して渋川市で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点であり、また、本遺跡から約6km下流には「関東の耶馬溪」の異名をとる国指定名勝である吾妻渓谷がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。

本遺跡の立地する長野原地域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位、上位、中位、下位の4段丘面に区分されるが（長野原町1993）、このうちの最上位段丘と上位段丘の2面は約21,000年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を数10m以上の厚さで埋めつくした応柔泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘は吾妻川からの比高が約80～90mであり、泥流流下後にほとんど浸食されずに段丘面となったもの、上位段丘は比高が約60～65mであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら2面の上には、約11,000年前に噴出した浅間一草津黄色軽石（As-YPk）を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘は比高30m前後で、

本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も広く分布している。低位段丘は比高約10～15mである。

横壁中村遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸の中位段丘上に立地する。標高は約570mで、調査区北を流れる吾妻川とは比高差40mほどの急峻な段丘崖により隔てられている。また南側には山地が迫り、西は深沢、東は東沢という2本の沢によって深く区画され、調査区のほぼ中央にも山根沢という小沢が北流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖錐堆積物が、吾妻川により形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。調査区内の比高差は約15mである。調査区内には、この崖錐堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘については、離水時期は明らかでないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPkの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな影響はないと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居の覆土の中には、浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在し、また江戸時代の1783（天明3）年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流により埋没した畑跡が検出されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5kmに位置する標高1,124mをはかる岩峰で、100万年ほど前に活動していた岩峰火山の溶岩に由来すると考えられている。南側を除いた3方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状とあわせ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを

推測するにたる奇峰と言える。

第2節 歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた基場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑1岩除遺跡が発掘調査された。

昭和62年からは八ッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。(その後の調査で、平成17年3月現在では214遺跡に増加している。)これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成6年からは八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査をもとに横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

旧石器時代 長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間一草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡(14)から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が1点出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が実施されれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

縄文時代 長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑1岩除遺跡(2)があげられる。奥行4m、幅40mの大規模な岩除遺跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は確認

されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に人間が生活していたことを証明する遺跡である。早期では、榎木Ⅱ遺跡(27)で多くの熱糸文系土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、竪穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲炉を持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬Ⅰ遺跡(17)でも熱糸文期の住居と田戸下層式期の住居が検出されている。この立馬Ⅰ遺跡では、早期から晩期までのほぼ全ての時期の遺物が出土している。山間の狭隘な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることは、この地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は幸神遺跡(28)、長野原一本松遺跡(29)、坪井遺跡(35)でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野原域を主体とする塚田式、北陸地方の極楽寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また暮坪遺跡(38)では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長畝Ⅱ遺跡(41)では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、榎木Ⅱ遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡(10)で同時期の土坑が検出されており、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

中期になると遺跡数、遺構量ともに大幅に増加する。本遺跡では勝坂式期の住居から中期末まで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただその始まりは本遺跡より若干時期が下り、中期後半の加曾利E式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器とともに中部高地系、特に長野県東部との強い関連が

うかえる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野原一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「柵倉類型」などの資料が出土していることから確認できよう。

後期になると長野原一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曾川B式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野原一本松遺跡のほか、林中原Ⅰ遺跡(20)、上原Ⅳ遺跡(21)、向原遺跡(32)、櫛Ⅱ遺跡(37)、滝原Ⅲ遺跡(44)、古屋敷遺跡(45)、上郷岡原遺跡(48)などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑Ⅰ岩除遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により検出例が増加している。川原湯沼遺跡では水Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出され、久々戸遺跡(31)では水式土器の鉢形土器、立馬Ⅰ遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。本遺跡でも平成15年度の調査で晩期終末から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。検出できた遺構数は少ないが、土器片を中心とする遺物量は多く、県内でも有数のものと考えられる。

弥生時代 長野原町域では、この時期の遺跡は極めて希薄である。遺構では、本遺跡で甕形土器を埋設した前期の再葬墓の可能性のある土坑が検出されているほか、立馬Ⅰ遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度である。また、榎木Ⅲ遺跡(25)、坪井遺跡、外輪原Ⅰ遺跡(42)などで前期から中期の遺物、二社平遺跡(4)で後期の遺物が出土している。

古墳時代 1938(昭和13)年に編纂された「上毛古墳総覧」によれば、長野原町には大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚の2基の古墳が存在するとされている。しかし、現在までに発掘調査によって確認されたものは一つもなく、現時点では東吾妻町の岩島地区が古墳の西限である。集落としては、林宮原遺跡(22)

で1軒、下原遺跡(23)で1軒の住居が確認されているが、いずれも小規模なものである。

奈良・平安時代 奈良時代の遺跡は極めて希薄で、分布調査ではわずかに羽根尾Ⅱ遺跡(40)で確認されただけである。これに対して平安時代の遺跡は多く、97遺跡が確認されている。主な遺跡としては横壁中村遺跡、花畑遺跡(18)、林宮原Ⅱ遺跡、榎木Ⅱ遺跡、長野原一本松遺跡、向原遺跡、坪井遺跡などが挙げられる。各遺跡での住居の検出数は数軒と少ないが、榎木Ⅱ遺跡では、9世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が約30軒とまとまって検出されており、「三家」や「長」と書かれた墨書土器の存在とともに注目される。この地域の平安時代の集落は、榎木Ⅱ遺跡にみられるように9世紀後半に出現し10世紀前半に消滅するものがほとんどであり、特徴的である。特徴的な遺物としては、町立中央小学校の敷地から出土した五塔があり、塔の最上層にあたる屋根部がほぼ完形で残っているもので、現在は同小学校に保管されている。

中世 この時期の資料は柳沢城跡、丸岩城跡(15)、長野原城跡(33)、羽根尾城跡(39)、などの城館跡が中心であったが、近年の発掘調査により遺跡が増えつつある。西久保Ⅰ遺跡(13)、立馬Ⅰ遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡(24)、榎木Ⅱ遺跡、長野原一本松遺跡などで遺構が確認されている。下原遺跡では畑跡や建物跡、二反沢遺跡では区画跡のほか、羽口や鉄滓など製鉄関連遺跡も検出されている。本遺跡においても、石垣を伴う館跡が検出されており、柳沢城跡との関連で注目される。また平成12年度には踏査により金花山磐跡(9)が新たに見つかっている。

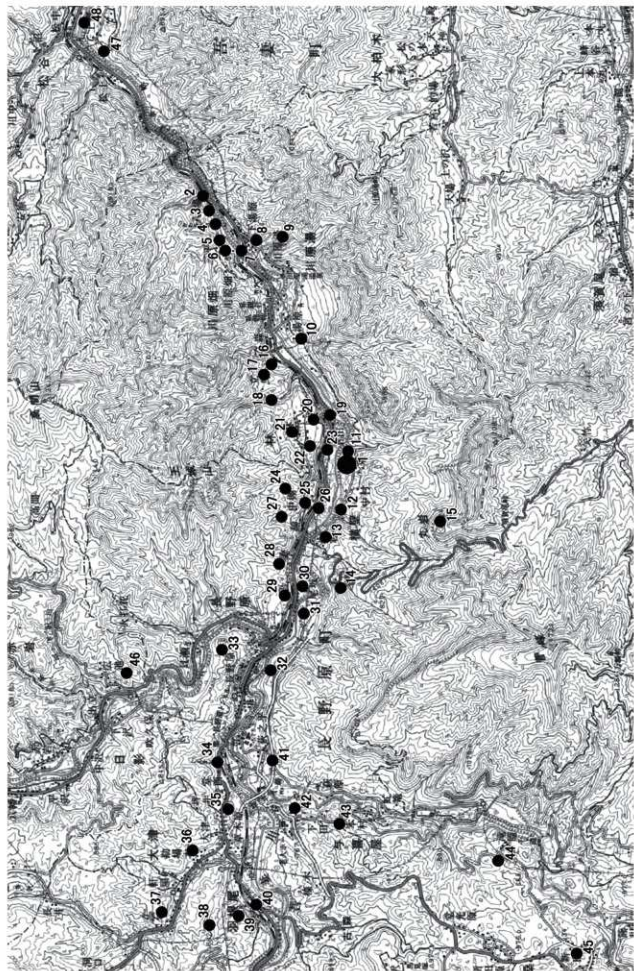
近世 近世の遺跡の大部分は1783(天明3)年の浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物により埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡(7)、西ノ上遺跡(8)、川原湯沼遺跡、下田遺跡(19)、中朝Ⅱ遺跡(26)、尾坂遺跡(30)、久々戸遺跡(31)、小林家屋敷跡(34)などが挙げられる。多くは畑を中心とする生産遺跡であるが、東宮遺跡、尾坂遺跡、

下田遺跡、小林家屋敷跡などでは民家跡も検出されている。特に小林家屋敷跡は、農業・酒造業を営みこの地域の分限者と呼ばれた小林家の屋敷の一部が検出されたものであり、文献との照合もなされ重要な発見である。本遺跡からは墓跡や泥流堆積物により埋没した畑跡が検出されている。また平成17年度調査では経塚を検出し、多数の一字一石経が出土している。

泥流下から発見される遺跡は、旧地表面がそのまま保存されているものが多く、集落や生産域の構成要素及びその関連性を具体的に読み取ることが可能である。泥流の発生した日時が明らかであるため、遺物の時期をほぼ限定することも可能であり、また、通常では残らない建築部材や漆器などの植物遺存体の検出例も多い。今後水没地の調査が進展するにつれ、泥流に埋没した遺跡の調査は更に増えることが予想され、近世農村史研究に多大な寄与をもたらすものと考えられる。

参考文献（番号は表1の文献欄に対応）

- 六合村1973『六合村誌』
- 群理文1998『長野県久々戸遺跡』第240集
- 群理文2002『長野県一本松遺跡（1）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 群理文2003『ハッ場ダム発掘調査集成（1）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 群理文2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 群理文2004『久々戸遺跡（2）・中棚Ⅱ遺跡（2）・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- 群理文2005『横壁中村遺跡（2）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 群理文2005『川原湯湯沼遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 群理文2006『横壁中村遺跡（3）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 群理文2006『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 群理文2006『上郷B遺跡・横石A遺跡・二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 群理文2006『横壁中村遺跡（4）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- 群理文2006『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 群理文2007『下原遺跡Ⅱ』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- 群理文2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 群理文2007『横壁中村遺跡（5）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 群理文2007『長野県一本松遺跡（2）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 群理文2007『上郷岡原遺跡（1）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
- 群理文1998『年報17』
- 群理文2001『年報20』
- 群理文2002『年報21』
- 群理文2003『年報22』
- 群理文2005『年報23』
- 群理文2007『年報25』
- 群馬県史編纂委員会1988『群馬県史 資料編』1
- 塩野新一1972『群馬県吾妻郡長野原町 堰場水遺跡調査（概報）』
- 富田孝彦2000『外輪原遺跡の発生中期土器』『群馬考古学手帳』10
- 長野原町1976『長野原町誌』上巻
- 長野原町1993『長野原町の自然』
- 長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局1979『石塚遺跡略報』
- 長野原町教育委員会1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—』
- 長野原町教育委員会1990『Ⅱ遺跡』
- 長野原町教育委員会1992『長沢Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
- 長野原町教育委員会1996『向原遺跡』
- 長野原町教育委員会1997『滝原Ⅲ遺跡』
- 長野原町教育委員会2000『坪井遺跡Ⅱ』
- 長野原町教育委員会2001『坪井遺跡』
- 長野原町教育委員会2004『町内遺跡Ⅳ』
- 長野原町教育委員会2004『林宮原遺跡Ⅱ』
- 長野原町教育委員会2005『小林家屋敷跡』



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡 (国土地理院1/50,000地形図「草津」使用)

第2章 遺跡の環境

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	文献
1	横壁中村	長野原町横壁	本遺跡。	5, 7 巻
2	石畑1 岩窟	長野原町川原畑	県教委昭和53年度調査。縄文早期から晩期の遺物と獣骨が出土。	30
3	石畑	長野原町川原畑	事業団平成8・9・10年度調査。縄文前期包含層。弥生中期土坑。近世畑。	4
4	二社平	長野原町川原畑	事業団平成8・10年度試掘。弥生後期末土器片。近世畑。	4
5	三平1・Ⅱ	長野原町川原畑	事業団平成16年度調査。縄文前期住居。中世建物。陥し穴多数。	15
6	上ノ平Ⅰ	長野原町川原畑	事業団平成18・19年度調査。縄文中期中葉から後期住居。平安住居。陥し穴多数。	24
7	東宮	長野原町川原畑	事業団平成7・9・19年度調査。近世民家、畑。	4
8	西ノ上	長野原町川原畑	事業団平成14年度調査。近世畑。	6
9	金花山磐跡	長野原町川原畑	町教委・事業団により平成12年度に踏査・確認。中世城跡。	
10	川原湯勝沼	長野原町川原畑	事業団平成9・16年度調査。縄文前期後半の土坑。晩期終末期の円形墓。近世畑。	8
11	横壁勝沼	長野原町横壁	事業団平成6・7年度調査。縄文中期から後期の土器。船先形尖頭器が出土。	4
12	山根Ⅱ	長野原町横壁	事業団平成10・13・18年度調査。縄文中期後半の住居、土坑。	21, 24
13	西久保Ⅰ	長野原町横壁	事業団平成6・10・12年度調査。縄文中期末葉の敷石住居、土坑。中期の水堀以降。	4
14	柳沢城跡	長野原町横壁	町教委平成5年度調査。中世城跡。郭、堀切、土居等検出。	28
15	丸岩城跡	長野原町横壁	中世城跡。	28
16	立馬Ⅱ	長野原町林	事業団平成14年度調査。縄文時代中期初頭から後半の住居。	10
17	立馬Ⅰ	長野原町林	事業団平成13・14年度調査。縄文早期初頭、晩期の住居。弥生中期の住居。薬箱墓。	13
18	花生	長野原町林	事業団平成9～12年度調査。平安住居。陥し穴多数。	4
19	下田	長野原町林	事業団平成7年度調査。近世民家、畑。	4
20	中原Ⅰ	長野原町林	町教委平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。	38
21	上原Ⅳ	長野原町林	事業団平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。近世水路。	23
22	林宮原	長野原町林	町教委15年度調査。古墳住居1軒。平安住居6軒。	39
23	下原	長野原町林	事業団平成12～16年度調査。古墳住居1軒。平安住居2軒。中世建物。近世畑。	5, 14
24	二反沢	長野原町林	事業団平成12年度調査。中世区画。製鉄関連遺物。近世畑。	11
25	楢木Ⅲ	長野原町林	事業団平成10年度調査。縄文前期、後期の包含層。弥生中期の包含層。	4
26	中棚Ⅱ	長野原町林	事業団平成11・15年度調査。近世畑、石垣、道など。	5
27	楢木Ⅱ	長野原町林	事業団平成12・13年度調査。縄文早期初頭の集落。前期、中期初頭の住居。平安住居。中世建物。	20, 21
28	幸神	長野原町長野原	事業団平成8・9年度調査。縄文中期中葉から後半の住居。古代の可能性ある畑。	19
29	長野原一本松	長野原町長野原	事業団平成6～19年度調査。縄文中期後半から後期初頭にかけての拠点集落。	3, 17
30	尾坂	長野原町長野原	事業団平成6・7・11・18・19年度調査。近世民家、畑。	4
31	久々戸	長野原町長野原	事業団平成9～15年度調査。縄文晩期土器。近世畑、道、掘立柱建物。	5, 6
32	向原	長野原町長野原	町教委平成5年度調査。縄文中期から後期の住居。平安住居。	34
33	長野原城跡	長野原町長野原	中世城跡。	28
34	小林家屋敷	長野原町長野原	町教委平成14年度調査。近世礎石建物。土蔵、石垣。	40
35	坪井	長野原町大津	町教委平成3・10年度調査。縄文前期、中期住居。弥生土器。平安住居。	33, 36
36	堀場木石器時代住居	長野原町大津	昭和29年調査。縄文中期後半の住居。群馬県史跡。	26
37	楢Ⅱ	長野原町大津	町教委昭和63年度調査。縄文後期前半の敷石住居4軒。	32
38	暮坪	長野原町羽根尾	町教委平成12年度調査。縄文前期前半の住居。	37
39	羽根尾城跡	長野原町羽根尾	中世城跡。	28
40	羽根尾Ⅱ	長野原町羽根尾	奈良敷布地。	31
41	長嶺Ⅱ	長野原町与喜原	町教委平成12年度調査。縄文前期前半、中期後半の住居。	33
42	外輪原Ⅰ	長野原町与喜原	町教委平成7年度試掘。縄文前後半の土器。弥生土器。	27
43	上ノ平	長野原町与喜原	縄文中期、後期の土器。石器類出土。	28
44	滝原Ⅲ	長野原町志桑	町教委平成8年度調査。縄文中期後半の住居。中期末の敷石住居。	35
45	古屋敷	長野原町志桑	昭和34年発見。後期前半の敷石住居。	28
46	広池	六合村赤岩	群馬大学昭和44年度調査。中期後半の住居。	1
47	土郷A	東吉妻町三島	事業団平成15年度調査。陥し穴多数。埴原式土器出土。	6
48	土郷原	東吉妻町三島	事業団平成14年度調査。縄文中期後半から後期前半住居。近世民家、畑。	18

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で堅穴住居230軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「九岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後3時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで弥生土器が少量出土している。前期では、初頭の花積下層式から諸磯c式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑はいくつか確認されている。住居が出現するのは勝坂式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成され

る。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。後期後半以後の様子を示す材料は少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つと見て良いだろう。

弥生中期前半期の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後、本地域に集落が戻るのは9世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が数軒確認され、炭化した床材が遺存する焼失住居跡も検出されている。

中世になると本地域には、海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世の館が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓や塚塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は、平成16年度までに調査された縄文時代の列石・配石遺構について報告する。表2は現段階における本遺跡の遺構種別ごとにその数を集計したものである。本遺跡の整理は継続中であるため、今後も遺構数の変更される可能性があることをご了解いただきたい。

表2 横壁中村遺跡遺構数集計表（平成8～16年度）

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
堅穴住居		1	3	27	52	104	19	18	13	237
土坑	縄文			86	110	272	11	21	28	528
	弥生				4					4
	平安			1	1					2
	中世以降			161	134	170	2	1	4	472
掘立柱建物	縄文		4		6		1			11
	中世			3	7					10
埋設土器		縄文	2	23	9	27	4		2	67

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
配石遺構				42	17	28	17	53	15	172
列石遺構			7	4	5	12	4			32
集石遺構			1		4					5
環状柱穴列	縄文			2					1	3
柱穴列	縄文			1				1		2
	中世					1				1
焼土	縄文		1	2	2			2	1	8
	中近世			12	6	16				34
埋設河道				1	5					6

第2節 基本土層 (第3図)

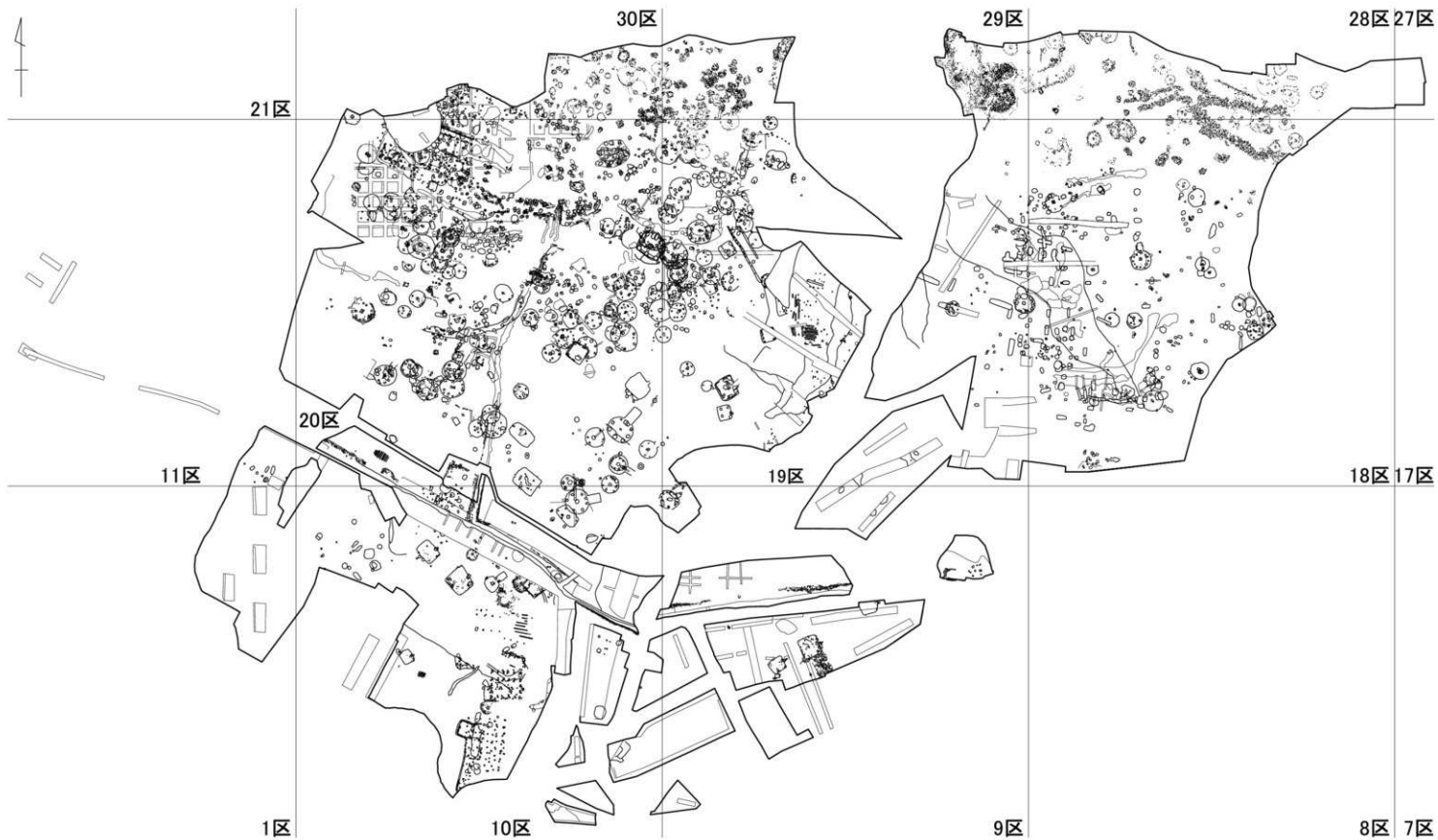
本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返し堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層まで確認しているが、この10層が1箇所ですべて揃う

断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。

今回の報告対象となる縄文時代中期の遺構は、土層としてはⅤ・Ⅵ層に該当するが、第1章本文中で「地山の黄色砂質土」と呼んでいるのは、Ⅷ層に該当する。

Ⅰ	Ⅰ層 表土 (耕作土)
Ⅱa	Ⅱa層 浅間A泥流
Ⅱb	Ⅱb層 浅間A軽石
Ⅱc	Ⅱc層 浅間A軽石下畑の耕作土
Ⅲ	Ⅲ層 淡褐色土 軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区1号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。
Ⅳ	Ⅳ層 灰黒褐色土 やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。
Ⅴ	Ⅴ層 黄褐色土 やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曾利B式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅷ層ないしはローム層の2次堆積の可能性が高い。
Ⅵ	Ⅵ層 灰褐色土 締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫 (山石) を含む。
Ⅶ	Ⅶ層 西側縁辺に特有な土壌で、層位はⅧ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土壌も確認されている。
Ⅷ	Ⅷ層 黄褐色粘質土 崩落したローム層の2次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考えられる。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。
Ⅸ	Ⅸ層 黒褐色粘質土 硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。
Ⅹ	Ⅹ層 黄色砂礫層 吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。

第3図 横壁中村遺跡基本土層



第4図 横壁中村遺跡全体図

0 40m

第3節 縄文時代の列石遺構

ここでは縄文時代の列石遺構について報告するが、それに先だって本遺跡での調査経過と礫を主体とする遺構についての取り扱いを述べておきたい。

本遺跡の発掘調査は平成8年度から開始された。当初に調査対象となったのは吾妻川に面した28区で、当時はグリッドを組んで表土層から手掘りで発掘が始まった。表土層を除去すると直ぐに多量の礫が表れ、直線的に並ぶものや、集積されたように集中する箇所があちこちに認められた。やがて調査範囲は南側に接する18区にも一部拡張され、調査区の全面にわたって列石遺構と配石遺構が展開していることが判明した。

この地点の発掘調査には長い時間を要した。それは、この地点が地山に非常に多くの礫を含むため、遺構認定が困難を極めたことに起因する（第6図、PL7参照）。礫の並び方が人為的なものなのか、それとも自然に形成されたものなのか、判断に迷うものであり、少しでも可能性のあるものは配石として調査を行った。そのため、18区・28区で実際に配石として調査した数は、ここに報告する数の数倍にのぼる。しかし、調査後に直接の調査担当が再検討し、人為的な可能性がないと考えられるものを除外して、今回の報告となっている。そのため、今回報告する配石の中にも、人為でなく自然に形成されたものも含む可能性があり、また除外した中に人為のものがある可能性もある。

ところで、本遺跡の発掘調査は諸般の事情で長期に及んでおり、調査担当者も20名以上となる。その間で、遺憾ではあるが遺構に対する認識や判断も変化している。例えば、平成11年度以後は人為的遺構と判断するための材料の一つとして、使用されている礫の種類と使用方法をデータ化を試みており、本報告でもそれを図面上に明示した。

具体的には、本遺跡の地山に含まれる礫は基本的に粗粒安山岩亜角礫に限られるが、遺構には川原から調達した円礫（川原石）といわゆる鉄平石が多種

される。円礫は、一抱えもある大形のものから5cmほどの小さなものまであり、形状は球形、扁平形、棒状など様々である。遺構を注意深く観察すると、小さな円礫も多量に持ち込まれていることに気付く。礫種は安山岩と白砂川系の石英閃緑岩が多く認められ、吾妻川本流から持ち込まれたと考えられる。遺跡に接する吾妻川は30m以上の断崖であり、ここから直接調達するのは不可能であろう。鉄平石は特に敷石住居で多用されるもので、本地域のランドマークでもある「丸岩」の麓などの周囲から持ち込まれたものであろう。ここで言う円礫と鉄平石は、本遺跡の地山や遺跡周囲の沢では見出すことができない。つまり、明らかな意図をもって遺跡外から持ち込まれ、遺構構築にあたって使用されたものと判断できる材料の一つと見ることができる。当然、転用も行っているであろう。

礫の使用方法とは、扁平な礫を意図的に縦位に設置したもの等を指す。実際には地山に含まれる礫は多様であり、大きな礫の周囲に小さな礫が集積している事例、礫が一定の範囲に集積している事例、扁平な礫が立った状態を留める事例などは、地山中にも数多く見られる。そのなかから人為的な遺構を区別するためには、意図的造作であることを示す一定の規範の見極めが必要であり、総合的な判断が要求される。ここには判断する側の個性がどうしても反映されるだろう。

また、本遺跡には中世～近世の遺構と、現在まで続く石垣その他の石造物、さらには畑耕作に伴うヤックラ、石をかたずけた土坑、植木の植栽坑なども数多く存在する。ヤックラとは、石の多い畑地等で、耕作に邪魔な石を道沿いや通路に沿って集積したもので、本地域では各地で普通に見られる造作物である。本遺跡は縄文時代中期後半～後期を中心とする大規模集落であり、中世～現在の構造物中には縄文時代の土器・石器も数多く含まれており、ローム層の堆積がないことから、土層を基準にした時期認定も難しい。本遺跡の発掘調査では、これらのことを念頭において臨むことになる。

第3章 発見された遺構と遺物

さて、第5図は本遺跡の縄文時代の列石・配石遺構全体図である。縄文時代の住居等の遺構にはトーンをかけた。

先述のとおり、北側に接する「吾妻川」の現河床とは30m以上の断崖で画されている。遺跡の東側にある「東沢」は、8m以上の落差がある深い沢だが、現在は豊富な水量を供給している。遺跡の中央を横断する「山根沢」は、適度な水量を保つ小さな沢で、東沢と共に本遺跡を支える水源だったと考えられる。現在は沢沿いの僅かな水田を潤す給排水路として名残を留める。18区から19区の山根沢に向かって斜めに走る「埋没谷」は、おそらくこの段丘面が形成される段階で東沢が変流した痕跡で、発掘調査で大量の中期後半～後期前半期の遺物が出土している。

本遺跡は、吾妻川右岸段丘上に立地する縄文時代中期後半～後期前半を中心とする大規模集落である。遺跡地は吾妻川に向かって傾斜する北向き緩斜面であり、詳細にみると、中央を横断する山根沢の東側は北西に傾斜し、西側では北東に傾斜している。縄文時代の遺構はこの斜面のほぼ全域に分布するが、特に中期後半には山根沢の西側に環状集落を形成している。

本遺跡で確認された列石遺構は、26基あり、このうち特定住居と関連する既報告分と欠番を除いた18基について、ここで取り上げる。

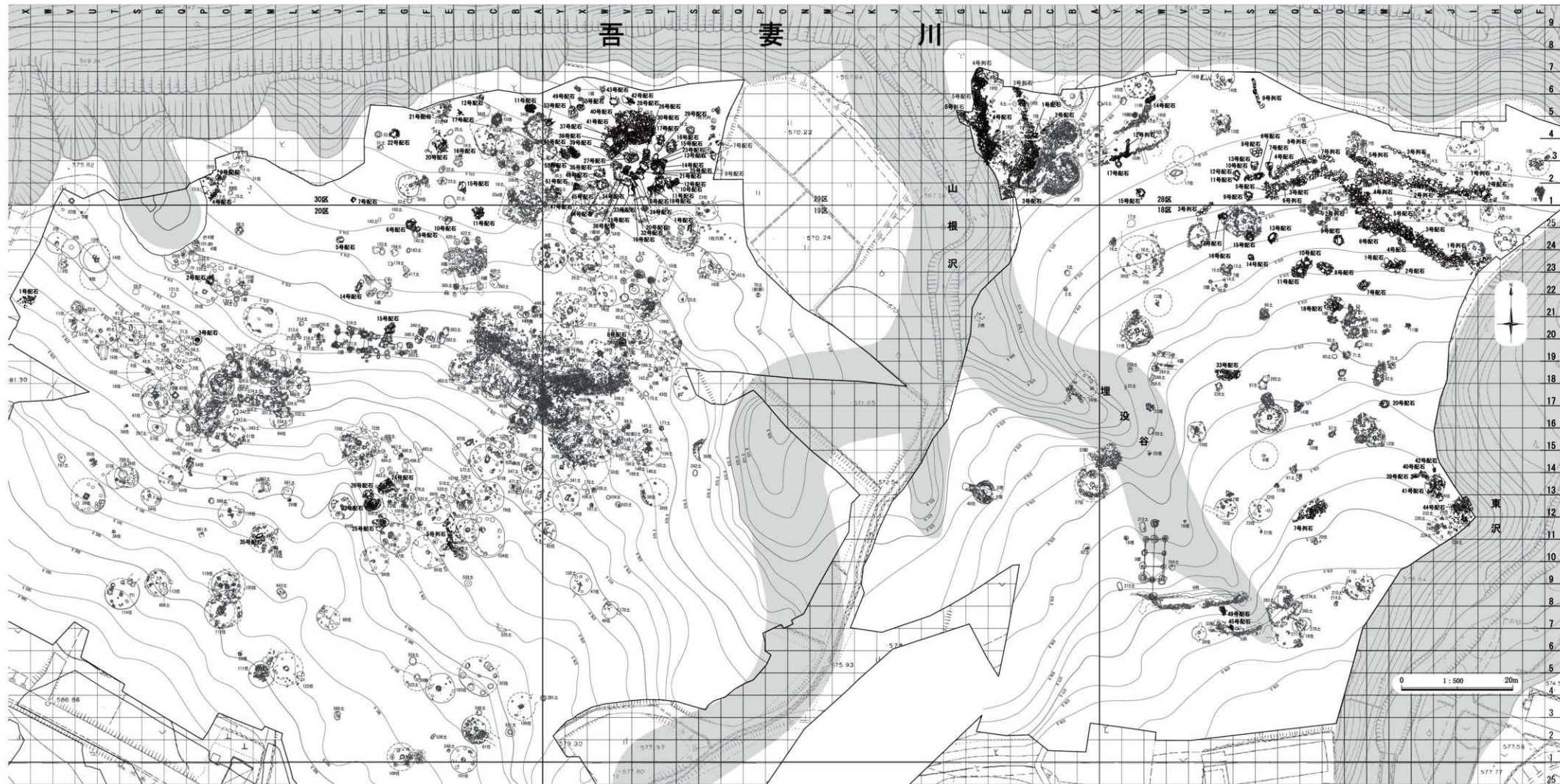
ここで報告する列石遺構のうち、18区から28区に展開する一群と山根沢の東側に面した29区の一帯が主要な遺構群である。いずれも山根沢の東側にあるが、前者は東沢寄りの広い緩傾斜面を占有するように配置されるのに対し、後者は水場である山根沢沿いの狭い急傾斜地に張り付くように配置されている。前者は、発掘当初から環状列石の一部ではないかと想定されていた遺構群であるが、地山礫が大量に散布する地区にあって遺構認定が難しく、また時期認定となる材料も乏しく、疑問点の多い一群である。一方、後者は縄文時代後期の環状列石との関係が問題となる。

その他には、18区7号列石、20区5号列石、28区9号・12号列石があるが、いずれも単発的な事例である。

表3 横壁中村遺跡 列石遺構一覧

単位12m

区	遺構番号	調査年度	グリッド		遺物の重層	方向	長さ	幅	時期	備考
			起 点	終 点						
18区	1号列石	1998	18-1-23	28-O-2	18区3住、18区3号-6号配石	N56度W	17	2	中期末-後期初頭	18区2号列石に続く
18区	2号列石	1998	18-M-25	28-M-1	28区9住(加E3)	N30度W	10.5	3-4	中期末-後期初頭	18区1号列石に続く
18区	3号列石	1998	28-T-1	18-U-25	-	N56度E	38	0.7-1	中期末-後期初頭	28区6号あるいは8号列石に続く
18区	7号列石	2002	O-12	O-11	18区34・35号配石、18区1号右石	N62度E	7	1.5-2	中期末-後期初頭	
20区	5号列石	2003	D-10	E-12	20区96住(加E3)		7		加管埋設3式	住居の可能性あり
28区	1号列石	1998	H-1	J-1	28区1号配石、5号住居(加E3)	N83度W	9	1-2	中期末-後期初頭	28-2号列石に接続
28区	2号列石	1998	J-1	L-1	28区6住(加E3)	N68度W	6	2	中期末-後期初頭	28-2・4号列石に挟まれる
28区	3号列石	1996-98	J-2	M-3		N64度W	13	0.4-1	中期末-後期初頭	
28区	4号列石	1996-98	L-1	N-2		N84度W	9	2-3	中期末-後期初頭	28-2号列石に接続
28区	5号列石	1998	M-2	N-3	28区8号住居(加E3)	N67度W	4.5	1.2-1.8	中期末-後期初頭	28-4号列石に接する
28区	6号列石	1996-98	O-2	R-1	28区3号-5号配石	N70度E	10.5	1-1.5	中期末-後期初頭	28区8号列石と並走する一連の遺構
28区	7号列石	1998	O-2	O-3		N70度W	3	1	中期末-後期初頭	28区8号列石と18区1号・2号列石をつなぐ
28区	8号列石	1996-98	O-2	O-3	28区4号配石	N71度W	6	1-1.2	中期末-後期初頭	九島跡に配置されたことを示す断片
28区	9号列石	1997	R-5	R-6		N16度W	36	0.6	中期末-後期初頭	中継以後の右石の可能性もあり
28区	12号列石	1999	X-3	Y-3	28区10号列石、12号配石				堀之内1式	住居に付く可能性あり
29区	3号列石	1999	D-1	D-6	29区7号・10号・15号住及び1号・3号配石と重層し、これらに切る		20	1-2	後期	左右側を挟む。29区3号住居の西5mに伴う環状列石の可能性が高い
29区	4号列石	1999	E-2	F-7	29区16号-18号・19号・20号住居及び5号配石を切る	N3度W	17	1-2	後期-晩期初頭	左右側と土器帯を挟む。3号列石と一連の遺構で、水場(山根沢)との関連が強く、晩期初頭まで残存する可能性が高い。
29区	5号列石	1999	F-4	G-5	29区4号列石に接続	N4度W	6	1	後期-晩期初頭	4号列石と一連の構造



第5図 縄文時代の列石・配石遺構分布図

1、18区列石遺構

18区では1号から7号までの7基の列石遺構を確認した。このうち4号は埋没河道中にあり、後日報告の予定である。5号・6号は18区19号住居の西側にあり、同住居に伴う一連の遺構と判断し、昨年度に刊行した横壁中村遺跡(8)ですでに報告済みである。そのため、ここでは1号・2号・3号・7号の4基について報告する。

これらのうち、1号～3号列石は、28区1号～8号列石とともに、平成8年に本遺跡の発掘調査が開始された当初に確認された遺構で、手掘りで表土を除去した状態で最初に確認された遺構にあたる。この地区は地山土中に大量の礫が含まれているが、発掘当初に表土を掘削した段階ではまだ地山土に達していないため、地山礫は所々に集積しているものの、散布が淡い空白部も認められたため、石列は比較的明瞭に認識できた部分も多い。つまり、列石は地山土の上層にあたる暗褐色土中にあり、その一部は表土に食い込んだ状態であった。住居等の他の遺構は、これらの列石遺構の調査の進展に伴って周辺部でその後確認されたものである。

第7図やPL3他をみてもわかるように、列石遺構は地山礫の上に乗っている様に見えるが、列石に使用されている礫はほとんどが地山土に含まれる粗粒輝石安山岩亜角礫であり、他の遺跡事例で確認されているような、他所から持ち込まれた川原石を配置した形跡は認められない。山石が多い当地域では、江戸時代から現在に至るまで、畑地の農道や地境に耕作の邪魔になる石を集積する風習があり、地元でこれを「ヤックラ」と呼んでいる。一見すると、列石のなかにも雑然と礫を集積したような状態も見受けられるが、明らかに人為的に並べられた状態も看取される。

なお、ここで扱う列石は、調査時に若干の食い違いや空白部を単位として遺構名称を与えており、配石遺構が重複するものも多いが、調査担当の意思を尊重し、これに従っている。

18区1号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 18区1-23～28区0-2グリッド

経過 本遺跡の発掘当初に確認された遺構の一つで、西側に接する2号列石と一体の構造と考えられ、北側に隣接する28区1号～8号列石と共に一群をなすものであろう。

表土を除去した時点ですでに、幅約2mに集積された地山礫が東南東から西北西に直線的に延びた状態で確認された。この地点は地山礫が多量に存在するが、本列石の周囲は西側の一部を除いて礫の散布が少なく、本列石中の礫の集積状況は際だって見える。

重複 本列石中に3号～6号配石が重複するが、調査者は一体の構造と捉えている。また、東側で3号住居と一部重複し、同住居の上面を覆う。

形状 幅約2mに集積された地山礫が、東南東から西北西に向かって約17mの長さで直線的に延び、東端部は北東に向かって湾曲し、西端部は南側に方形に拡幅している。集積された礫の範囲は比較的よく揃っているが、列状に並べたり組んだりしたような規則的な配列は認められず、雑然と集積された状態を呈する。

確認時はやや小さな礫が数多く集積した状態であるが、下面は50～100cmほどの大きな礫が多く、上面に比べて礫群の幅は揃っているが、礫が密接している部分と空白のあいた部分があり、一様ではない。また、大型礫のなかには地山中の礫が地表に突き出した部分、つまり自然物も認められる。

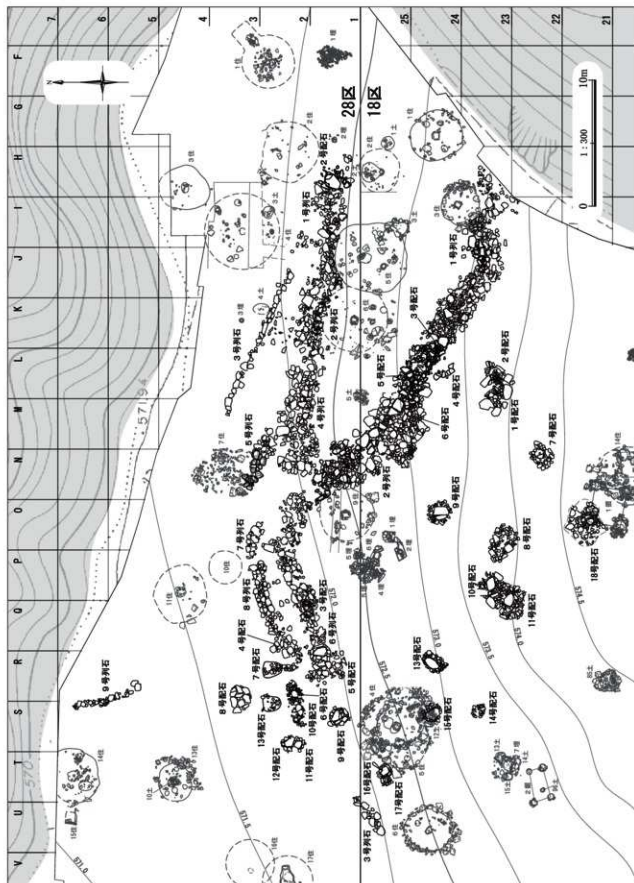
下部遺構 確認されていない。

石材等 ほとんど全てが地山土に含まれる礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫で、30～60cmの礫が多い。

方位 N56度W

遺物 礫中及びその下部から、中期後半を中心とする土器と若干の石器類が出土している。

土器は、中期中葉から後期前半のものが総数123点出土している。主な土器は加曾利E3式で、いずれも破片であり、重複する18区3号住居及び隣接す



第6図 18・28区列石・配石遺構分布図



第7図 18・28区列石・配石遺構分布図（概況図）

第3章 発見された遺構と遺物

る28区5号・6号住居から供給された可能性が高い。

石器は、打製石斧の欠損品1点と石核1点が出土している。

時期 重複する3号住居の上に礫の一部がのっていることから、中期後半加曽利E3式期より新しいと言えるが、下限については判断材料がない。

所見 18区2号・3号列石および28区1号～9号列石と一連の遺構群と考えられるが、時期や性格については疑問点もあり、その点については後に触れたい。

18区2号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 18区M-25～28区M-1グリッド

経過 1号列石の西側に接し、その延長上にのびるが、6～7mで不明瞭となる。遺構の範囲は大半が28区側にあるが、18区扱いとなっている。なお、調査者の意図で1号と分けて単独の遺構として扱われているが、発掘調査は1号と同時に実施されている。

重複 西側を28区9号住居と接するが重複関係は不明瞭である。ちなみに9号住居は中期後半加曽利E3式期に比定される。

形状 1号列石と接する部分に60～100cmの大形礫が3～4個並んだようにあり、その西側には1号列石と同程度の礫が雑然と集積されている。幅は1号より広く3～4mあるが、周縁部のラインは不規則で一定していない。また、下面は礫の大きさや幅が1号列石とよく揃っており、一体の構造物のように見えるが、礫の配置には規則性は認められない。

なお、1号から続く西北西の延長上に2mほどの空白部において集積された礫群（未認定）があり、その先には28区6号・7号列石がある。これらが一連のものであったかどうかは判然としない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 ほとんど全てが地山中に含まれるものと同じ粗粒輝石安山岩亜角礫で、30～60cmの礫が多い。

方位 N30度W

遺物 土器は中期後半から後期前半のものが総数12点出土しており、各時期のものが混在している。

時期 出土遺物も少なく、明確な根拠はないが、1号列石と一連の時期を想定しておきたい。

所見 1号列石と一連の構造物となる可能性が高いと考える。

18区3号列石

調査年度 平成10年度

位置 18区U-25・28区T-1グリッド

経過 調査区の拡張に伴って18区と28区にまたがって確認された。長さは3.6mほどで短いが、28区8号列石と方向や礫の状態が類似しており、その延長上に位置する一連の遺構となる可能性が高いことから、列石として資料化された。

重複 重複する遺構はない。

形状 長さ50～60cmの礫とその間を埋める20～30cmの礫をランダムに組み合わせ、幅0.7～1mの石列を3.8mの長さで直線上に並べている。構築面は礫を多く含む暗褐色土下面にあり、使用された礫はその上ののっている。

下部遺構 確認されていない。

石材等 全て地山中に含まれるものと同じ粗粒輝石安山岩亜角礫である。

方位 N56度E

遺物 確認されていない。

時期 時期認定の材料に乏しいが、1号・2号列石と一連の時期を想定したい。

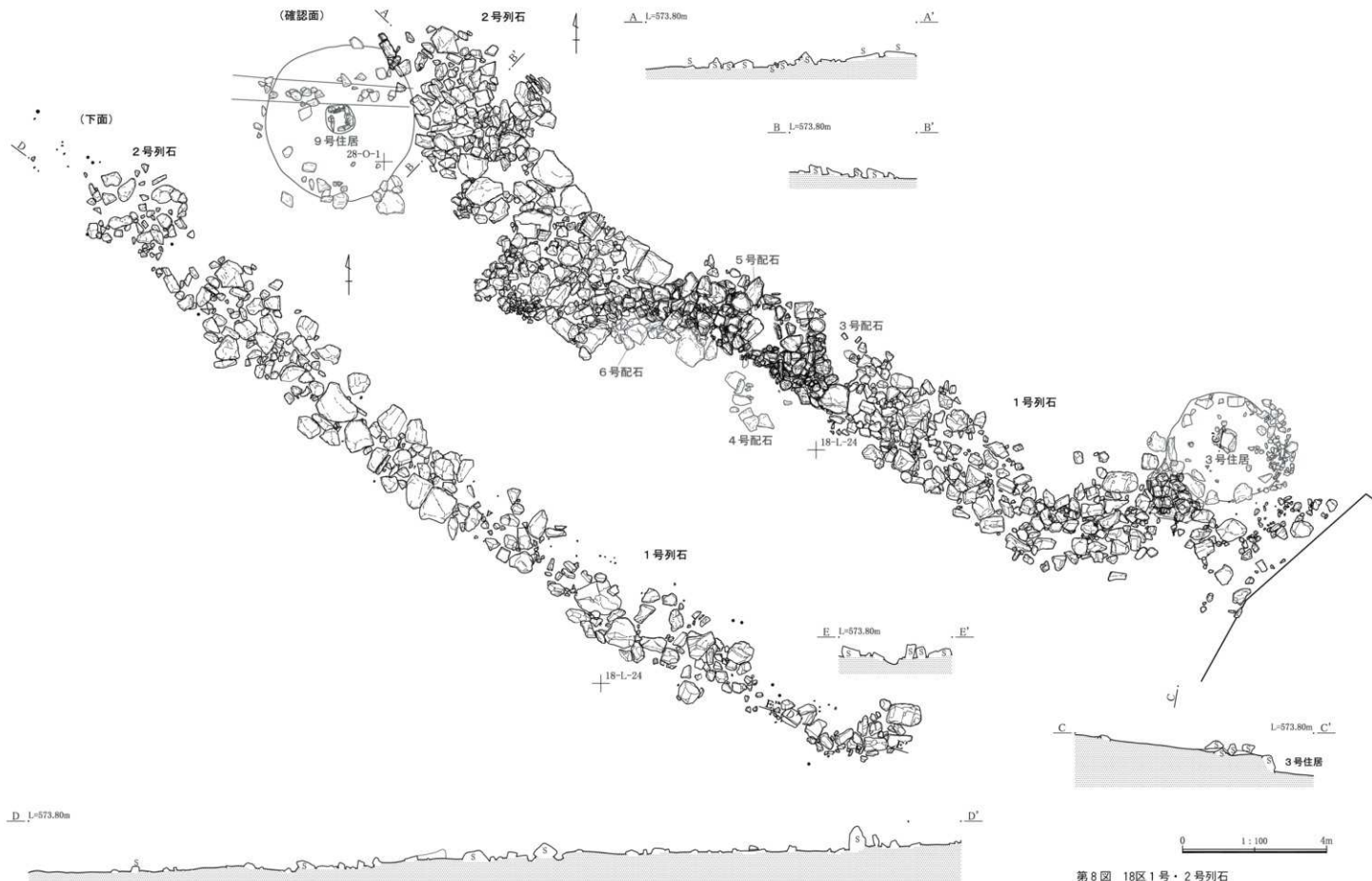
所見 28区6号あるいは8号列石の延長上に位置する、一連の構造物となる可能性が高いと考える。

18区7号列石

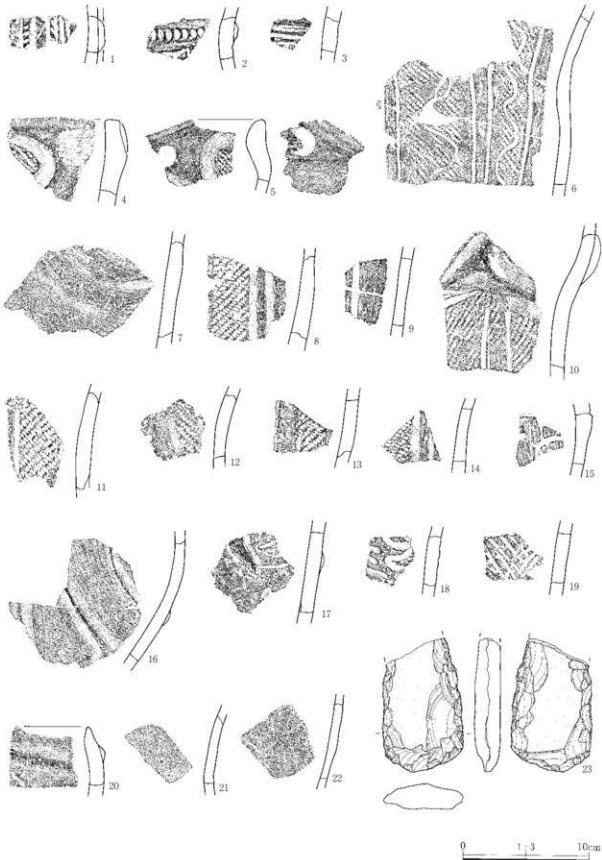
調査年度 平成14年度

位置 18区O-11～12グリッド

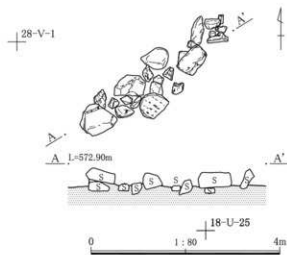
経過 平成14年度から18区全域の発掘調査が実施された。この地区では縄文時代中期後半～後期の遺構が数多く確認されたが、その他にも中世以降の石



第8図 18区1号・2号列石



第9図 18区1号列石出土遺物



第10図 18区3号列石

垣その他も発見された。18区には中央部を南東から北西に向かう埋没谷があり、その先端付近で堀之内1式期の18区19号住居とそれに伴う5号・6号列石が確認された。両列石遺構は18号住居の西側では直線的に走行するが、北側は失われていた。6号列石はその北側に沿って走行する1号石垣に一部を破壊されているが、1号石垣の北東端部から東側にのびる縄文期の石列が僅かに確認され、6号列石の延長部分に該当する可能性があることから、これを7号列石とした。

重複 1号石垣と重複し、これに切られる。一部が石垣造成に伴って動いている可能性がある。

形状 1.5～2mの幅で東北東に直線的にのびる石列が7mにわたって確認された。1号石垣に接する西側部分は、30～60cmの扁平な礫を一列しか残っていないが、この部分は石垣造成によって削平されていることから、これは根石の一部とみられる。使用された礫は20～40cm大のものが主体で、所々に1m大の大形礫や円礫が含まれる。これらの礫が配置当初の状態を保っているかは判然としない。

下部遺構 明瞭な掘り方は確認できなかったが、掘

り方調査で円形状の浅い掘り込みが確認されたことから、これを18区34号・35号配石としたが、本列石の掘り方となる可能性もある。

石材等 ほとんど大半が地山に含まれる粗粒輝石安山岩亜角礫で、他に円礫が数個含まれる。

方位 N62度E

遺物 調査に伴って中期後半を中心とする遺物が出土した。土器は中期中葉から後期前半のものが総数17点出土しており、主な土器は加曾利E3式で、いずれも破片での出土である。石器は多孔石が3点出土しており、他の礫とともに混在した状態で確認された。

時期 中期後半加曾利E3式土器が主体的に出土しているが、いずれも破片資料であり、確定できない。

所見 18区5号あるいは6号列石の延長部分に該当する可能性がある遺構として調査されたが、礫群の配置等に規則性はなく、後期前半の遺物も出土していないことから、一連の遺構とは認めがたい。

2、20区列石遺構

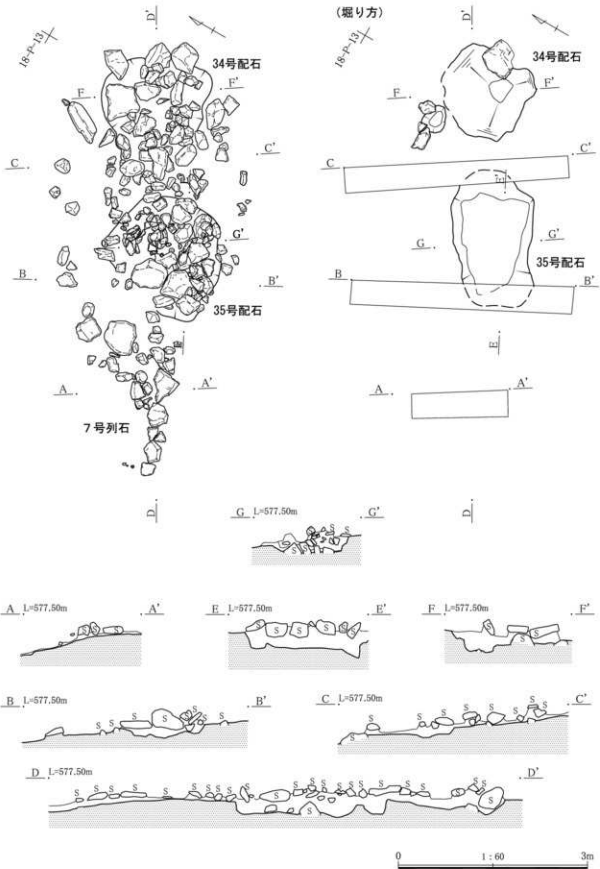
20区では1号から6号まで6基の列石遺構を確認・命名したが、調査段階で1号は欠番、2号・3号・6号は中世以降の石垣・やっくらに変更となった。4号は19区から20区にまたがる良好な弧状列石で、多数の住居に伴うことが判明し、昨年度刊行の横壁中村遺跡(9)ですでに報告済みである。今回は残る5号について報告する。

20区5号列石

調査年度 平成15年度

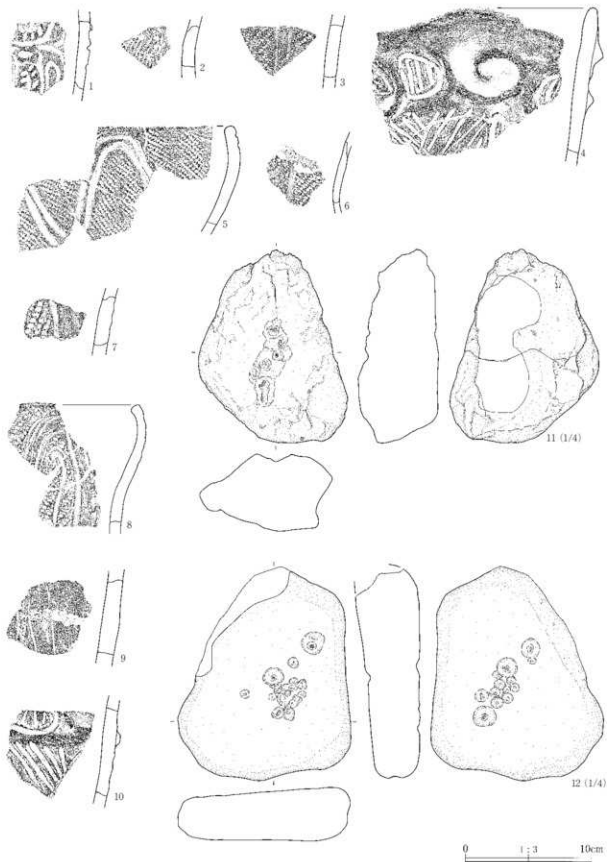
位置 20区D-10～E-12グリッド

経過 20区85号住居と20区96号住居の間で礫を土器が集中して出土した。この地区は中期後半期の環状集落の一面にあたり、住居が重複しながら密集している。確認当初は住居と想定していたが、仮が確認できないこと、礫の密集部分が弧を描いて南北方向にのびていることから、列石に変更された。

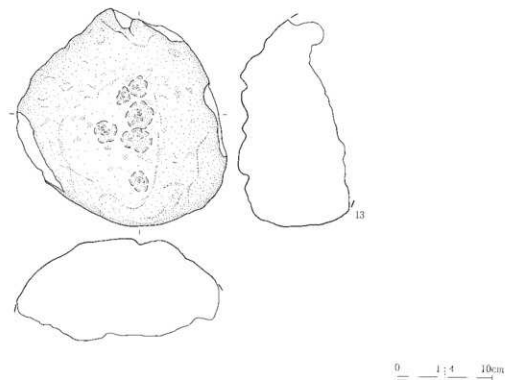


第11図 18区7号列石

第3章 発見された遺構と遺物



第12図 18区7号列石出土遺物（1）



第13図 18区7号列石出土遺物(2)

重複 北西に88号住居、南西に85号住居、東側に96号および104号住居が接近し、当列石の礫と遺物の分布は特に96号住居の上面に大きく及んでいる。

形状 7m前後にわたって南北方向に弧を描くように石列がのびる。礫は60～80cm大の大形礫と20～30cm大の礫で構成されており、大形礫の間を小さな礫が埋めるように配置されている。また、遺構面はほぼ平坦で、大形礫は扁平面を平坦面に置いた状態で配置されている。石列の東側には多量の土器破片が分布していたが、西側では認められなかった。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫で、円礫が少量混じる。

方位 —

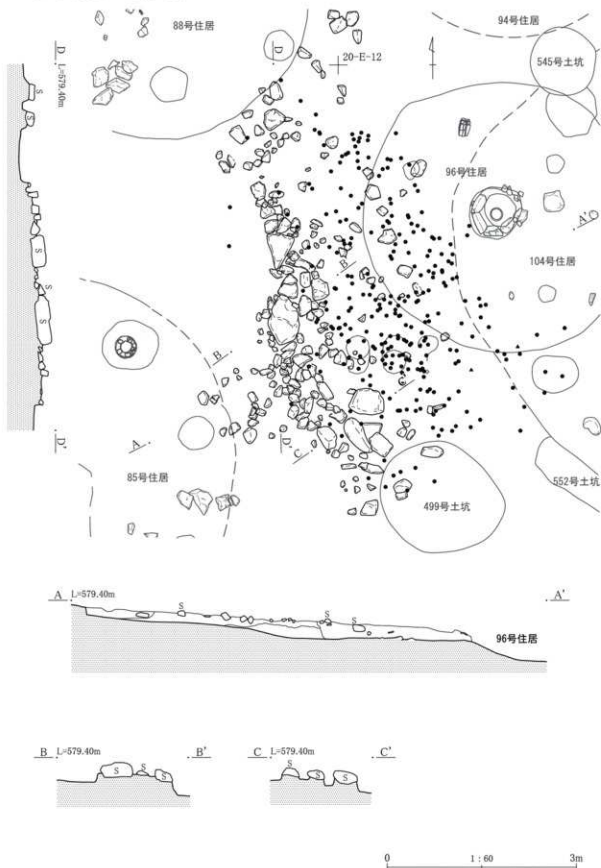
遺物 中期後半から後期前半の遺物が比較的多量に出土した。土器は加曾利E1式から堀之内2式までのものが出土しており、総数は255点である。このうち主体となるのは加曾利E3式期で、かなりま

とまった量が認められた。後期の土器は当遺構の周囲の住居でも同様に出土しており、この周囲に後期の遺構が存在した可能性を示唆しているものと考えている。石器は、石鏃1点、加工痕ある剥片4点、磨石1点の他に、剥片4点、細片7点が出土している。

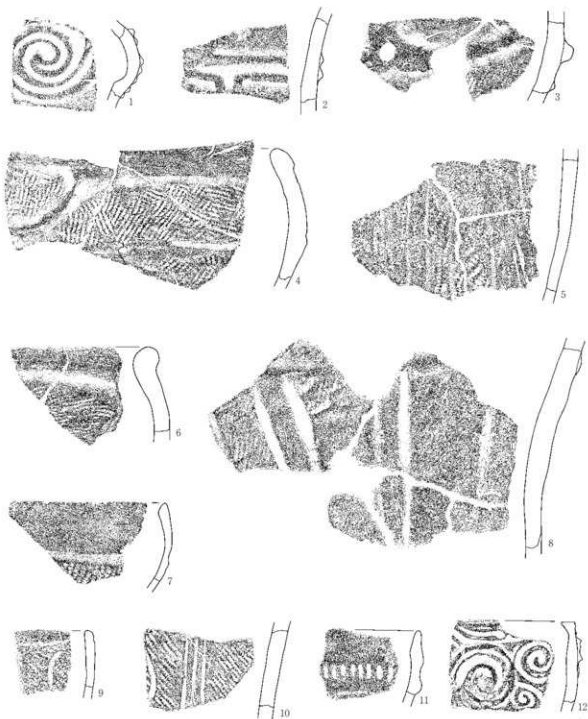
時期 中期後半加曾利E3式土器がまとめて出土しており、その時期に比定されよう。

所見 炉が確認できないことから列石としたが、加曾利E3式段階の土器が多量にまとめて出土しており、その分布は69号住居の上面にも及んでいる。弧状を呈する礫群と土器の分布状況は、中期後半期の住居の覆土中の遺物出土状況と共通しており、やはり住居の可能性が高いと判断する。

第3章 発見された遺構と遺物

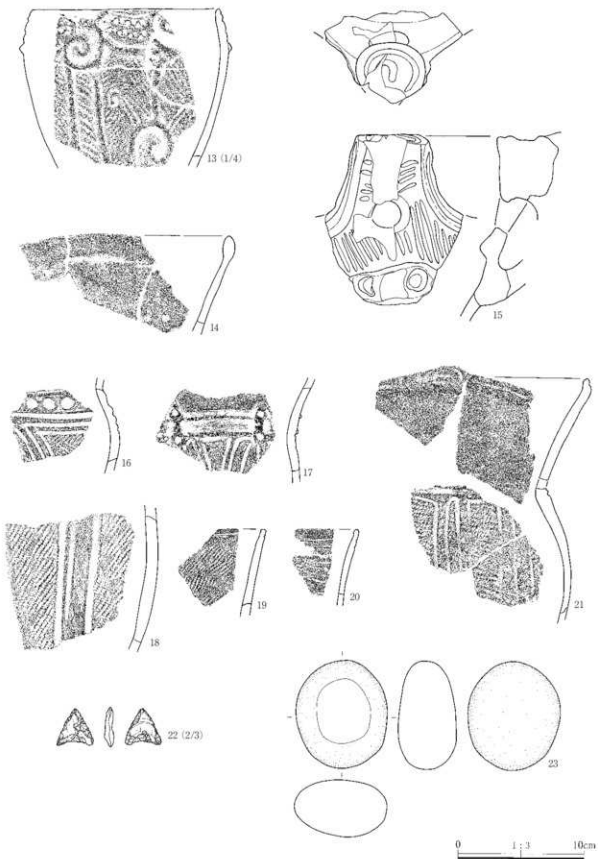


第14図 20区5号列石



0 1:3 10cm

第15図 20区5号列石出土遺物(1)



第16図 20区5号列石出土遺物(2)

3. 28区列石遺構

28区では1号～13号までの13基の列石遺構が確認された。このうち、13号列石は江戸時代以降のものであることが判明し、欠番となった。また、10号・11号列石は、縄文時代後期の28区18号住居と一連の構造物となる可能性が高いことから、昨年刊行された横壁中村遺跡(8)ですでに報告済みである。ここでは、1号～9号・12号列石の10基について報告する。

これらのうち、1号～8号列石は、18区1号・2号列石とともに、平成8年に本遺跡の発掘調査が開始された当初に確認された遺構で、手掘りで表土を除去した状態で最初に確認された遺構にあたる。この地区は地山土中に大量の礫が含まれているが、発掘当初に表土を掘削した段階ではまだ地山土に達していないため、地山礫は所々に集積しているものの、散布が淡い空白部も認められたため、石列は比較的明瞭に認識できた部分も多い。つまり、列石は地山土の上層にあたる暗褐色土中にあり、その一部は表土に食い込んだ状態であった。住居等の他の遺構は、これらの列石遺構の調査の進展に伴って周辺部でその後確認されたものである。

第7図やPL3他をみてもわかるように、列石遺構は地山礫の上ののっている様に見えるが、列石に使用されている礫はほとんどが地山土中に含まれる粗粒輝石安山岩亜角礫であり、他の遺跡事例で確認されているような、他所から持ち込まれた川原石を配置した形跡は認められない。山石が多い当地域では、江戸時代から現在に至るまで、畑地の農道や地境に耕作の邪魔になる石を集積する風習があり、地元ではこれを「ヤックラ」と呼んでいる。一見すると、列石のなかにも雑然と礫を集積したような状態も見うけられるが、明らかに人為的に並べられた状態も看取される。

なお、ここで扱う列石は、調査時に若干の食い違いや空白部を単位として遺構名称を与えており、配石遺構が重複するものも多いが、調査担当の意思を尊重し、これに従っている。

28区1号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 H-1-J-1グリッド

経過 28区2号～8号列石とともに、本遺跡の発掘当初に確認された。2号配石の位置を東側の起点とし、東西にのびる石列は2号・3号を含めて24mにおよぶが、5号住居と6号住居の間で若干の食い違いがあり、この部分までを一つの単位として1号列石とされた。

重複 東端部に2号配石が重複し、当列石の上に配石がのっている。西半部は5号住居と重複し、1号列石が5号住居の上ののっているように見えるが、住居の輪郭と列石の範囲及び重複関係は不明瞭で、明確な切り合い関係は把握されていない。

なお、本遺構東端部の南側1mに加曾利E3式期の18区2号住居と18区2号土坑が近接し、東側3mほどのところに、加曾利E1式期の深鉢と浅鉢の複數個体を使用した28区2号土器埋設遺構が接近する。

形状 1号列石の範囲は大小の礫が幅1～2mの間に折り重なるような状態で集積されており、東西方向に9mの長さで直進する。礫の状態は中央部に置かれた大型礫を境に東西で異なっている。西半部は大型礫を中心に礫の長軸を列石の方向に合わせるようにして、2ないし3列の礫を整然と配置しているが、東半部は大型礫が少なく、集積状態にもむらがあり、雑然としている。この東西を2分する礫は長さ1m、幅60cmほどの大きなもので、2号配石からちょうど4mの位置に長軸を南北方向に合わせで横たえた状態で確認された。

使用されている礫は30～60cm大が主体で、80cm大の大型礫も数個認められる。礫はほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない。礫がのる面はほぼ平坦であるが、一部は地山に入り込んでいる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫で構成される。

方位 N85度W

遺物 土器は総数14点が出土しており、主な土器は中期後半の加曾利E1式および加曾利E3式土器である。これらは接する5号住居や隣接する2号土器埋設遺構などの遺物が混在しているためであろう。石器は石鏃2点、磨石類2点の他に、石核1点、剥片4点、砕片点が出土している。

時期 5号住居との関係から、それと同時期かあるいはそれ以後の時期が想定されるが、下限については判断材料が乏しい。

所見 西半部の整然と組まれた状態が本列石の本来の形状だったと仮定すれば、東半部は大型礫が抜き取られて攪拌されているようにも見えるが、西半部が5号住居の輪郭を縁取っていることをどのように解釈すべきか、疑問が残る。

加曾利E3式期の5号住居との切り合い関係を示す明確な根拠は得られていないが、同住居が切っている前提の場合は本列石の一部が住居の周境に利用されたことになる。本列石が切っている前提に立てば、脆弱な住居埋め土部分と避けて列石を構築したことも考えられる。いずれにせよ、当遺構と5号住居は有機的な関係を持っており、少なくとも5号住居の周囲の礫群は同住居に近い時期の遺構とすることができる。

28区2号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 J-1-K-1・2グリッド

経過 1号列石の西側に続くもので、経過は1号列石と同様である。

重複 南側を6号住居の輪郭と接している想定されているが、1号列石と同様に明確な切り合い関係は把握されていない。

形状 5号住居と6号住居が接するところで、列石の方向がくの字状に折れている。ここから西側が2号列石で、その範囲は6号住居の西側端を過ぎたあたりで礫が一旦途切れるところまでの約6mの間が該当する。

礫は幅2mほどの範囲で東西に延びており、1号

に比べてやや西側が北寄りにはれている。東端は食い違いながらも1号列石と接しているが、西端は3号列石との間が途切れている。6号住居に接する礫の南辺は直線によく揃っているが、北辺はやや弧を描くように見える。規則的な配置は認められず、全体に雑然と集積されているが、東半部では2列の列石が並んでいる部分もあり、詳細にみると、6号住居の北側縁辺に沿って半月状にまとまる一群とその他の間に空白部が存在するようにも見える。

使用されている礫は30～60cm大が主体で、北東隅に80cm大の大型礫を2個配置している。礫はほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない礫がのる面はほぼ平坦であるが、特に大型礫は一部が地山に入り込んでいる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫で構成される。

方位 N68度W

遺物 土器は総数55点が出土しており、主な土器は中期後半の加曾利E3式期のものである。これらは6号住居の覆土中の遺物が混在している可能性が高いと考えられる。石器は打製石斧1点、磨石類2点、石皿片1点、多孔石2点の他に、石核1点、剥片1点が出土している。ちなみに多孔石は列石の一部に使用されていた。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 ほぼ同じ方向に並ぶ4号・5号列石と一体化して3号列石と並走する起点に位置する。礫の配置はやや雑然としており、列石内に若干の空白部も認められるが、南辺の列石は直線的によく揃っている。

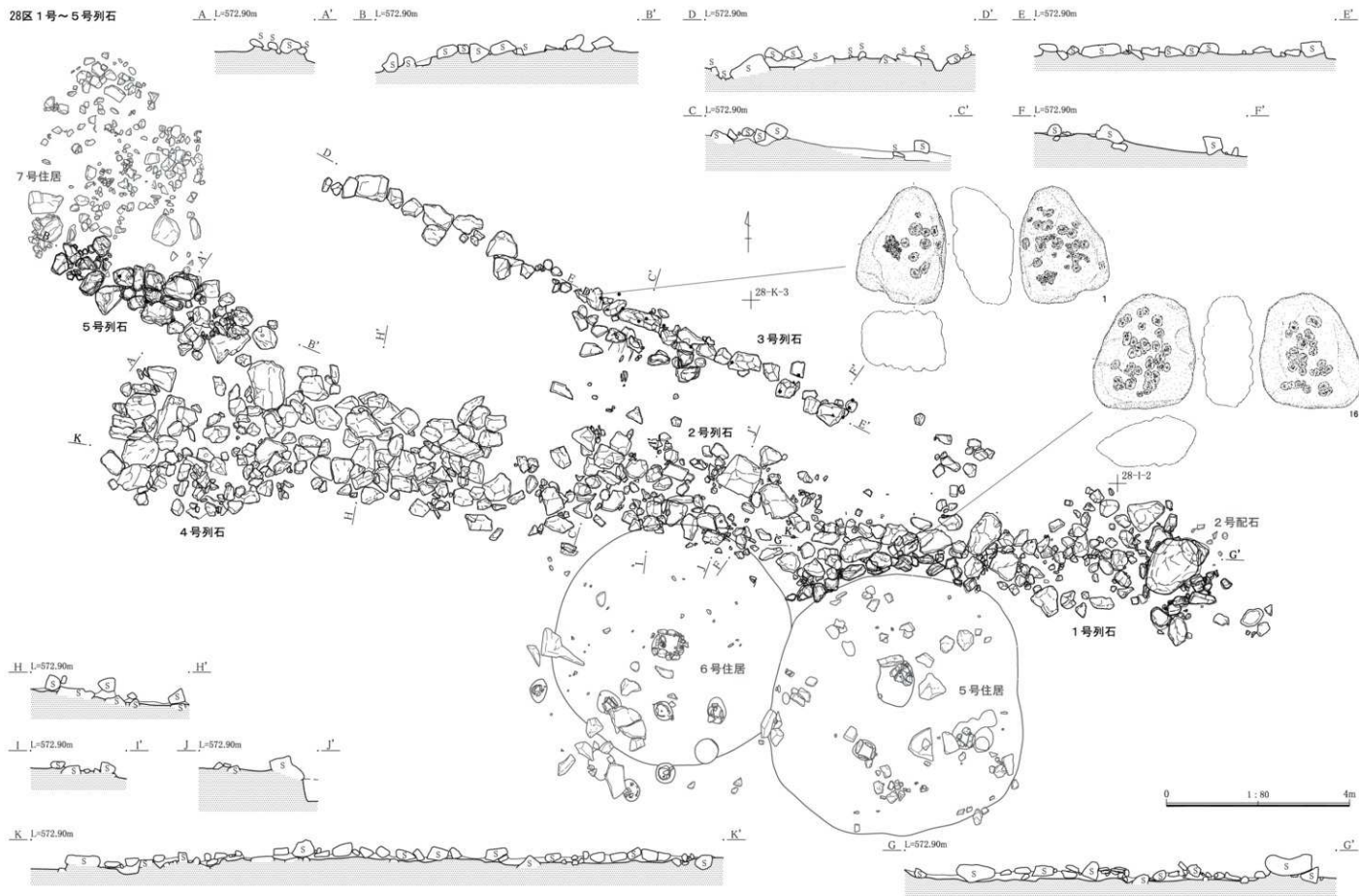
28区3号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 J-2-M-3グリッド

経過 1号・2号・4号列石の北側に単独で存在する遺構で、調査経過は1号と同様である。

28区 1号~5号列石



第17图 28区 1号~5号列石

重複 重複する遺構はないが、列石中央の北側に接して中期の28区4号土坑があり、そこから北側に2mの位置に加曽利E1式土器深鉢を使用した28区3号土器埋設遺構が隣接する。

形状 30～60cm大の礫を東南東から西北西に向かってほぼ一列に並べたもので、長さは約13mである。列石の方向は2号および5号とほぼ平行しており、その間の距離は4～4.5mである。ちなみに、本地区は北側に向かって緩やかに傾斜しており、当列石は2号列石より50cmほど低いレベルに構築されている。

東半部では細長い礫が数多く使用されているが、これらは列石の方向に長軸を揃えて配置される傾向が見うけられる。中央付近では南側に平行する列石が3mにわたって確認されており、本来は2列の石列だった可能性もある。西半部は東半部に比べてやや大形の不定型な礫を使用しており、統一性に欠けている。また、東半部の礫はほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されているが、西半部の大型礫は一部が地山に入り込んでいるものが多く、この点でも違いが看取される。

なお、第7図や写真を見ていただければわかるが、西半部の周囲には大形の地山礫が数多く散在しており、3号列石の一部はこれらの地山礫の一部を利用している可能性も考えられるが、残念ながら有効なデータは残されていない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩垂角礫で構成される。

方位 N64度W

遺物 土器は中期後半から後期前半までのものが総数11点出土しており、主な土器は中期後半の加曽利E3式期であるが、いずれも小破片で数も少ない。石器は、石鏃の欠損品と多孔石がそれぞれ1点ずつ出土しており、このうち多孔石は列石の一部に使用されていた。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 18区から28区に展開する一連の列石遺構の

なかで最も北側にあり、唯一1列の石列で構成される。中央付近に並走する石列があるが、当初の形態がどちらだったのか判然としない。また、中央付近を境に東西で石列の構成が変わっているが、この一連の列石が数m毎の単位で構成されるなら、それに符合することになる。

28区4号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 L-1～N-2グリッド

経過 2号列石の東側に続く一連のもので、調査経過は1号列石と同様である。

重複 なし。

形状 2号列石との間に若干の空白があり、そこから西に約9mにわたって延びる。この地点は周囲に地山礫が数多く散布する場所で、西端部の南側には南東部から延びる18区2号列石が近接し、北側には5号列石が接近している。

礫は2～3mほどの幅で東西に延びており、その方向は1号列石に近い。東端はやや小振りな礫が数個あるだけで2号列石との間に1mほどの空白があり、西端は南東部から延びる18区2号列石の端部に合わせたように途切れている。列石の南辺は直線によく揃っているが、北辺はやや弧を描くように見える。礫に規則的な配置は認められず、全体に雑然と集積されている。

使用されている礫は30～60cm大が主体で、西半部を中心に80cm大の大型礫も見られる。礫はほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩垂角礫で構成される。

方位 N84度W

遺物 確認されていない。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 同一確認面にある礫を図化するとこのような形状になるが、西半部の礫についてはこの列石に

第3章 発見された遺構と遺物

含まれるのか、疑問も残る。礎の配置が全体に雑然としており、形状を判断する決め手がない。

28区5号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 M-2～N-3 グリッド

経過 4号列石の北西側に続く一連のもので、調査経過は1号列石と同様である。

重複 北西の一部が28区8号住居と重複し、当列石は住居の上ののっている。

形状 4号列石の北西部にあり、一部は4号列石にほぼ接している。2号・3号列石と近似した方向をとり、長さ4.5mにわたって直進する。特に南辺ラインは2号の南辺ラインの延長上にあり、共通性が伺える。列石は、大型礎を主体に使用して2～3列に並べて構成しており、形態は1号列石西半部と類似している。

使用されている礎は30～60cm大が主体で、縦位に設置されるものはない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礎と同じ粗粒輝石安山岩垂角礎で構成される。

方位 N67度W

遺物 土器は中期後半を中心に総数65点出土しており、主な土器は中期後半の加曾利E3式期のものであるが、これらは重複する28区8号住居の遺物が混在した可能性が高い。石器は、石鏃2点、打製石斧2点、楔形石器1点の他に、剥片5点、砕片3点が出土している。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 列石は2～3列の石列で構成され、方向も2号列石の南辺と共通する。3号列石の方向に比べて若干振れているが、並走する様子も伺える。

28区6号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 O-2～R-1 グリッド

経過 4号列石の西側にあり、北側に位置する7

号・8号列石と平行に走行する。4号列石との間に6mの空白部があり、4号列石に続くものか、あるいは東南方向にある18区2号と一連の遺構かが問題となる。また、列石の中央部と西端部に独立した単位をなす石組みがあり、中央部のものを3号配石、西端部のものを5号配石とし、列石と一体の構造とされた。

調査経過は1号列石と同様である。

重複 中央部に3号配石、西端部に5号配石が重複するが、一体の構造と理解されており、同時に構築された可能性もある。

形状 東北東から西南西に斜行しながらほぼ直進し、東端部が南東方向にくの字状に折れる形状の列石で、規模は長さ10.5m、幅1～1.5mである。並走する7号・8号列石に比べて、礎の配置は8号列石に比べて規則性に乏しく、空白部も認められるが、2～3列の石列を一定の幅に並べる点では共通している様に見える。

使用されている礎は30～60cm大が主体で、東半部では80cm大の大型礎も見られる。特に東側の折れ部を仕切るように設置された大型礎は示唆的である。礎はほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 大半が地山の礎と同じ粗粒輝石安山岩垂角礎で構成される。

方位 N70度E

遺物 伴出する遺物は少なく、土器は中期後半の細片が3点出土しているにすぎない。石器の出土は認められなかった。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 8号列石と並走する一連の列石となる可能性が高い。独立した組石を構成する配石遺構を配して一連の構造となる点も共通している。

28区7号列石

調査年度 平成8～10年度

位置 O-2～O-3 グリッド

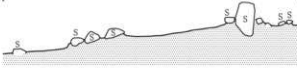
28区6号～8号列石

A L=573.10m



A'

B L=573.10m



B'

C L=573.10m



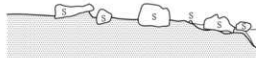
C'

D L=573.10m

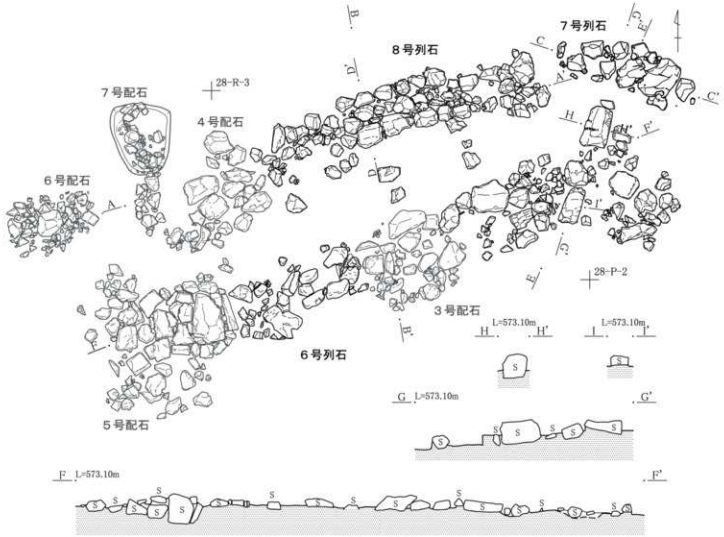


D'

E L=573.10m



E'



0 1:80 4m

第18図 28区6号～8号列石

第3章 発見された遺構と遺物

経過 8号列石の北東にあり、8号の延長上に位置する一連の列石として調査された。礫の組み方はやや粗雑で失われたものもある可能性が高いが、6号列石に並走して南東方向に折れる可能性を想定する点では重要な位置にある。

重複 北側に28区10号住居が近接するが、重複する遺構はない。

形状 東西方向に弧を描きながら延びる列石で、規模は長さ3m、幅1mである。礫は40~60cm大のものを使用しており、東端には1mほどの大型礫を配置している。いずれも礫は平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない。

なお、西側に隣接する8号列石との間には50cmほどの空白がある。

下部遺構 確認されていない。

石材等 地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩歪角礫が使用されている。

方位 N70度W

遺物 伴出する遺物は少なく、土器は中期後半の細片6点が出土しているにすぎない。石器は石核が1点のみ出土している。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 8号列石の東側にあり、8号列石が18区1号・2号列石と一連の関係にある可能性を示唆する役割を果たしている。

28区8号列石

調査年度 平成8~10年度

位置 R-5~R-6グリッド

経過 本地区の列石のなかで最も人為的な規則性が認められるもので、当遺跡発掘当初に列石遺構調査の契機となった遺構の一つである。西側の延長上には、12号住居の上を通過して、8mにわたって断続的に礫の集積が続くが、独立した単位をなす遺構として配石遺構とされた。4号・7号・6号10号配石がそれである。

重複 西端に4号配石が接しているが、一体の構

造と理解されている。

形状 6号列石と平行して、東北東から西南西の方向に直線的に延びる。全体にやや弧を描いているが、東西双方の端に空白があり、礫が消失している可能性もある。規模は長さ6m、幅1~1.2mである。中央部には2.4mにわたって礫を3列に規則的に配置した部分があり、規格性が際だっている。この部分では、列石の両側に大きさを揃えた大形の礫を配置しており、礫の長軸を列石の方向に合わせる意図も認められる。

使用されている礫は30~60cm大が主体で、ほとんどが平坦面を伏せて貼り付けたように設置されており、縦位に設置されるものはない。

下部遺構 確認されていない。

石材等 地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩歪角礫が使用されている。

方位 N71度W

遺物 伴出する遺物は少なく、土器は中期後半を中心に45点出土しており、石器は加工痕ある剥片が1点出土している。

時期 1号列石と一連の時期を想定したい。

所見 28区の列石のなかで最も規則的に組まれた列石で、人為的に配置された組石であることを示す根拠ともなっている。ただし、どの時期にどのような目的で造られたのかは慎重に判断する必要がある。

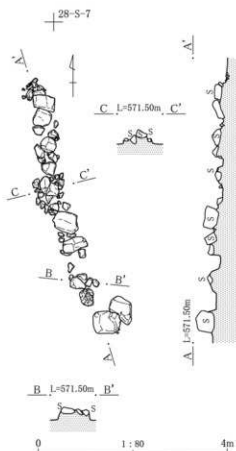
28区9号列石

調査年度 平成9年度

位置 R-5~R-6グリッド

経過 1号~8号列石の調査にやや遅れて認定された。確認された位置や方向が他の列石とは異なっており、実際には周囲にも数多くの礫が点在しているため、特に列石・配石遺構は特徴がなければ地山礫との見分けが付かないのが実情である。9号は一列の列石で、大形の礫もなく、走行もたどたどしいが、ほぼ揃ったレベルで礫が続いている点が評価された。

一列の石列が並ぶ近世以後の石垣の一部も確認されており、即断できない。



第19図 28区 9号列石

重複 重複する遺構はない。

形状 やや西側に振れた南北方向に直進する列石で、規模は長さが3.6m、幅が60cmほどである。礫は30~60cm大のものと小さな礫を組み合わせ一列に配置しており、その点では3号列石と共通している。

下部遺構 確認されていない。

石材等 地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 N16度W

遺物 確認されていない。

時期 3号列石と一連の時期を想定したい。

所見 単独で確認された遺構で、他の列石との関係ははっきりしない。28区の北西隅で、南北方向に

28区12号列石

調査年度 平成11年度

位置 X-3~Y-3グリッド

経過 隣接する10号・11号列石の掘り方調査に伴って、10号列石の西側に一部接した状態で確認された。当初は10号列石の延長部と想定したが、位置が食い違うことと、礫の使い方が明確に異なることから、独立した扱いが必要と判断した。

なお、南側に17号配石が接しているが、この配石は10号~12号列石よりも先に確認されており、平成10年度の段階ですでに調査は終了している。

重複 10号列石および17号配石と接しており、17号配石に切られているが、10号列石との新旧関係ははっきりしない。

形状 西北西に下る傾斜に沿って、礫の長軸を立てて縦位に設置し、全体としてく字状に折れる石列を構成している。この地区は西側の山根沢に下る傾斜が始まる場所にあたっており、10号・11号列石も段差部分に礫を配置しているが、当該列石は小規模ながらも明瞭な段差を意識した配置が伺える。

下部遺構 確認されていない。

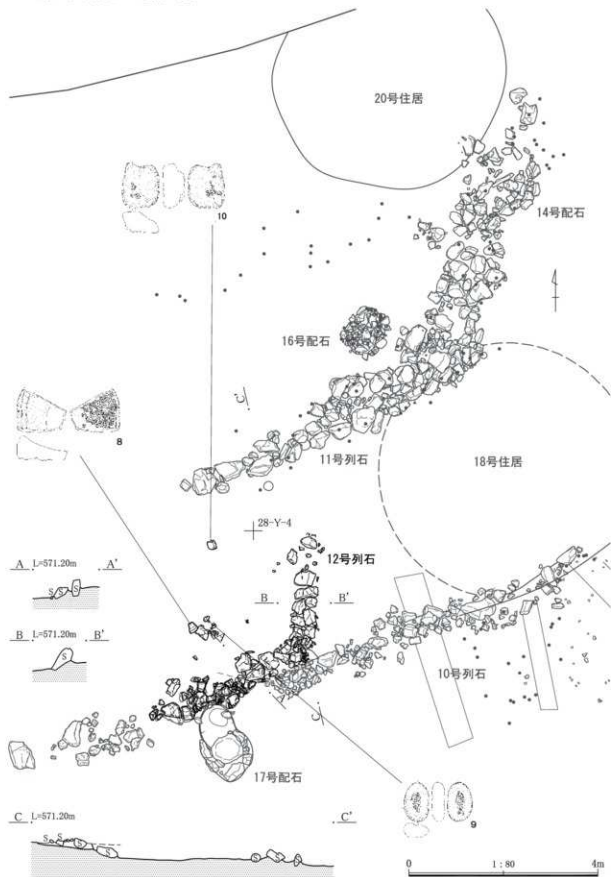
石材等 地山の礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫が使用されている。

方位 ー

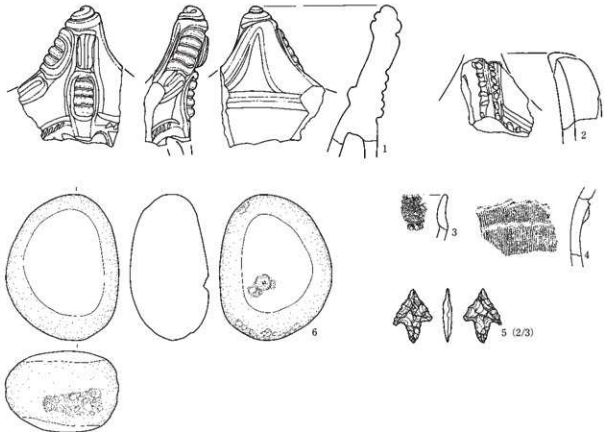
遺物 土器は中期後半加曾利E3式から後期加曾利B2式までのものが総数18点出土しており、主な土器は後期堀之内1式である。石器は石皿片、多孔石、磨石類が各1点づつが、列石北東の平坦面から出土している。

時期 後期前半堀之内1式期を想定したい。

所見 18号住居の周囲に展開する列石の一部の可能性もあるが、本地区は削平がかなり及んでいる場所でもあり、確認できなかった住居が存在した可能性も否定できない。

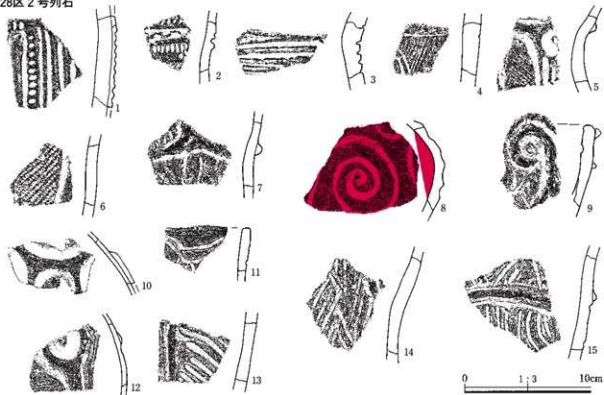


第20図 28区12号列石

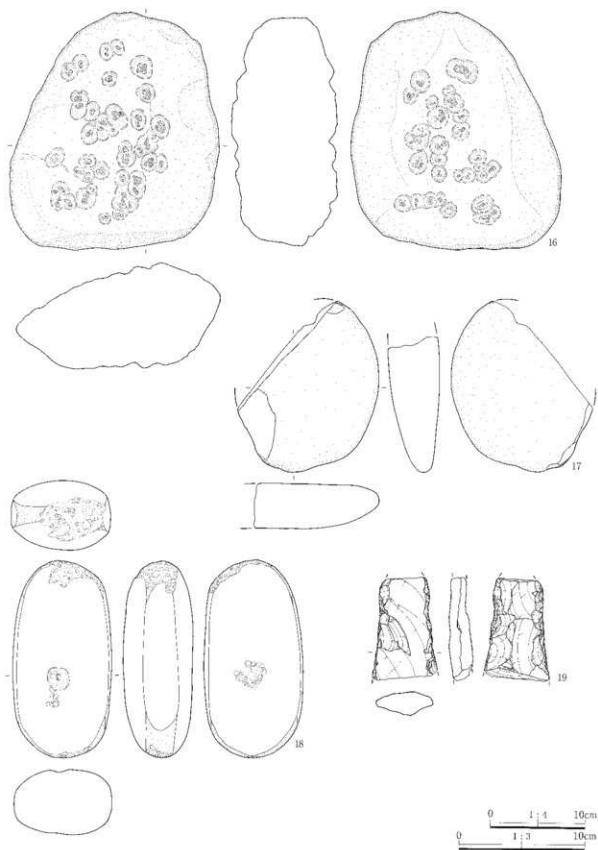


28区 1号列石

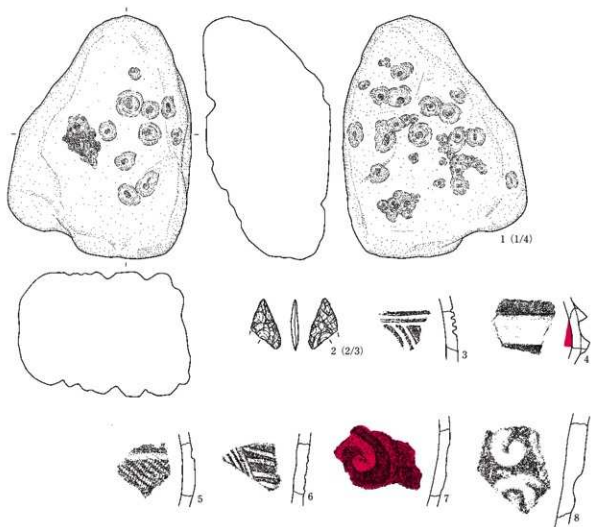
28区 2号列石



第21図 28区 1号・2号列石出土遺物

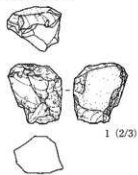


第22図 28区2号列石出土遺物

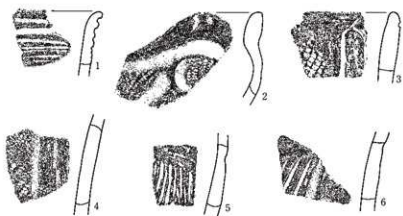


28区3号列石

28区7号列石

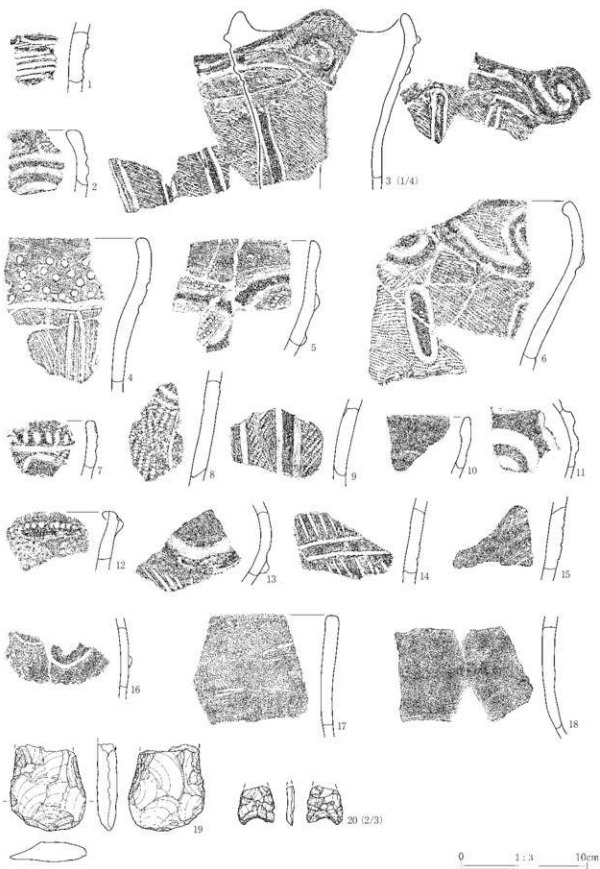


28区8号列石

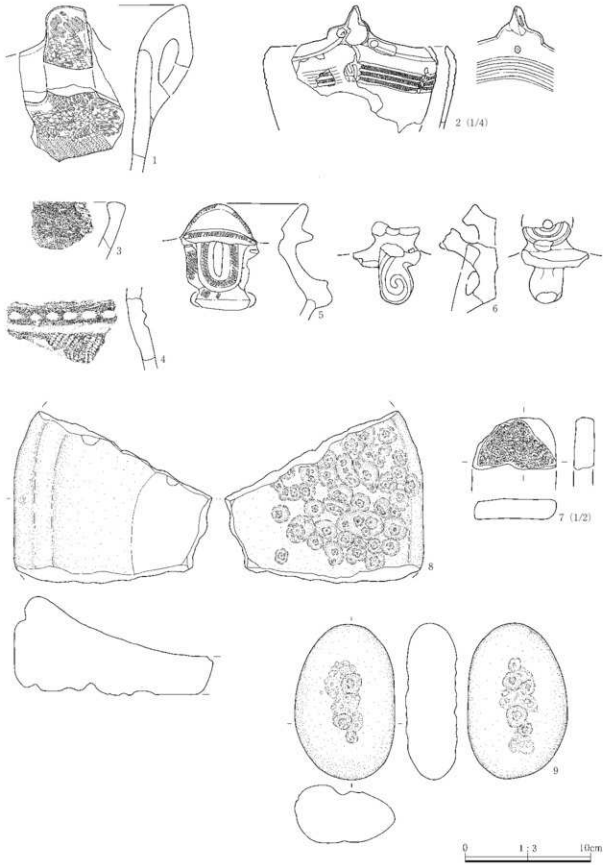


0 1:3 10cm

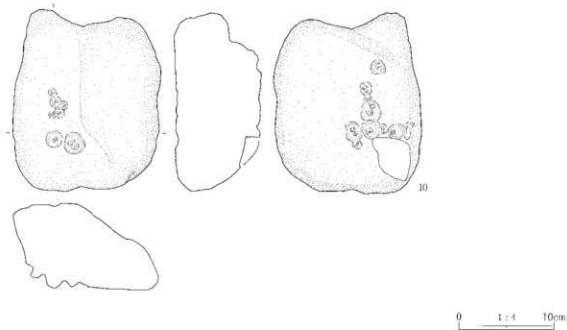
第23図 28区3号・7号・8号列石出土遺物



第24図 28区5号列石出土遺物



第25図 28区12号列石出土遺物(1)



第26図 28区12号列石出土遺物（2）

4. 29区列石遺構

29区では1号～5号までの5基の列石が確認されている。確認された場所は、遺跡の中央部を横断する山根沢の東側沿いにある傾斜地で、水場に沿って設置されていた一群である。列石はいずれも多量の遺物を包含する暗褐色土中に構築されており、土層による時期差や切り合い関係を把握することは困難であった。

この地点は、発掘当初の段階では遺構が存在しない平坦な空白地と考えられていたが、その後の調査で、水場である山根沢に向かって下る急斜面で、縄文時代前期から晩期の長期にわたって、利用されていたことが判明した。その概要は以下のようになる。

前期の遺物は黒浜式期から確認されているが、明確な遺構は見つかっていない。中期では特に加曾利E3式期の住居が数多く確認されており、その後は後期堀之内1式期まで居住は継続されている。ちなみに第27図～第28図のうち、住居の時期は1号・2号・15号・19号・20号住居が加曾利E3式期、12号・16号住居が加曾利E4式期、6号・18号住居が

称名寺1式期、4号・8号住居が称名寺2式期、3号・7号住居が堀之内1式期に該当する。堀之内1式以降は、ここに報告する列石遺構が該当すると考えており、この地区から加曾利B1式から高井東式期を中心とする土器が多量に出土している。

なお、発掘前の現況は、南側の埋没谷も含めて緩やかで平坦な畑地だったが、後期の住居を破壊する近世かそれ以降の石垣が確認されており、埋土されたのはかなり新しい時期になってからだったようだ。

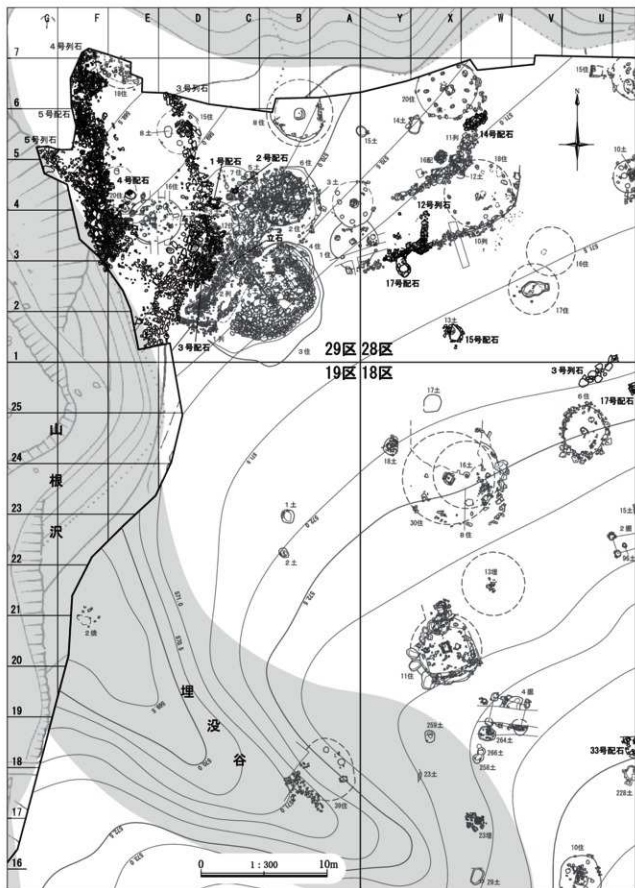
さて、確認された列石はいずれも後期に比定されるもので、このうち1号・2号列石は3号～5号住居に伴う可能性が高いことから、昨年度刊行の横壁(8)ですでに報告済みである。ここでは残る3号・4号・5号列石について報告する。

29区3号列石

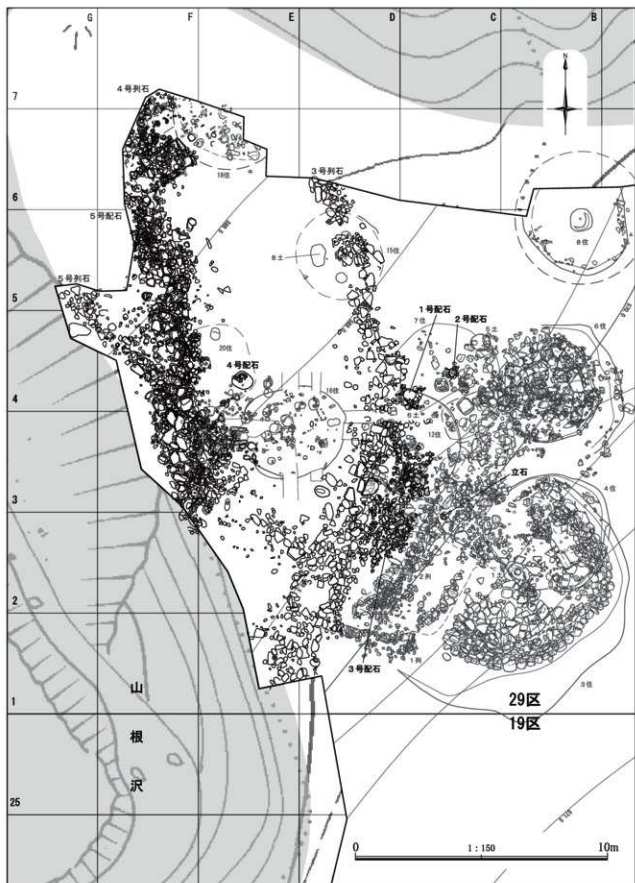
調査年度 平成11年度

位置 D-1～D-6グリッド

経過 平成10年度に確認された29区3号住居は、敷石と特殊な周礫を伴う堀之内1式期の大型住



第27図 29区列石・配石遺構分布図



第28図 29区3号～5号列石遺構全体図

居で、山根沢側に向した出入り口部に列石状の石列が伴うことが想定された。これが契機となり、山根沢に向かって徐々に調査区を拡張するなかで3号列石は確認された。

この地区の列石は、3号列石も含めて多量の遺物を包含する暗褐色土中にあり、土層による時期差や重複関係を判断することは困難であった。

3号住居に伴う石列と3号列石は1～1.5mに隣接しているが、3号列石は一段低いレベルにあり、方向も微妙に異なっている。その後の調査で、3号住居の掘り方から称名寺2式期の柄鏡形敷石住居が確認され、4号住居とされたが、この住居にも出入り口部に階段状の段差がある石列が伴っていた。4号住居には、竪の中央を通る軸線上の出入り口部に長さ70cmほどの大きな棒状円礫を使用した立石があり、この立石は3号住居でも出入り口敷石部に組み込まれていた。第28図～第31図で3号配石の東側に記載した立石がそれである。なお、3号住居の出入り口部の先の掘り方から集積された礫群が確認され、3号配石とされたが、3号列石はこれを切って構築していると考えられる。

各遺構の確認状況を整理すると、まず3号住居があり、その後やや下ったところで3号列石が確認された。次いで3号住居の掘り方から重なった状態で4号住居が確認され、さらに3号住居の出入り口部の先から3号配石が確認された。このうち、3号住居は堀之内1式期、4号住居は称名寺2式期に比定される。いずれの遺構も接近しており、傾斜地にあるだけに微妙な関係にある。

重複 7号・12号・15号住居と重複し、これらを切る。また、1号・3号配石は3号列石より下位で確認されており、3号列石より古い遺構と考える。

形状 山根沢に向かって傾斜する地形に沿うようにして弧状に展開するが、詳細に見ると、南半部は等高線にはほぼ沿っているが、北半部は等高線を斜めに横切っている。一見すると、山根沢に沿った弧状の形態を優先しているように見えるが、長軸方向の断面図を見るとほぼ水平を保って構築されてお

り、そのことが優先された結果かもしれない。列石は調査範囲を横断しており、さらに南北方向に延びることは確実である。規模は、確認された範囲で長さ20m、幅は北側の狭いところで1m、南側の広いところで2mほどである。

列石は、斜面を切り盛りした段差部分に設置されている(PL20・21)。その切り土部分には様々な造作が認められ、大型礫を側縁を縦位に立てて配置したもの(PL23-4)、板状の礫を小口を揃えて重ねたもの(PL19-1、PL23-5)、板状礫を貼り付けるように並べたもの(PL23-2)、板状礫を縦横に組み合わせたもの(PL23-3)などが確認されている。また、東側に3号配石が接する部分には、特別に大きな礫が配置されており、上面や周囲の礫を取り外した段階で、60～80cm大の大きな板状礫が集積されていることが判明した。これらは大半のものは山根沢側に傾いているが、3号列石の中心部に設置された立石群だったと考えられる。この立石群のすぐ西側には、大形の丸石と長さ60～70cmの棒状円礫があり、これらも方形石組みを伴う配石や立石だった可能性が高い。

なお、立石群の南側に直径1mほどの円形の空白部があり、そこから北西方向に約3mほど石列が延びている。そのすぐ先には4号列石があるが、この部分には加曽利B式～高井東式土器が大量に集積された状態で出土している。

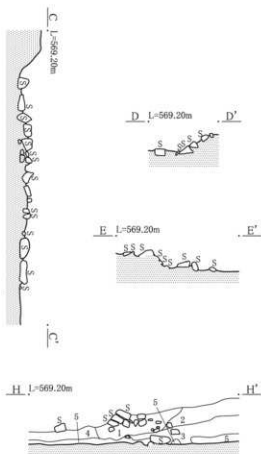
下部遺構 確認されていない。

石材等 使用された礫は、地山中や沢に点在する礫と同じ粗粒輝石安山岩亜角礫が主体であるが、明らかな川原石や丸石も持ち込まれている。

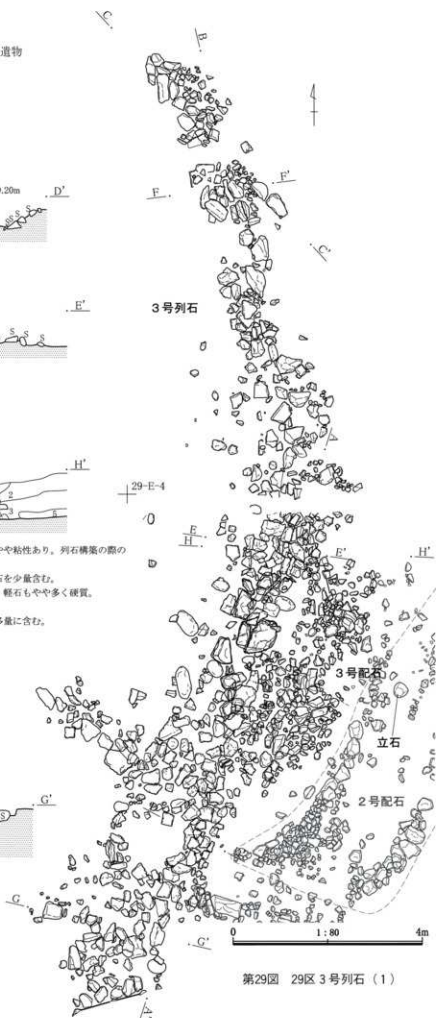
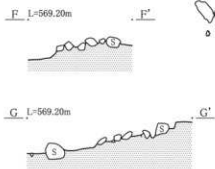
方位 —

遺物 土器は中期後半加曽利E3式期から後期堀之内2式期までのものが総数118点出土しており、主な土器は堀之内1式である。このうち中期の土器は重複する住居の遺物が混在した可能性が高い。

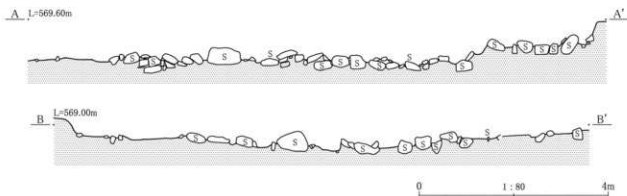
石器は総計23点が出土している。内訳は、石鏃3点、磨石類8点、台石1点、石棒3点、石核1点、剥片6点で、他に黒曜石の原石が5点である。



1. 黒褐色土 準大の礫を多く含む。やや粘性あり。列石構築の際の崩り込みと想定される。
2. 褐色土 軟質でやや粘性あり。軽石を少量含む。
3. 褐色土 2よりやや黒色を帯びる。軽石もやや多く硬質。
4. 褐色土 しまりなく柔らかい。
5. 褐色土 地山のオレンジの砂質を多量に含む。



第29図 29区3号列石(1)



第30図 29区3号列石(2)

石棒はいずれも欠損品で、1点は北側の列石中から、1点は中央部分の列石の前端からの出土である。黒曜石の原石は、5点の内3点は隣接した範囲から出土しており、残る2点は出土地点が不明だが、同一地点に置かれていた可能性が高い。

時期 出土土器は堀之内1式が主体であり、後期前半に想定しておきたい。

所見 本列石は、3号住居の出入り口部に伴う施設を前身とし、その後も後期後半まで継続利用された可能性が強いと判断する。

3号住居は、本遺跡の後期住居の中でも最も規模の大きな住居の一つであり、集落の水場である山根沢の間近に位置することや、特異な周濠を伴う点でも注目される住居である。3号住居の前身と想定される4号住居は、出入り口部に小規模な2段構造の弧状列石が伴っていたが、3号住居と同じ堀之内1式期の18区19号住居でも、出入り口部に2段構造の弧状列石が確認されている（横壁中村遺跡（8）参照）。

傾斜面を2段に築造するやり方が本遺跡の特色だと仮定すれば、3号列石は3号住居に伴う2段目の列石と考えることができる。また、4号住居と3号住居は出入り口部の立石を共有使用しているが、3号列石の中心的な施設と考えられる大型板石の立石群は、その立石の前面に位置しており、有機的な関係が想定される。

また、山根沢の西側では長さ30mの20区4号列石が確認されている。この列石は、堀之内1式期から加曾利B1式期の住居5軒以上に伴って継続された可能性が想定されており、立石や丸石を伴う配石遺構12基と3基の土器埋設遺構が伴い、加曾利B2式期まで継続したことが判明している（横壁中村遺跡（9）参照）。

29区の調査では、3号列石が取り付く可能性がある住居は3号住居のみであり、明確な配石遺構や土器埋設遺構は確認できていないが、3号列石構築面およびその上層から堀之内1式～高井東式期の遺物が多量に出土している。具体的な施設や使用方法は不明だが、20区4号列石と同様に後期後半まで何らかの形で存続していたと考えられる。

29区4号列石

調査年度 平成11年度

位置 F-4～G-5グリッド

経過 3号列石が確認されたことで、そこから山根沢までの間も徐々に調査区を拡張しながら掘り下げたところ、傾斜がほぼ平坦に変化したところで多量の遺物と共に4号列石が確認された。

確認当初の1面目は、山根沢沿いの窪地に多量の礫が累々と集積された廃棄場のような状態であった（PL24-3～5）。調査範囲を山根沢まで拡張して上面を覆う礫を取り除くと、ほぼ南北方向に大型礫



第31図 29区3号列石(3)出土遺物分布図

が直線的に配置されていることや、斜めに交差するように別の石列（5号列石）があること、その両者が交差する付近に加曾利B式～高井東式土器が大量に集積されている状況などがわかってきた（2面目調査）。また、5号列石との交差部分には、3号列石のそれと近似する大型の板状礎を使用した立石群が配置されていることも判明した。

なお、5号列石は当初4号列石の一部と考えていたため、出土遺物の大半は4号列石として扱われており、5号列石に伴う遺物はその礎を取り外す段階以後のものに限られる。その後、遺物や礎を上面から順に取りはずし、最後まで残った根石と立石群を3面目として記録したが、5号列石は本列石とはほぼ同じレベルに構築されており、3面目の構築当初から存在した可能性もある。

以上のように、本列石は調査の進捗に合わせて3回にわたって遺構図を作成した。1面目は確認当初の状況、2面目は遺構の全形が把握された段階、3面目は根石が把握できた段階で、各調査面の図に礎の使用状況と遺物の分布図を掲載した。

なお、斜めに交差する5号列石は2面目の段階で確認された。

重複 南側で16号・19号・20号住居と重複し、これらを切る。また、北側で5号配石と18号住居が接しており、本列石はその上に構築されている。なお、斜めに交差する5号列石とは共存関係にあるものと考えられるが、3号列石構築当初から存在したのか、あるいはその後増設されたのか、を判断できる材料は得られていない。

形状 ほぼ南北方向に直進する列石で、5号列石との交差部分に大型の板状礎8石を4mにわたって立てた立石群を伴う（PL27～PL9）。列石の方向は磁北よりやや西にふれており、3号列石の北半部に近似した方向に配置されている。本列石は傾斜がなだらかになった暗褐色土中にあり、構築にあたって切り盛り等の造成があったかどうかは明確ではない。確認された長さは17mであるが、南北双方にさらに延びることは確実である。幅は、2面目の段階

では2m前後のところが多いが、3面目では1～1.5mである。

列石構築当初の状況を3面目の図を見ると、南側に立石群があり、その北側に続く礎は2mほどの間隔で徐々に山根沢側にずらしながら設置されていることがわかる。このことが全体としてラインがやや西に傾く形状を造りだしているようだ。

本列石の中心的施設と考えられる立石群には、3号列石と同様に40～80cm大の厚い板状礎が使用されており、その大半は西側、つまり山根沢側に傾いていた。また、立石の西側に接して大型の厚い板状礎が数石並べてしかれており（PL27-4・5）、祭壇状に施設があった可能性が高い。また、立石群の東側に接して、加曾利B式～高井東式を中心とする多量の土器を集積した遺物集中部が認められた。この集中部は斜めに交差する5号列石との交点にもあたっており、関連が考えられる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 使用された礎は、地山中や沢に点在する粗粒輝石安山岩亜角礫が主体であるが、明らかな川原石も持ち込まれている。

方位 N3度W

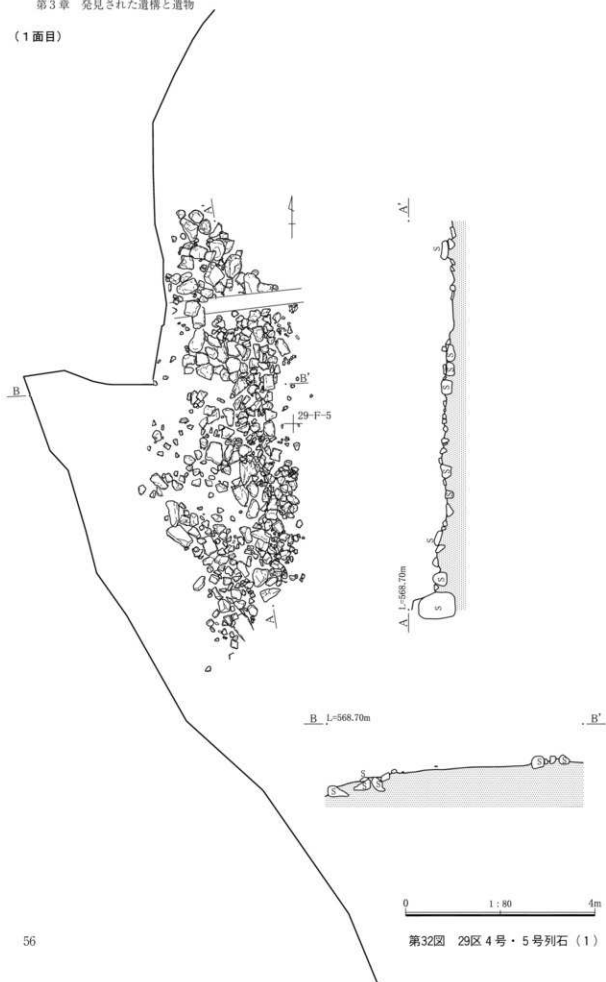
遺物 先述のように、本列石出土遺物には5号列石に伴う遺物の大半を含んでいる。土器は中期後半加曾利E3式期から後期高井東式期までのものが総数661点出土しており、主な土器は堀之内1式から高井東式である。中期の土器は重複する住居のものが混在したものと判断される。

石器は総計24点が出土している。内訳は、加工痕ある石器1点、磨石類13点、台石2点、石皿1点、多孔石5点、剥片8点で、他に土製円盤7点と軽石製品が1点である。

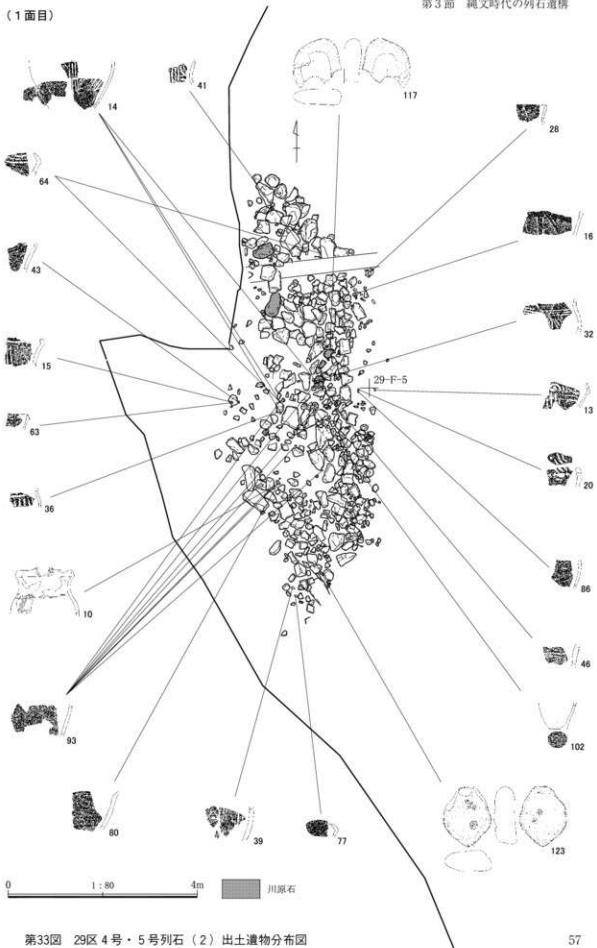
遺物の出土状況では、北側では堀之内1式の出土が目立ち、立石群周辺では加曾利B式～高井東式の出土が多いが、後者は5号列石および遺物集中部のものを含んでいる可能性もある。なお、ここには遺物集中部の土器は含んでいない。

時期 後期堀之内1式期から高井東式期まで長期

(1 面目)

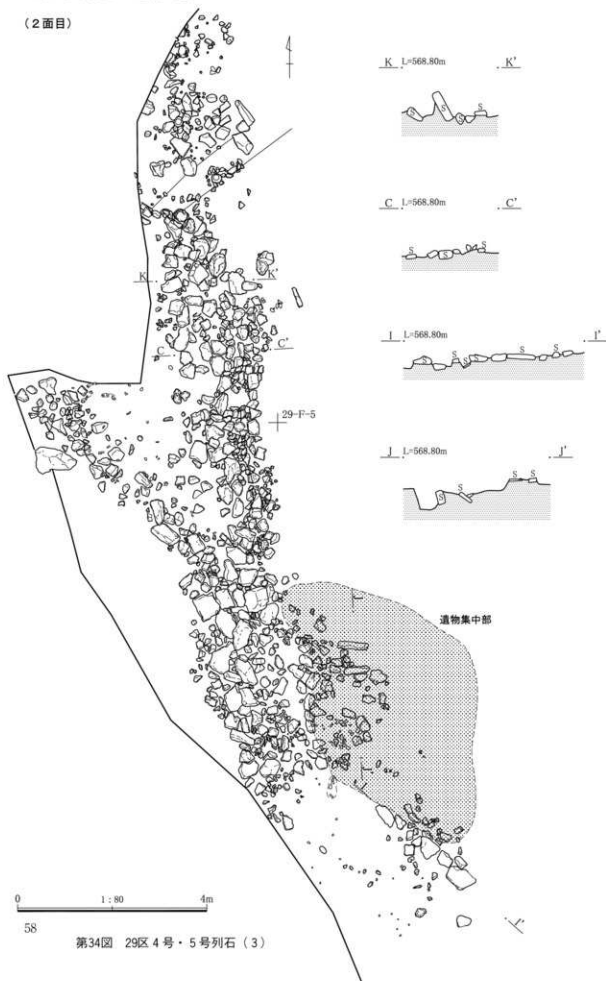


(1面目)

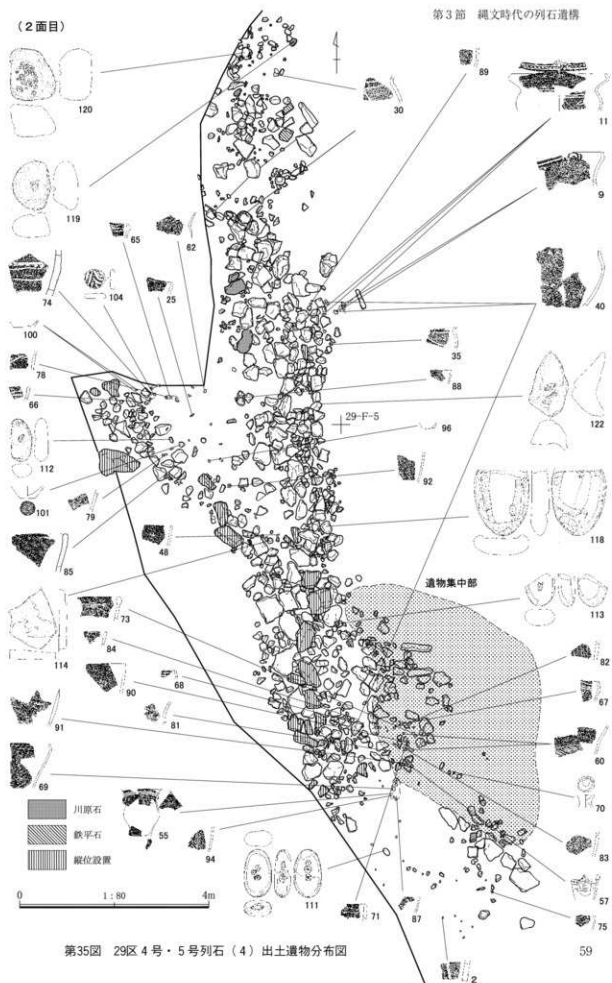


第33図 29区4号・5号列石(2)出土遺物分布図

(2面目)

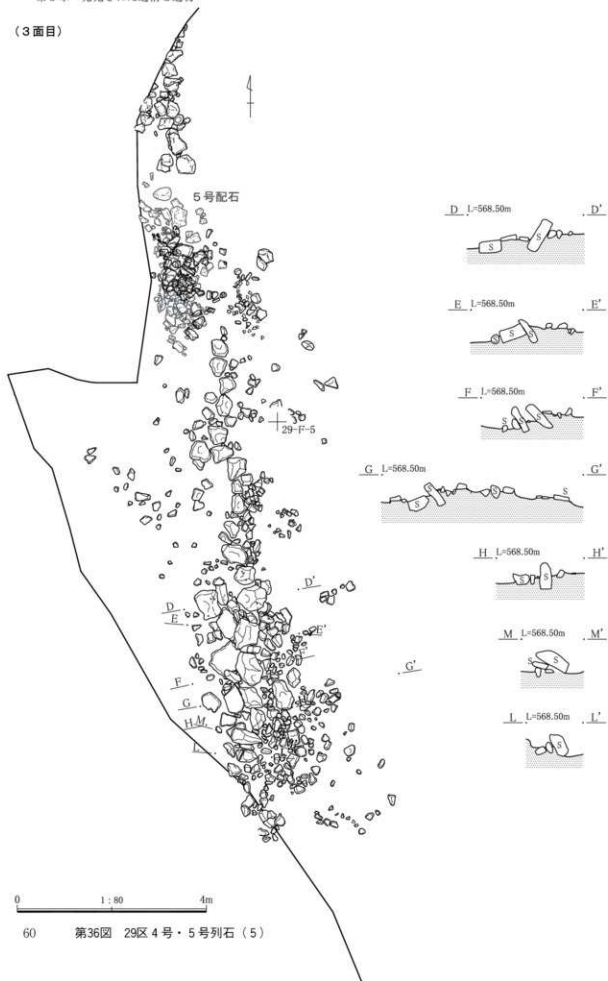


(2 面目)



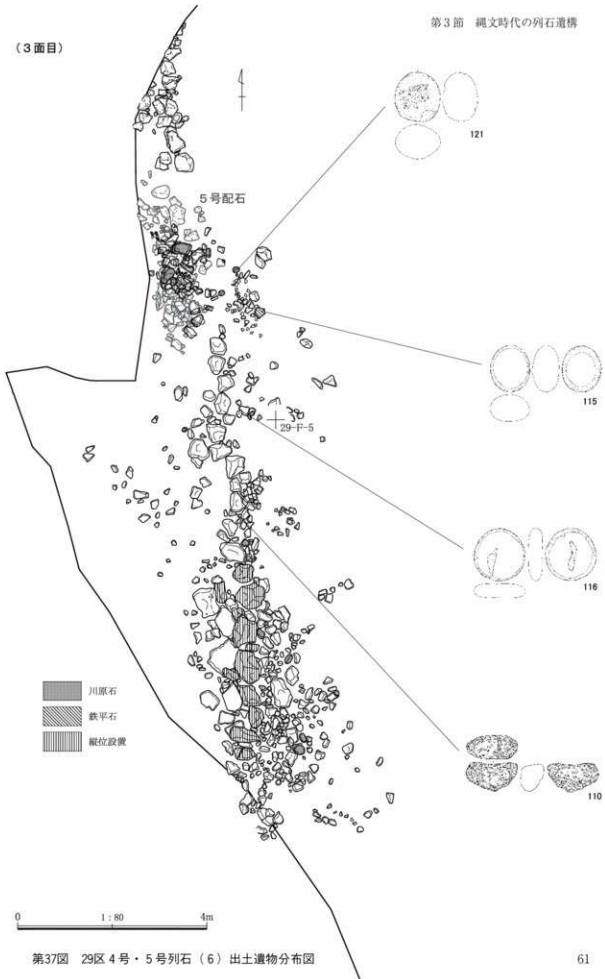
第35図 29区4号・5号列石(4)出土遺物分布図

(3面目)

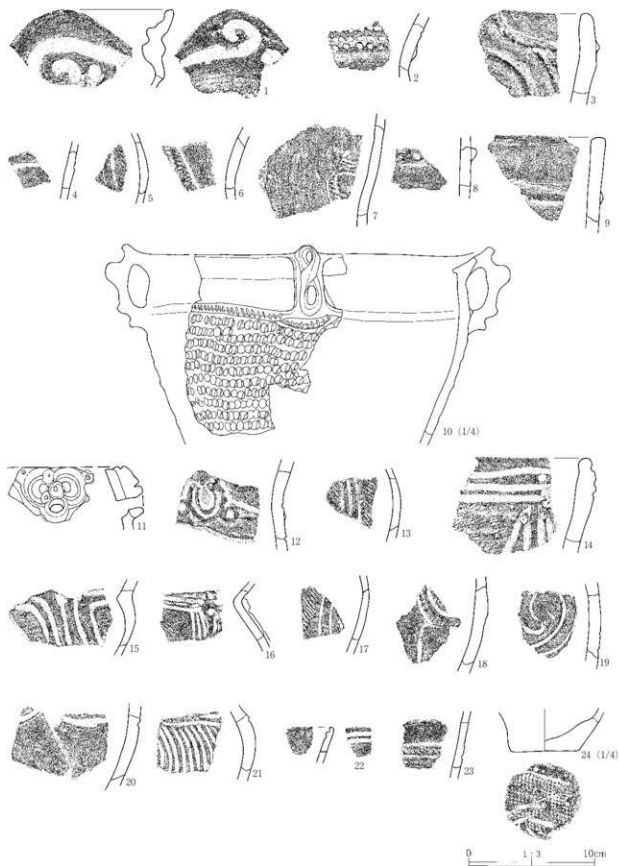


60 第36図 29区4号・5号列石(5)

(3面目)

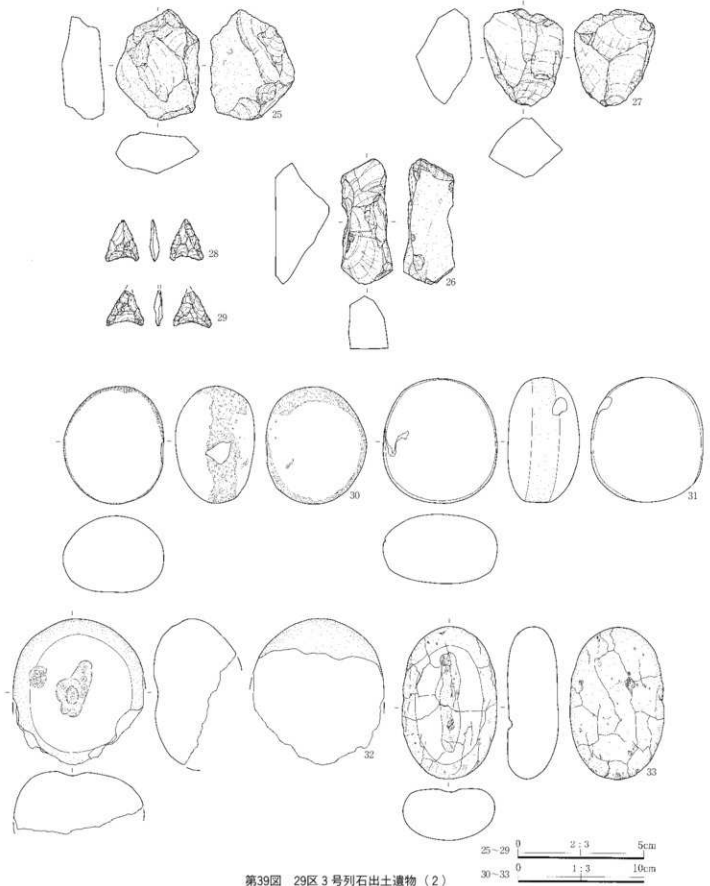


第37図 29区4号・5号列石(6)出土遺物分布図

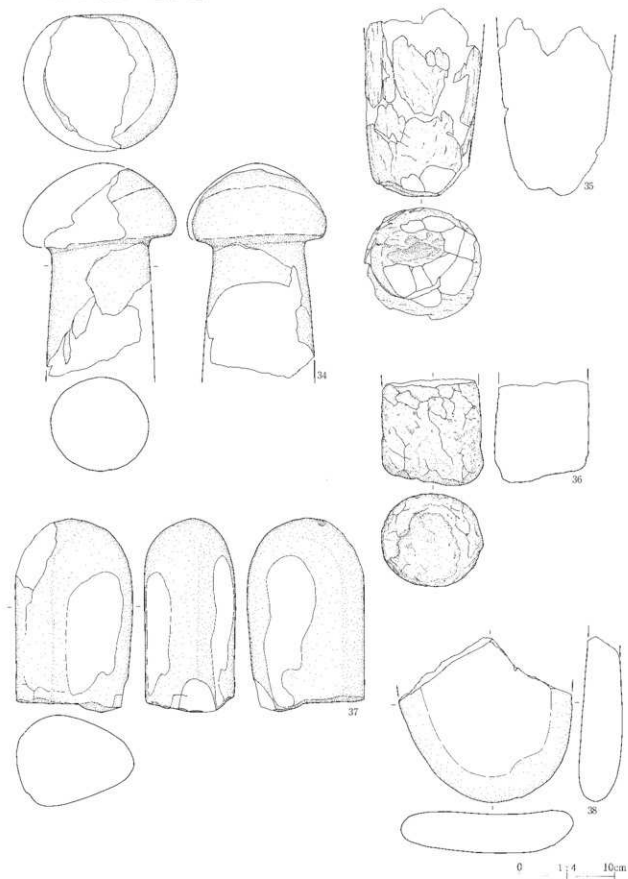


第38図 29区3号列石出土遺物(1)

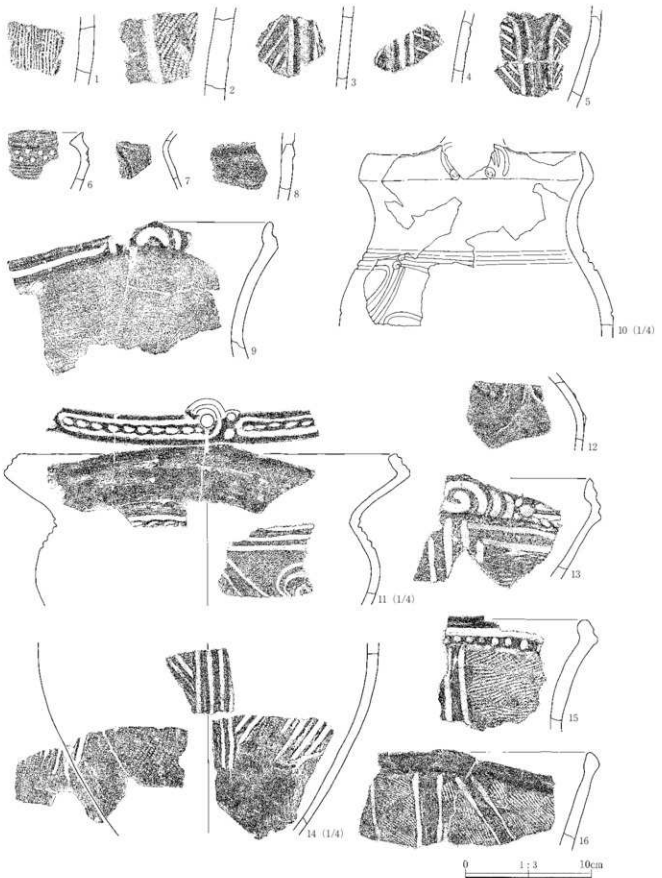
第3節 縄文時代の列石遺構



第39図 29区3号列石出土遺物(2)

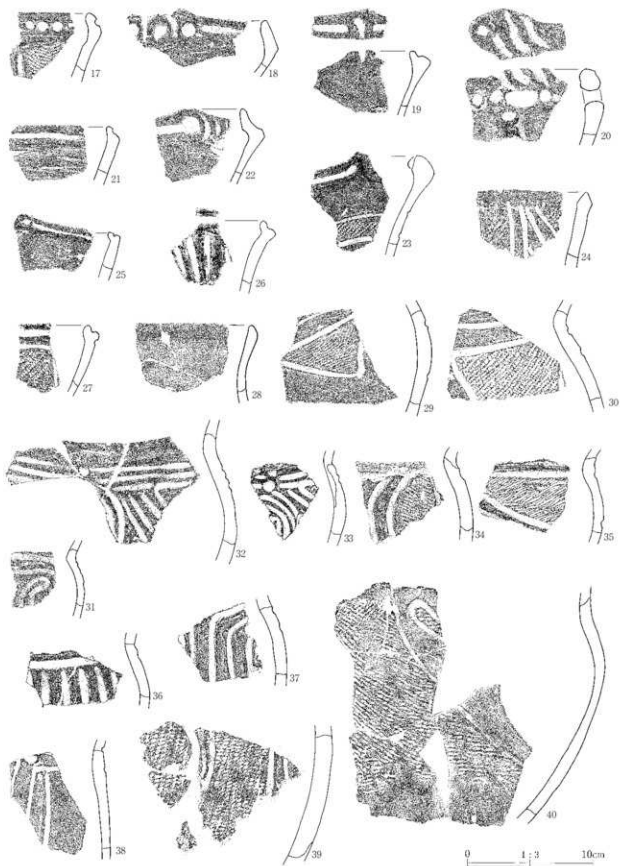


第40図 29区3号列石出土遺物(3)

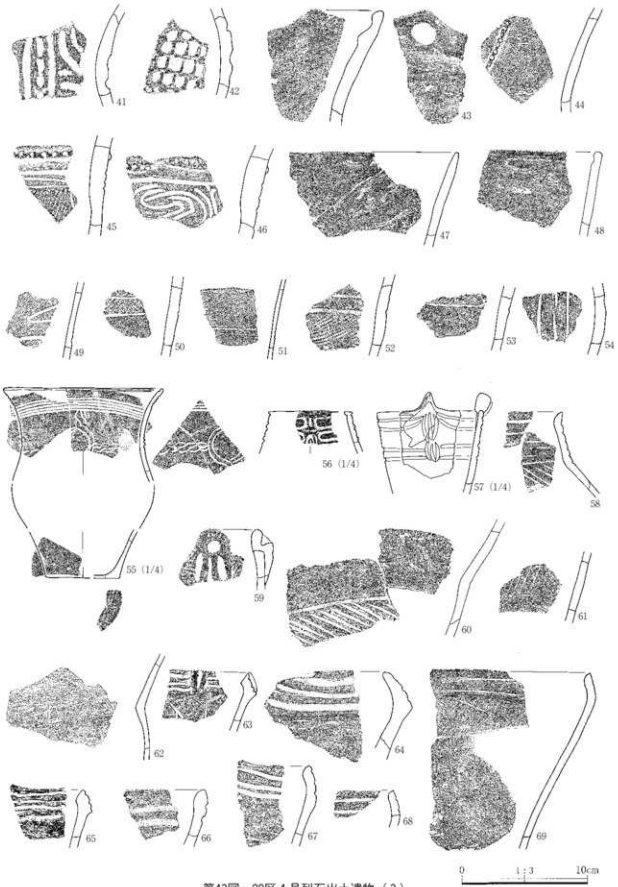


第41図 29区4号列石出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

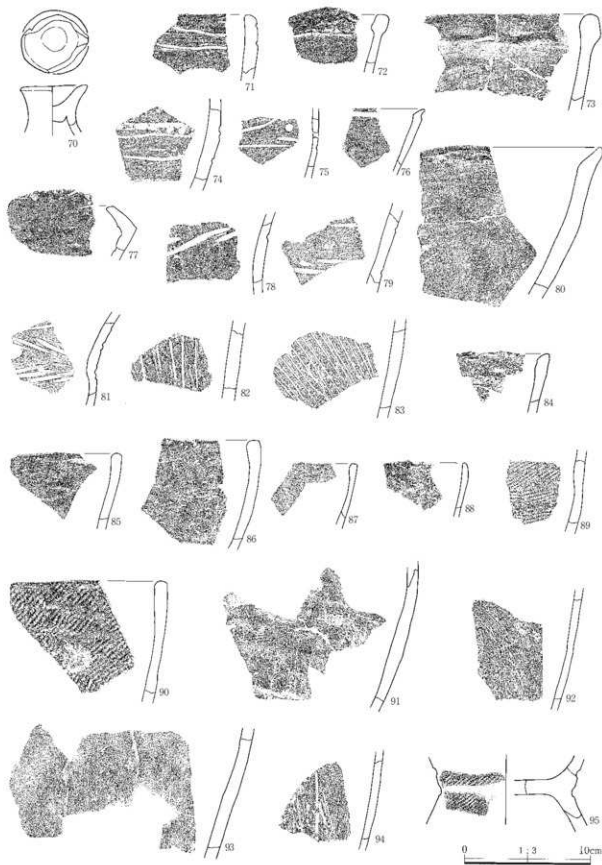


第42図 29区4号列石出土遺物(2)



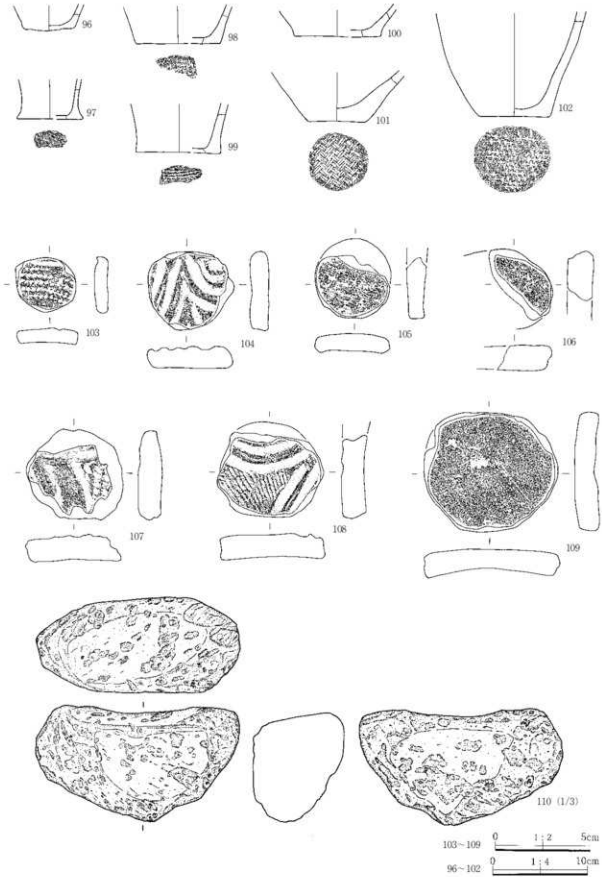
第43図 29区4号列石出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物

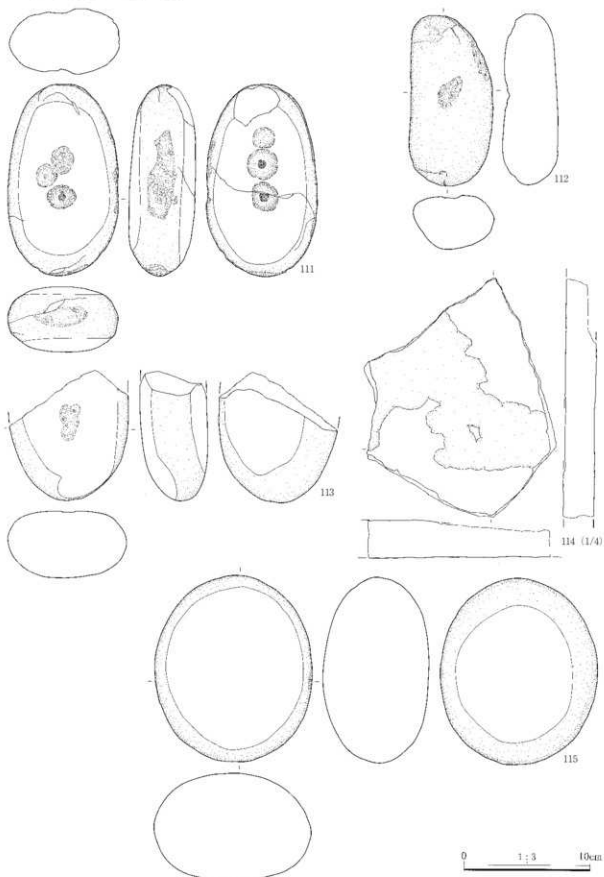


第44図 29区4号列石出土遺物(4)

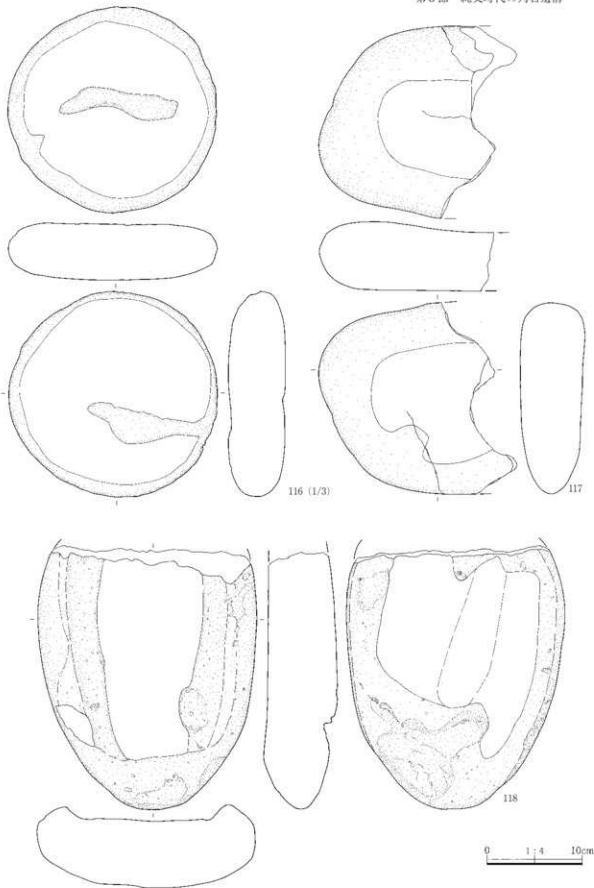
第3節 縄文時代の列石遺構



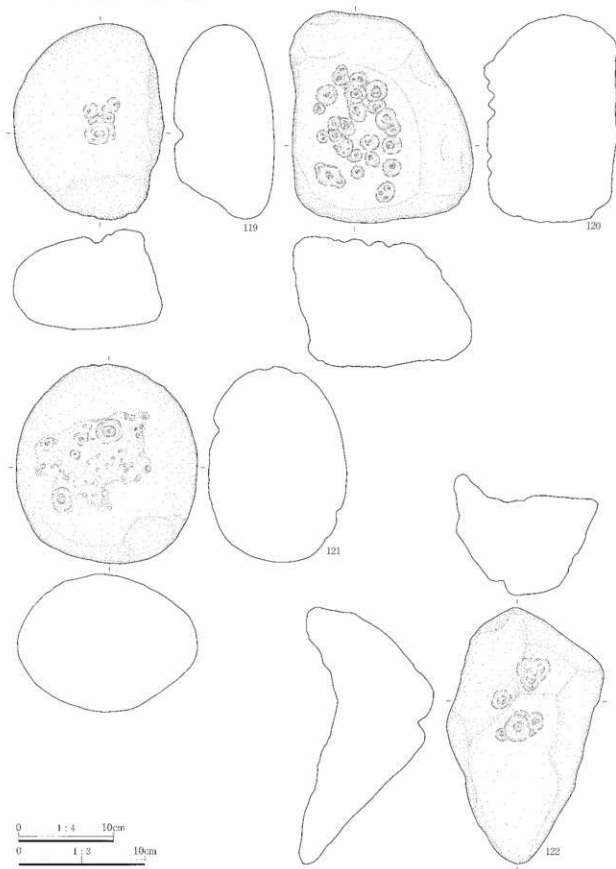
第45図 29区4号列石出土遺物(5)



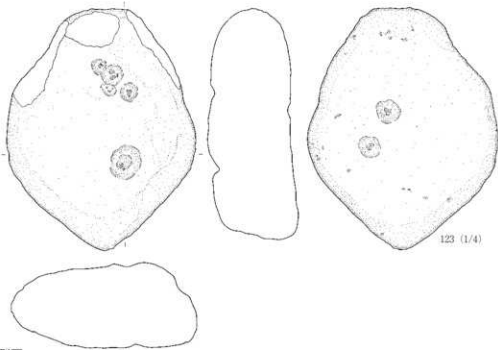
第46図 29区4号列石出土遺物(6)



第47図 29区4号列石出土遺物(7)

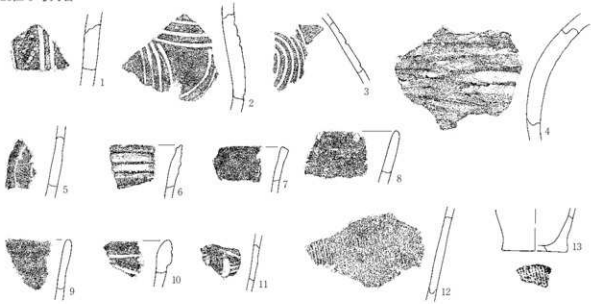


第48図 29区4号列石出土遺物(8)



29区4号列石

29区5号列石



0 1:3 10cm

第49図 29区4号・5号列石出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

にわたって使用された可能性が高い。

所見 本列石は3号列石と一連の施設として構築され、水場（山根沢）との関連が強い施設として、その後も長期にわたって継続的に使用されたと想定したい。

その理由としては、4号列石には伴う住居が見当たらないこと、堀之内1式期に構築された可能性が高いこと、列石の走行が3号列石とほぼ平行すること、3号列石の立石群と4号列石の立石群が3号住居出入口部立石の延長上に並ぶこと、3号列石の南側から4号列石の立石群に向かって延びる石列の存在、などが上げられる。もちろん本列石に伴う住居が調査区外にある可能性や、単独の遺構となる可能性も大いに残されている。

いずれにしても、本列石は2面目・3面目の状況および出土遺物等から、長期にわたって礫が集積されていった状況が看取される。また、立石群の東側に接して確認された遺物集中部の存在から、加曽利B式期前後から遺構の性格が変化し得た可能性もある。

29区5号列石

調査年度 平成11年度

位置 F-4～G-5グリッド

経過 調査経過は4号列石と同様である。本列石は当初は4号列石の一部として調査され、全体の状況が把握されてから、延びる方向の違いを理由に5号列石とされた。

重複 4号列石と交差する状態にあるが、接しているのか、あるいは重複しているのかを判断できる材料は得られていない。

形状 4号列石の立石群の端から北西方向に直線的に延びる石列で、4号列石と同一面に構築されている。確認された規模は長さ6m、幅1mほどである。残っていた礫は少なく、調査できた範囲も限られていたが、一部に側縁を立てて設置された礫も確認されている。

写真図版(PL25-1、PL27-1)では山根沢に

切られているように見えるが、写真の山根沢は工事に関連して掘削されたもので、図版に使用した地形図はそれ以前のものである。この部分に関しては縄文時代の山根沢の流路は確認できていないが、地形図と大きく変わっていないとすれば、5号列石は山根沢に沿って配置されていたことになる。

下部遺構 確認されていない。

石材等 使用された礫は、地山中や沢に点在する粗粒輝石安山岩重角礫が主体であるが、明らかな川原石も持ち込まれている。

方位 N40度W

遺物 先述のとおり、本列石に伴う遺物の大半は4号列石の扱いになっており、本列石の遺物として取り上げたのは74点のみである。

時期 4号列石と一連の時期に比定されよう。

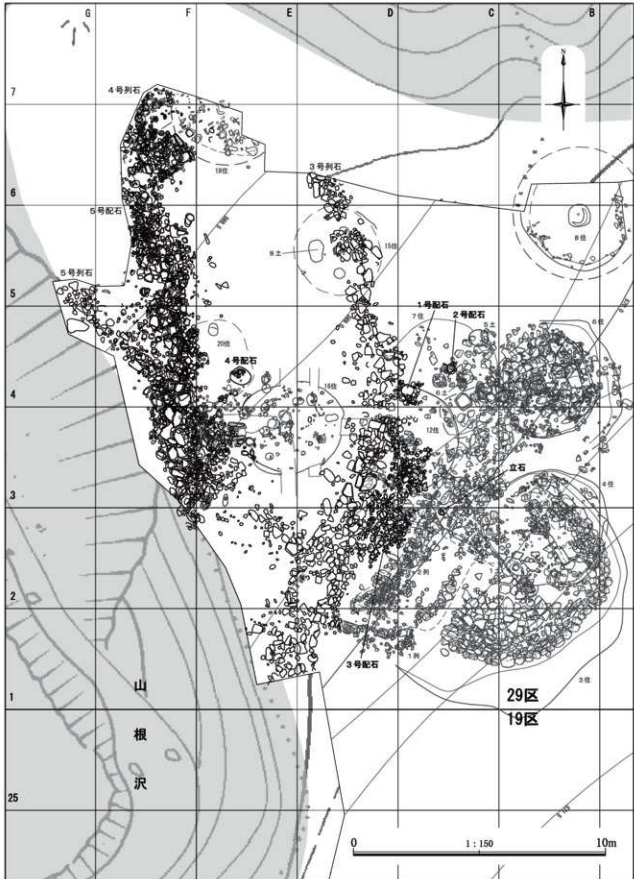
所見 4号列石と一連の遺構と判断する。本列石の南東側延長上に3号列石から延びる石列とは、方向は一致しているがラインが食い違っている。3号・4号列石が3号住居の出入口施設として構築されたとする仮定に立てば、本列石とその石列は水場である山根沢に沿った施設として後付けされた遺構と考えたい。

29区遺物集中部及びグリッド出土の後期土器

29区4号列石の立石群東側に接して確認された遺物集中部の土器は、調査時にグリッド単位一括で取り上げられ、整理段階で担当の不注意から他のグリッド遺物と混在してしまった。

ここでは遺物集中部と周辺グリッド出土の土器について第51図～第86図に示した。第50図はその対象範囲を示す図で、次表はその対象範囲のグリッドから出土した後期土器の型式別出土点数である。無文土器の多い堀之内2式以降は不確定要素がおおいため、加曽利B式と高井東式は有文・無文を分離した。また、加曽利B式は一括したため、他形式と同等に比較はできないが、目安で見てください。

この範囲から出土した後期土器は総計で6,356点あり、称名寺1式期から安行式期までの各型式が揃



第50図 29区3号～5号列石周辺グリッド遺物出土状況

第3章 発見された遺構と遺物

っている。このうち、住居が存在するのは称名寺式から堀之内1式までで、これらは遺構として取り上げた土器が多い点を考慮する必要がある。グリッド出土土器のうち、点数が最も多いのは高井東式で、堀之内1式がそれに次いでいる。堀之内2式と加曾利B式もまとまった量が出土している。各時期の出土量をラインで見ると、称名寺式から堀之内1式がC～Dラインを中心とするのに対し、堀之内2式以

降はE～Fラインに変化している。後者は3号・4号列石にのるラインである。また、出土点数の約半数を占める加曾利B式～高井東式はE～3グリッドとその周囲に集中しているが、この地点が遺物集中部にあたる。加曾利B式の80%以上がD～Fラインに、高井東式の90%以上がE～Fラインに集中し、その60%以上が遺物集中部から出土していることになる。

横壁中村遺跡 29区遺物集中部およびグリッド出土土器時期別総量

称名寺1式

グリッド	F	E	D	C	B	A
7						
6	8	2				
5	1				2	
4	2		6	9		
3		5		22	11	
2			36	49	5	
1			117	20		
合計	11	7	159	100	18	295

称名寺2式

グリッド	F	E	D	C	B	A
7						
6	21	18			6	
5	10	19	3		4	2
4	2		18	7	5	
3	1	16	3	65	12	2
2			38	51	2	3
1			71	19		7
合計	34	53	133	142	29	391

堀之内1式

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	58	21					
5	149	49	18		33	12	
4	25		41	66	11	5	
3	4	35	18	118	50	2	
2		36	108	160	7	4	
1		2	56	123	33		
合計	236	143	241	467	134	23	1244

堀之内2式

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	64	97					
5	59	183	57				
4	66		19	12		2	
3	6	21		7	12	3	
2		10	15	44	7	1	
1			12	10	1		
合計	195	311	103	73	20	6	708

加曾利B式 (有文)

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	89	21					
5	20	36	23	4		11	
4	61	75	67	26	17	5	
3		252	64	37	4		
2		52	44	20	30		
1		4	8	20		1	
合計	170	440	206	107	51	17	991

加曾利B式 (無文)

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	94	5					
5	13	25	25	5			
4	12	98	35	8	12		
3		137	23	20	2		
2		56	10	14	8		
1		3	9	7	1		
合計	119	324	102	54	23		622

高井東式 (有文)

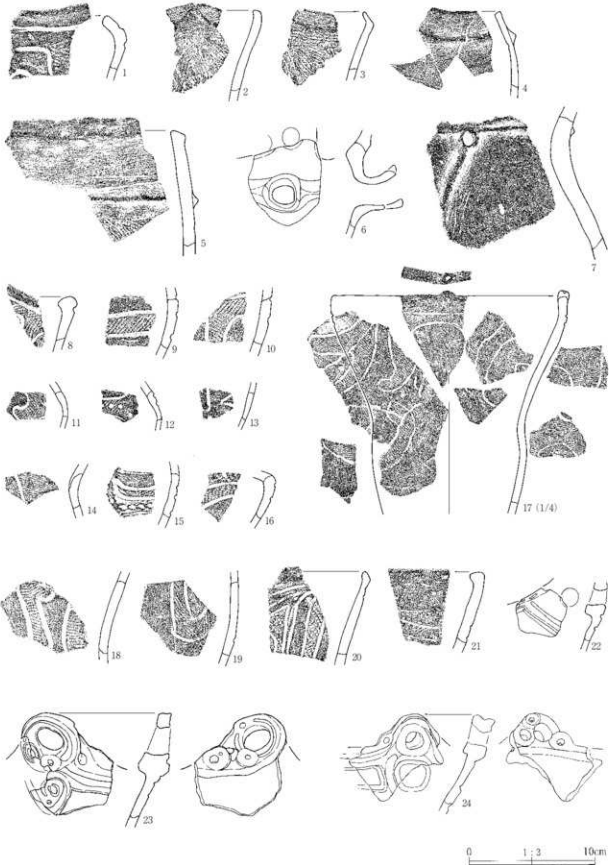
グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	83	25					
5	19	40	8	1			
4	97	78	24	1			
3	3	292	18	1	3	1	
2		49	9	5	4		
1			2	3			
合計	202	484	61	11	7	1	766

高井東式 (無文)

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	76	28					
5	36	44	7	1			
4	100	193	48				
3		370	17	1			
2		47	7	1			
1			7	12			
合計	212	682	86	15			995

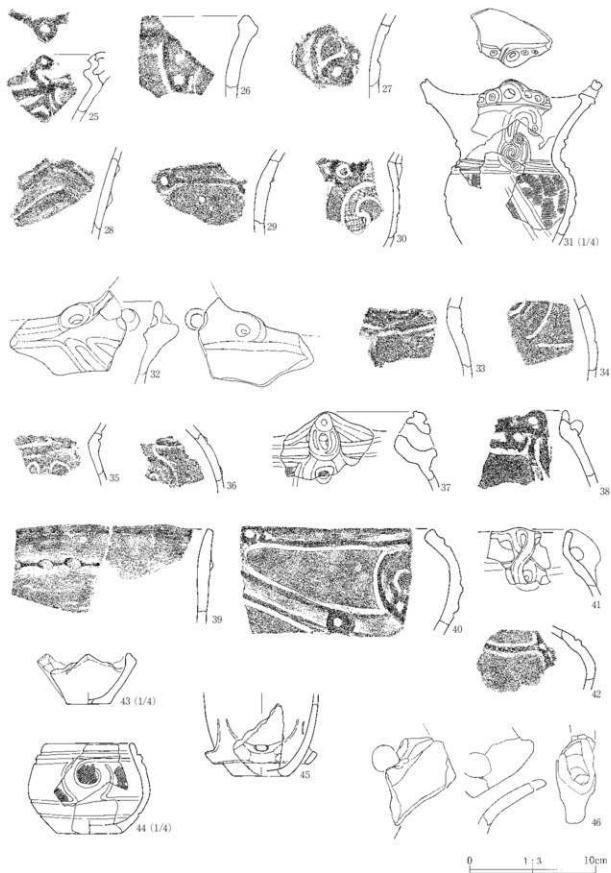
後期底部

グリッド	F	E	D	C	B	A	
7							
6	33	17	2				
5	32	23					
4	14	27	21	5	1		
3		16	25	12			
2		19	12	53	1		
1			30	1			
合計	79	102	90	71	2		344

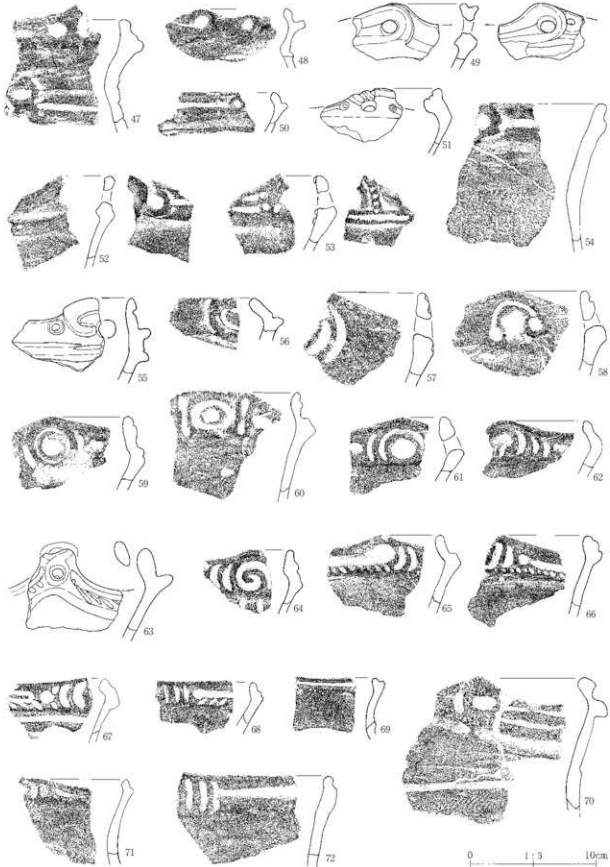


第51図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

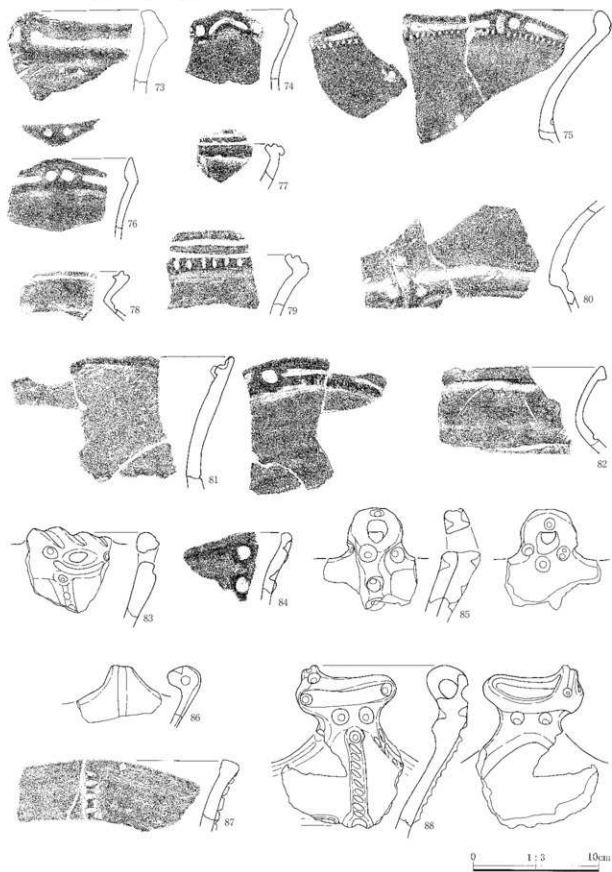


第52図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(2)

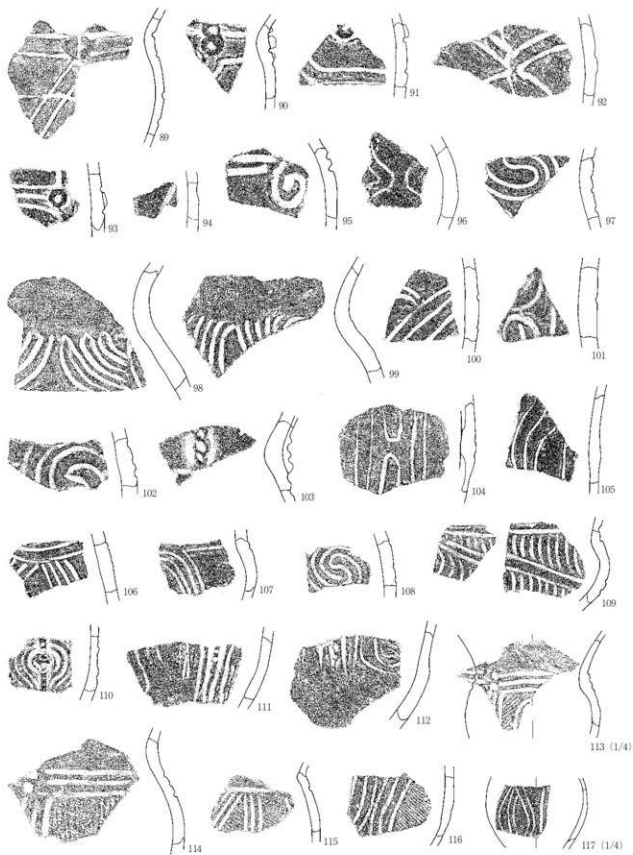


第53図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物



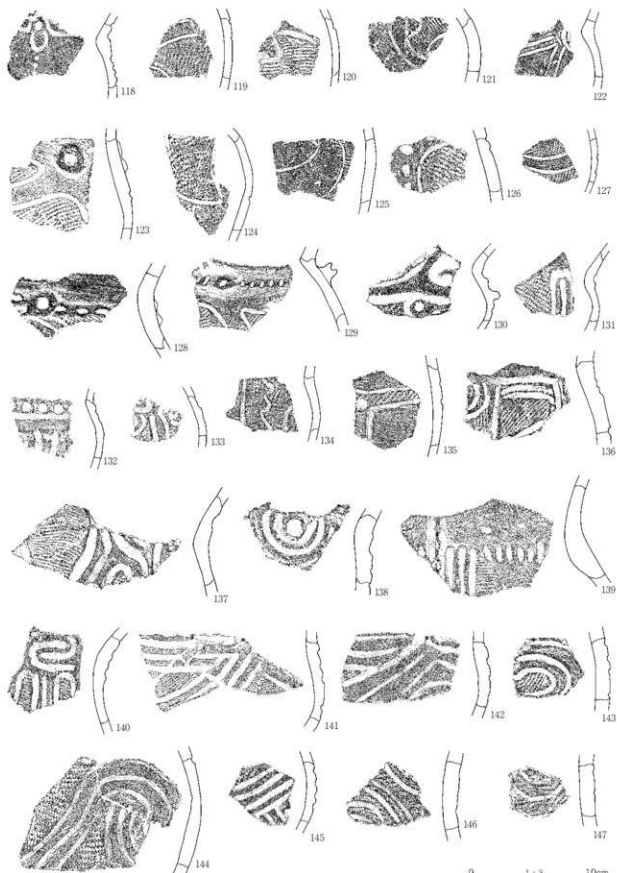
第54図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(4)



第55図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(5)

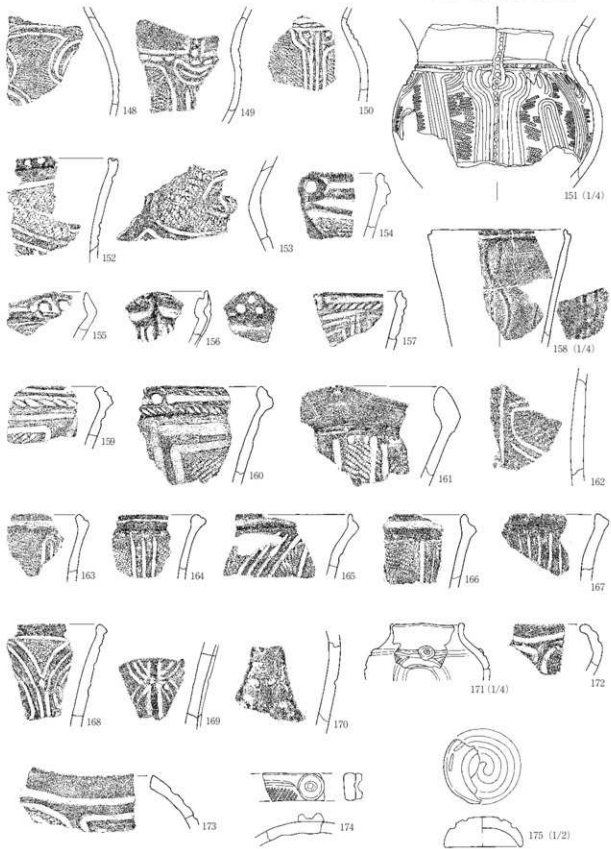
0 1:3 10cm

第3章 発見された遺構と遺物



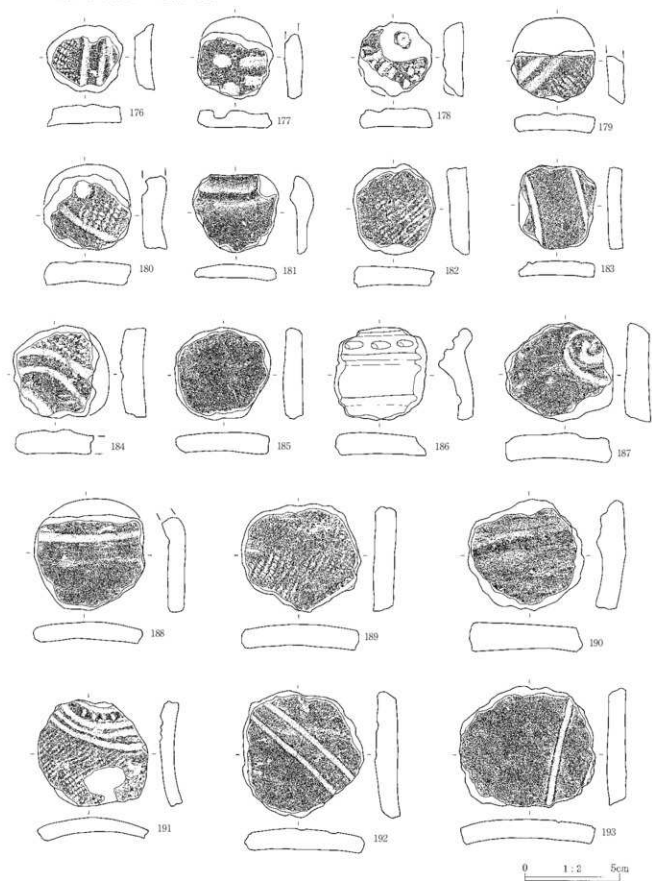
第56図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(6)

第3節 縄文時代の列石遺構

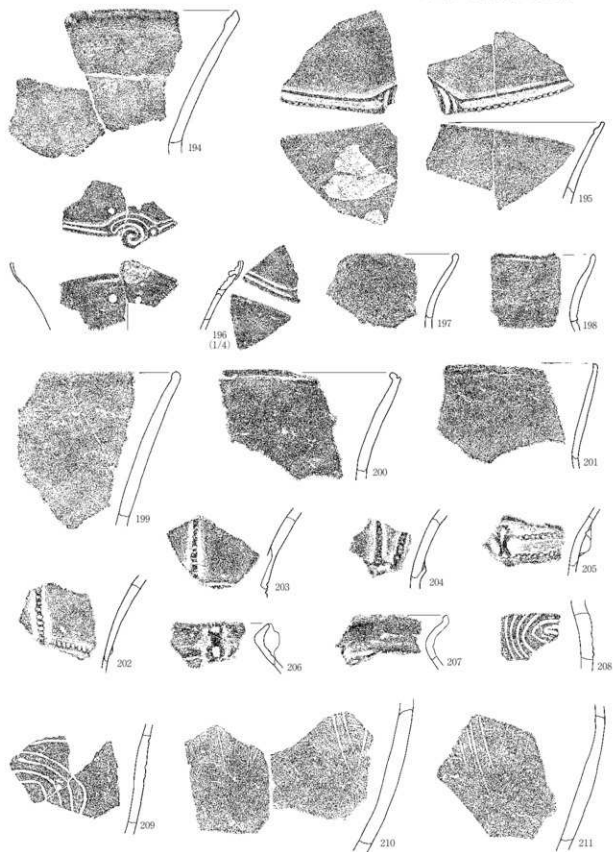


第57図 29区3号~5号列石周辺包含層出土遺物(7)

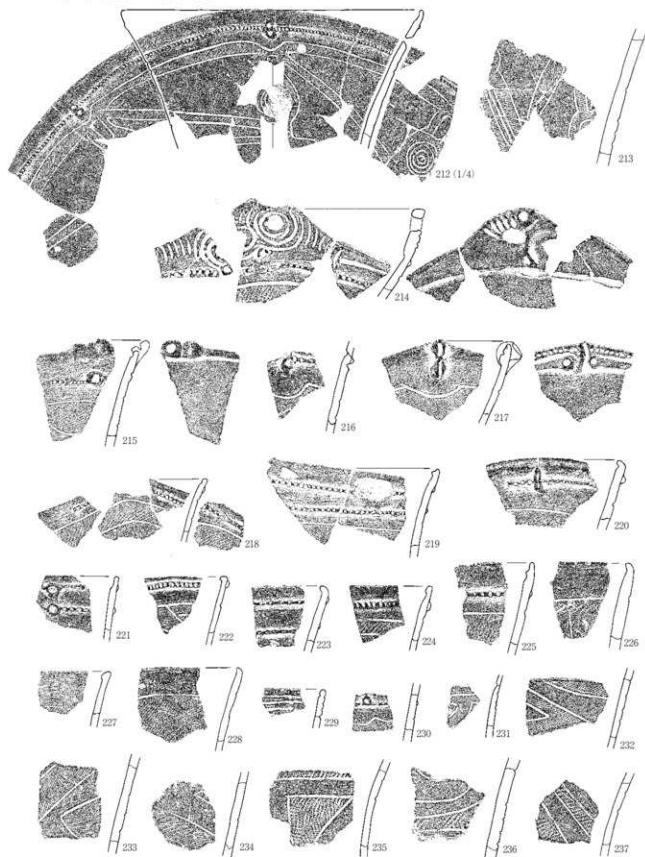
第3章 発見された遺構と遺物



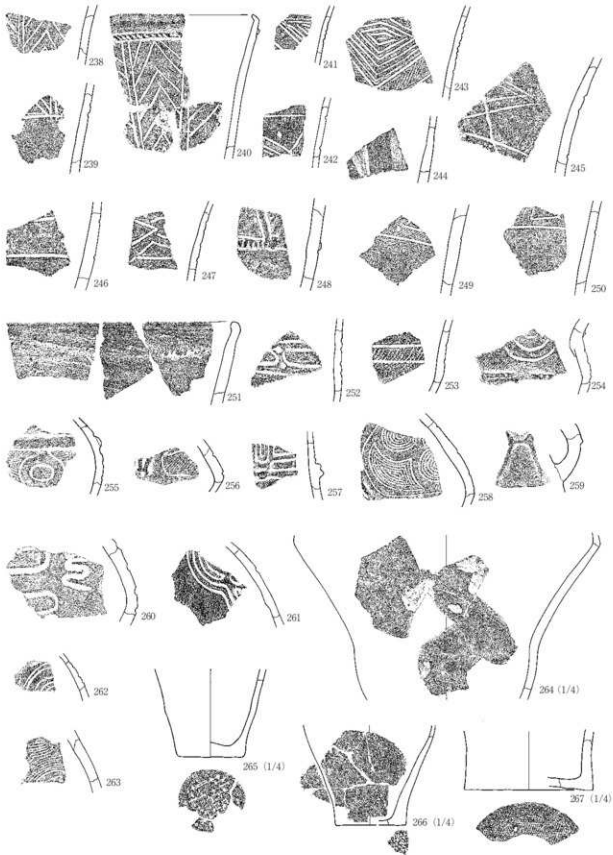
第58図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(8)



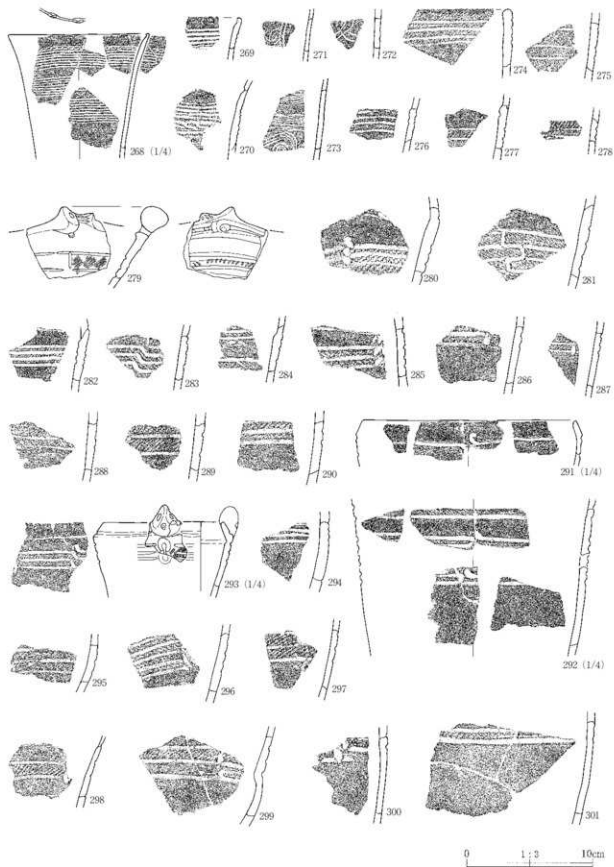
第59図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(9)



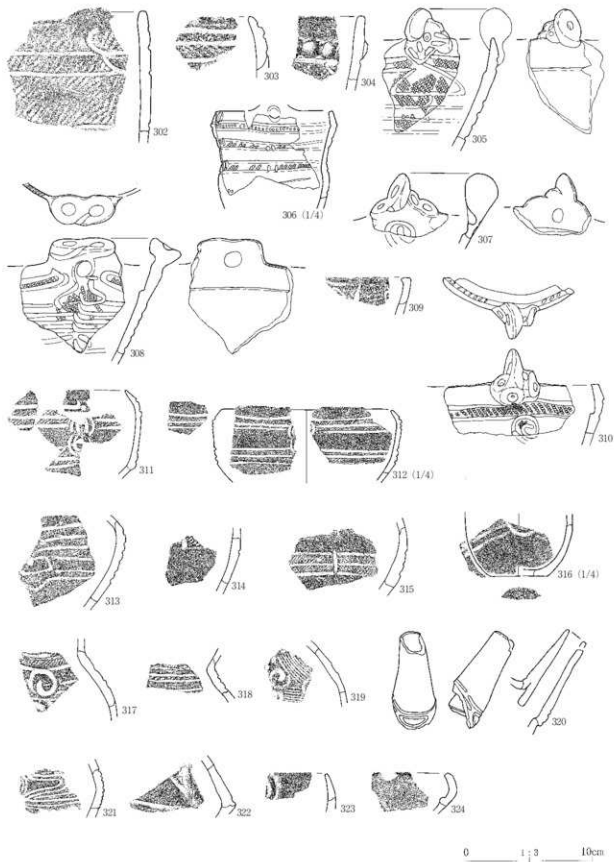
第60図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(10)



第61図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(11)

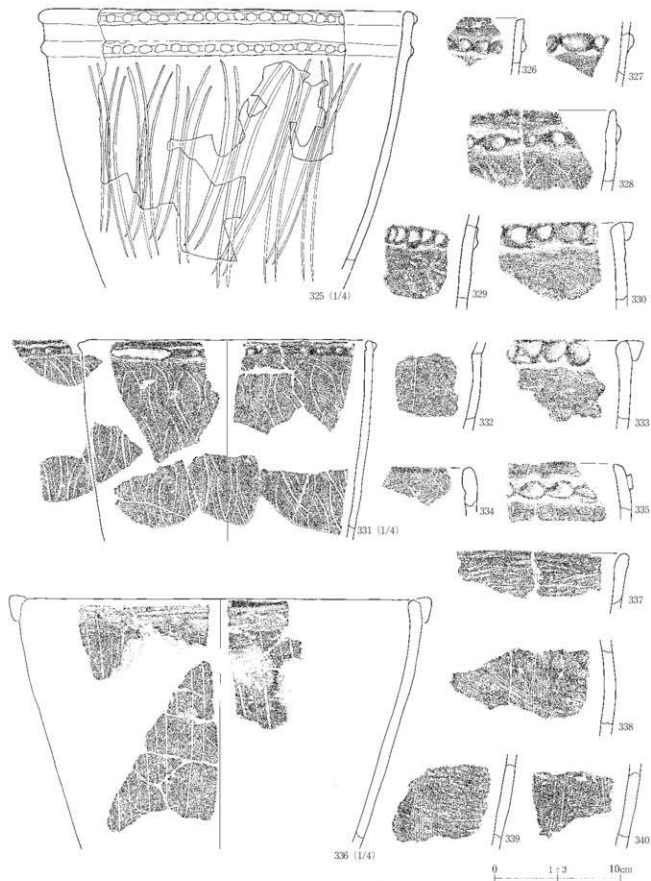


第62図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(12)

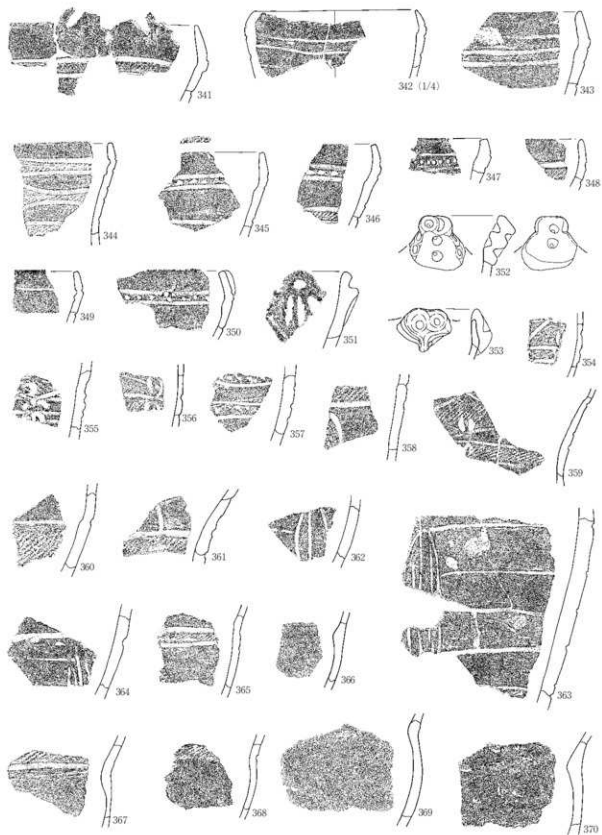


第63図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(13)

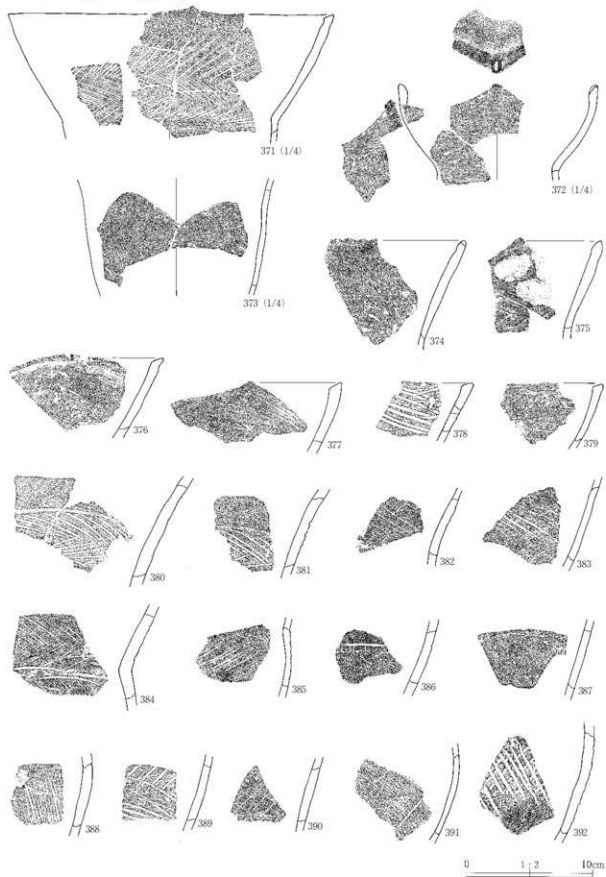
第3章 発見された遺構と遺物



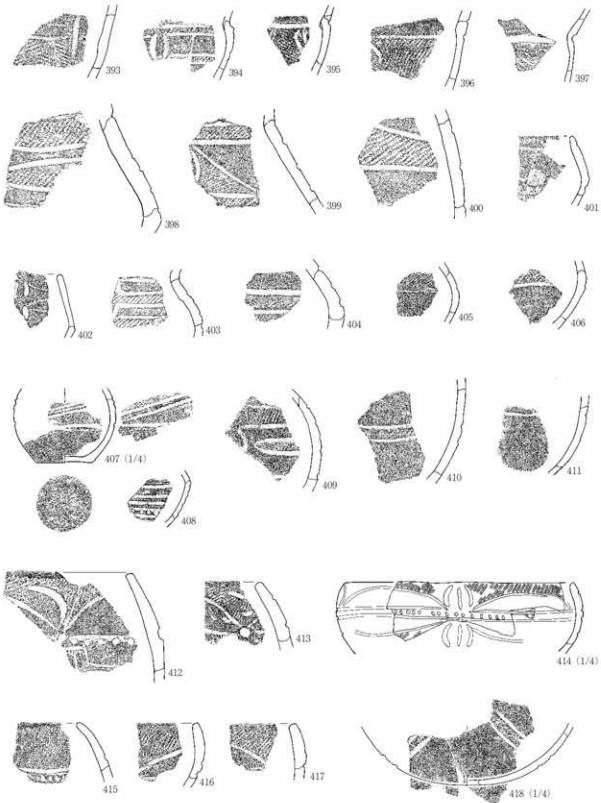
第64図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物 (14)



第65図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(15)



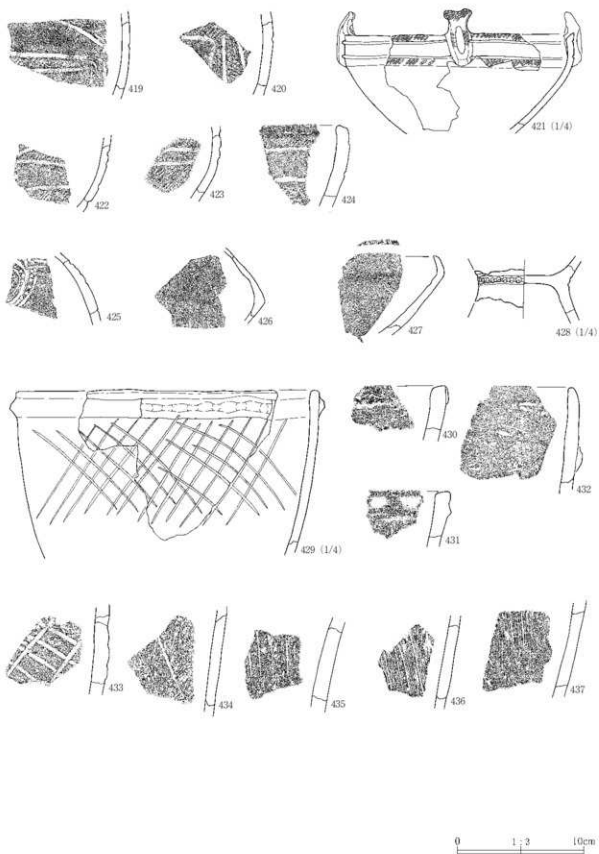
第66図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(16)



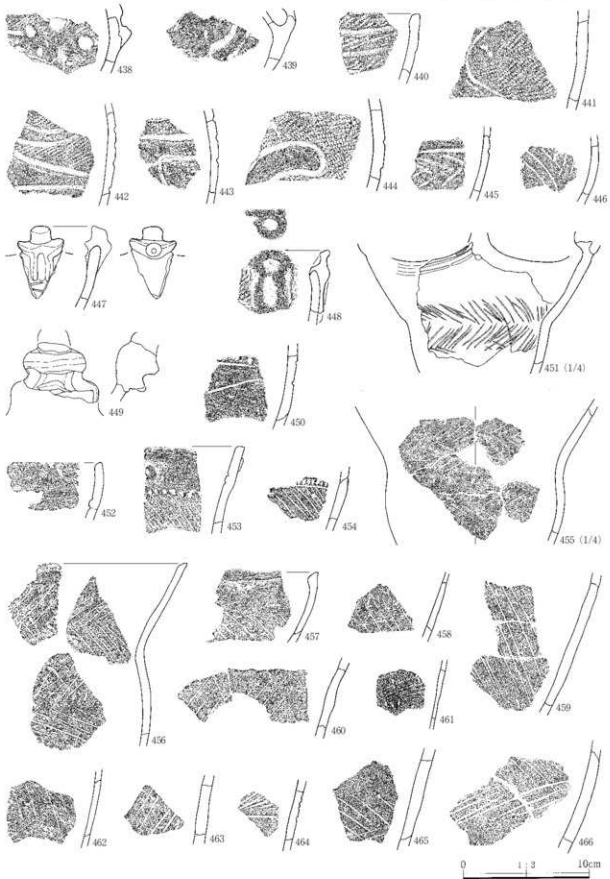
0 1:3 10cm

第67図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(17)

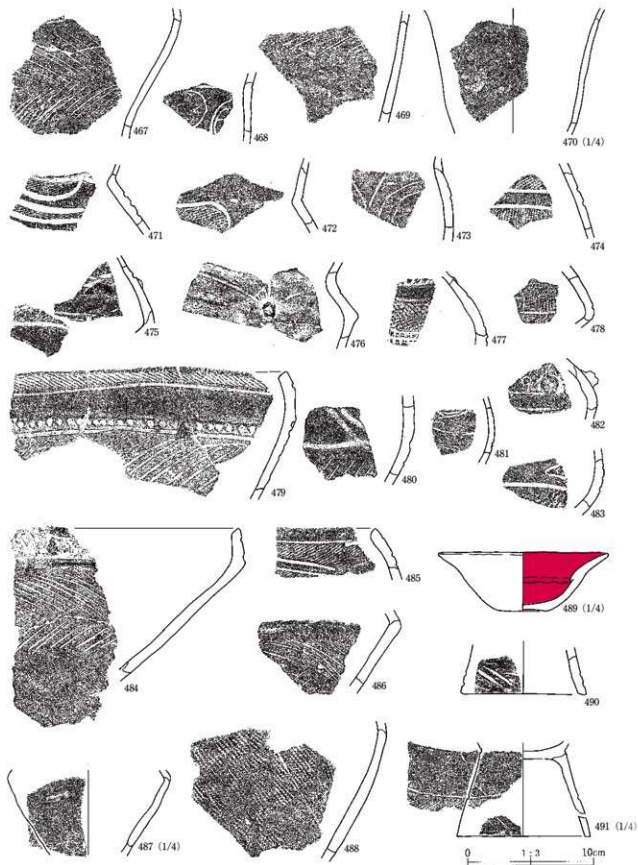
第3章 発見された遺構と遺物



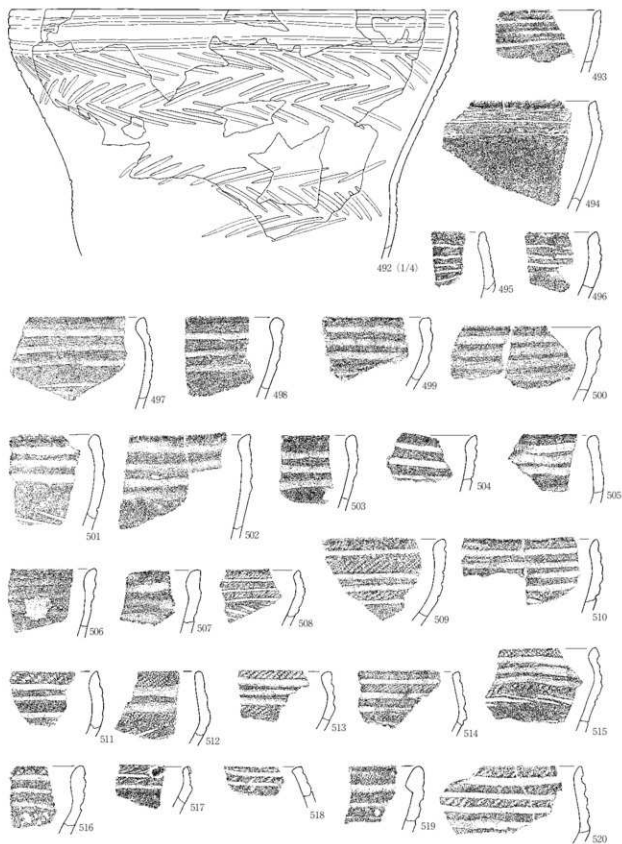
第68図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物 (18)



第69図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(19)

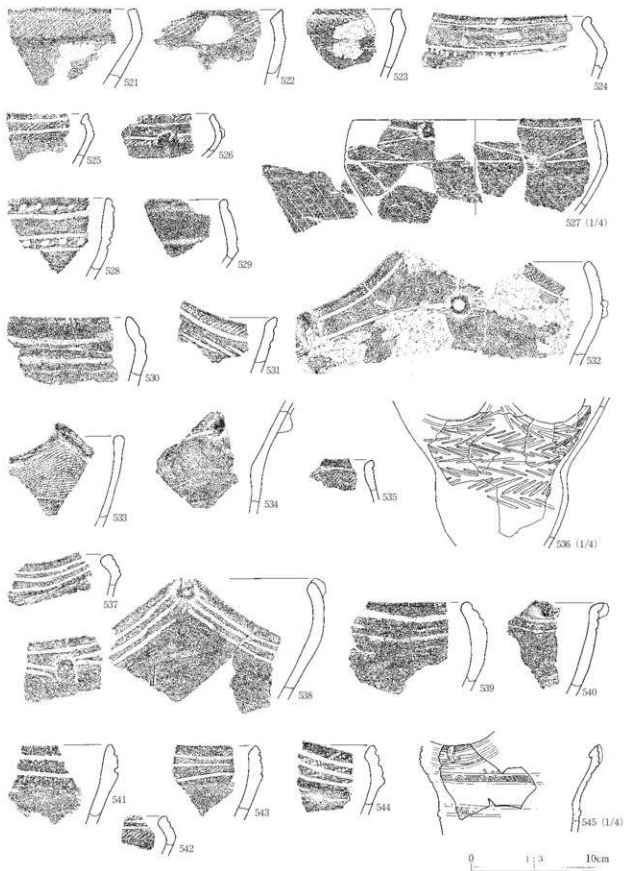


第70図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(20)



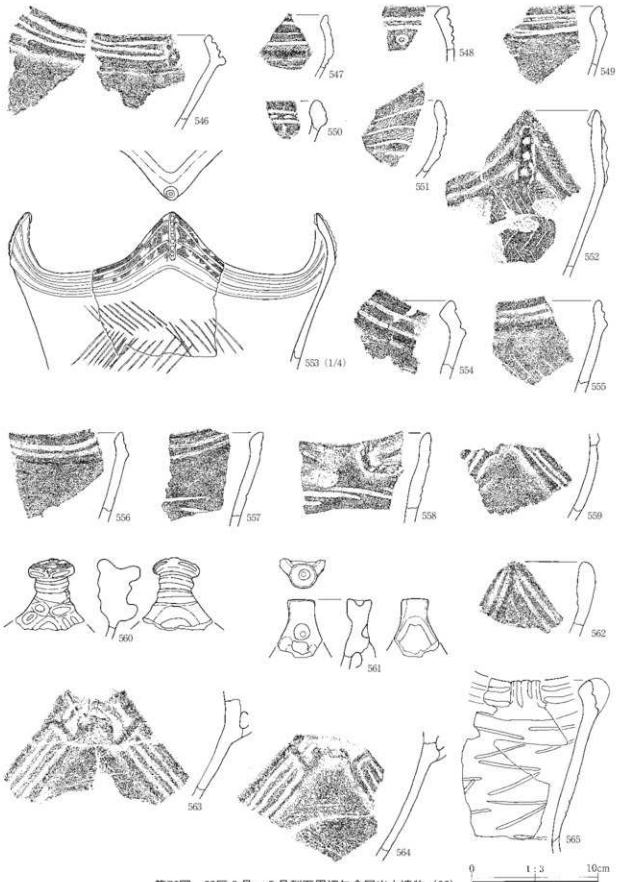
第71図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(21)

第3章 発見された遺構と遺物

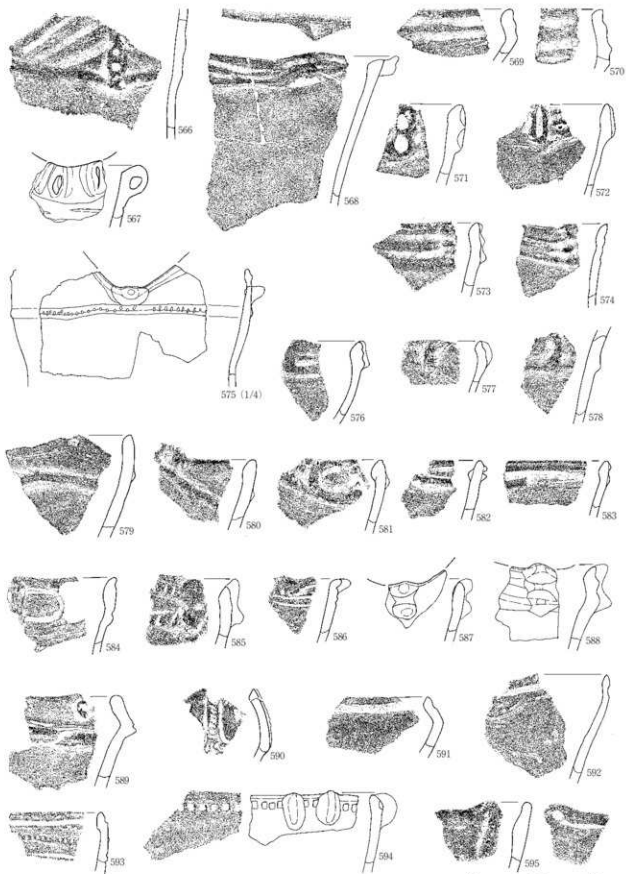


第72図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(22)

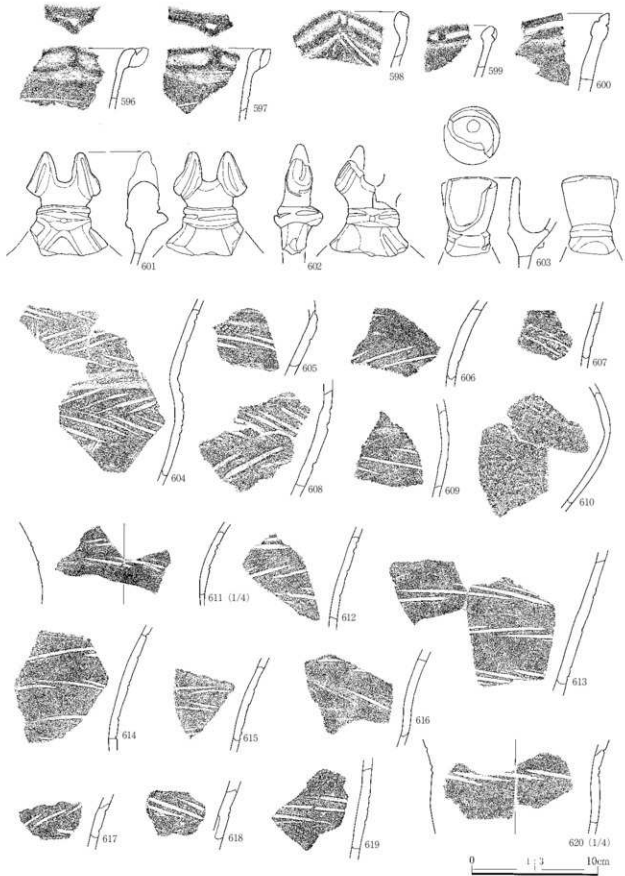
第3節 縄文時代の列石遺構



第73図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(23)

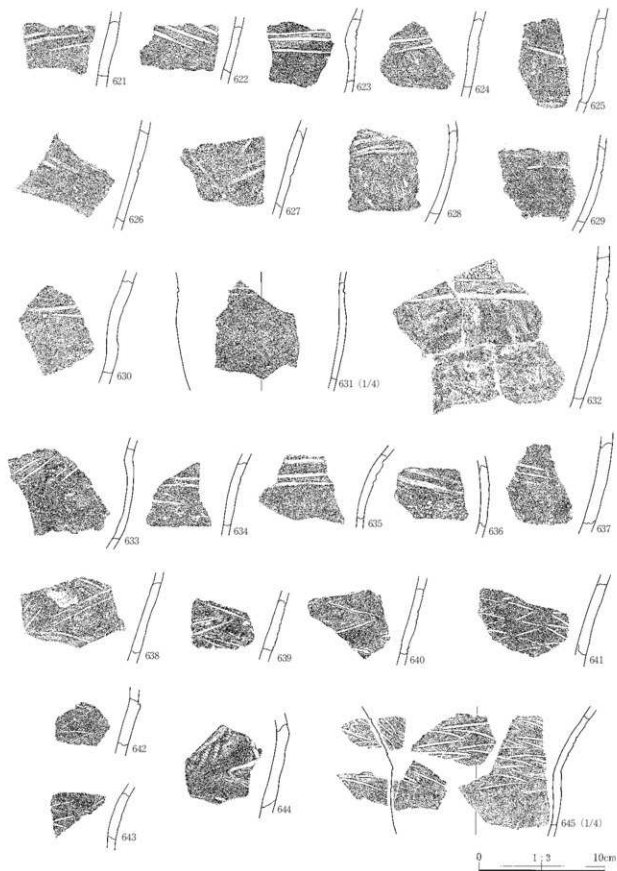


第74図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(24)



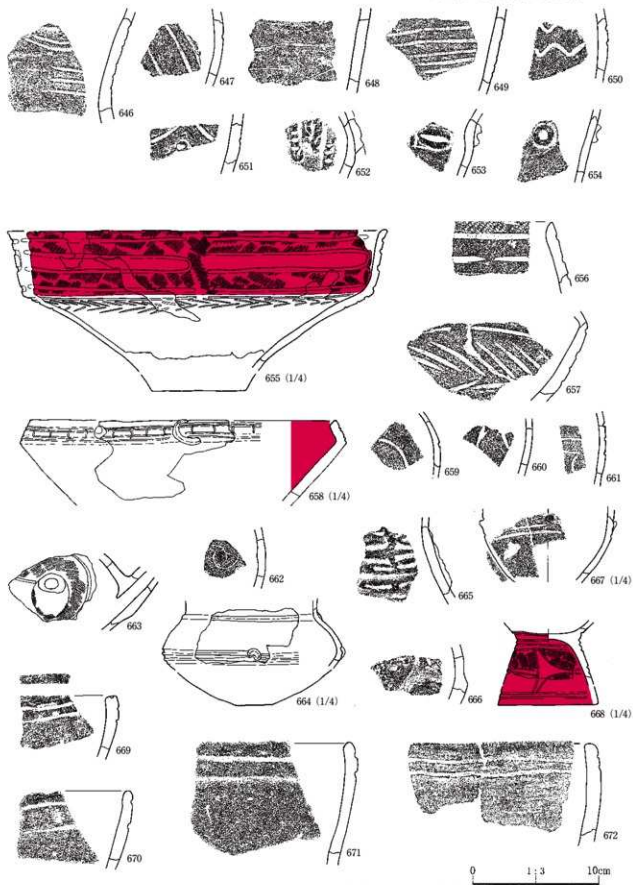
第75図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(25)

第3章 発見された遺構と遺物



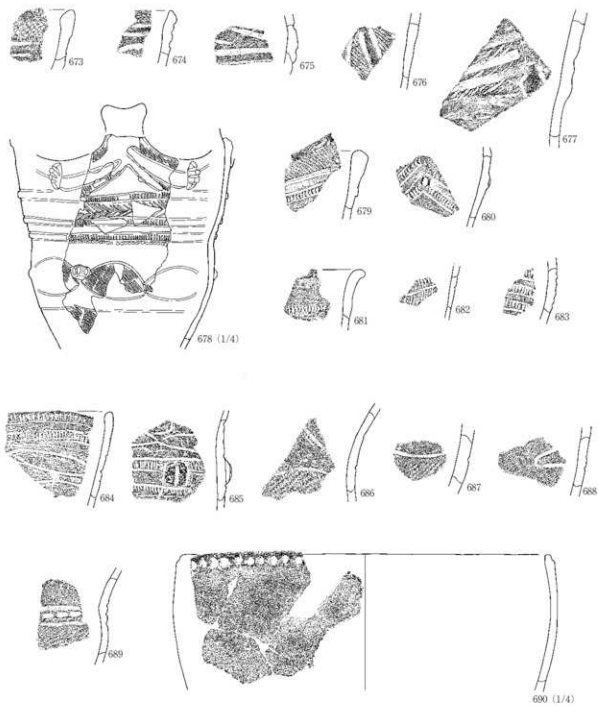
第76図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(26)

第3節 縄文時代の列石遺構

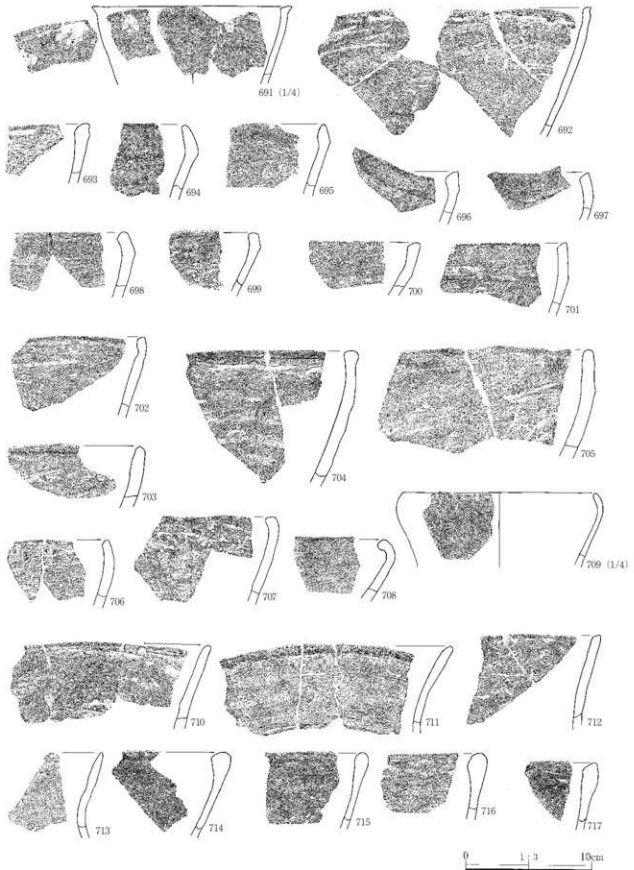


第77図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(27)

第3章 発見された遺構と遺物

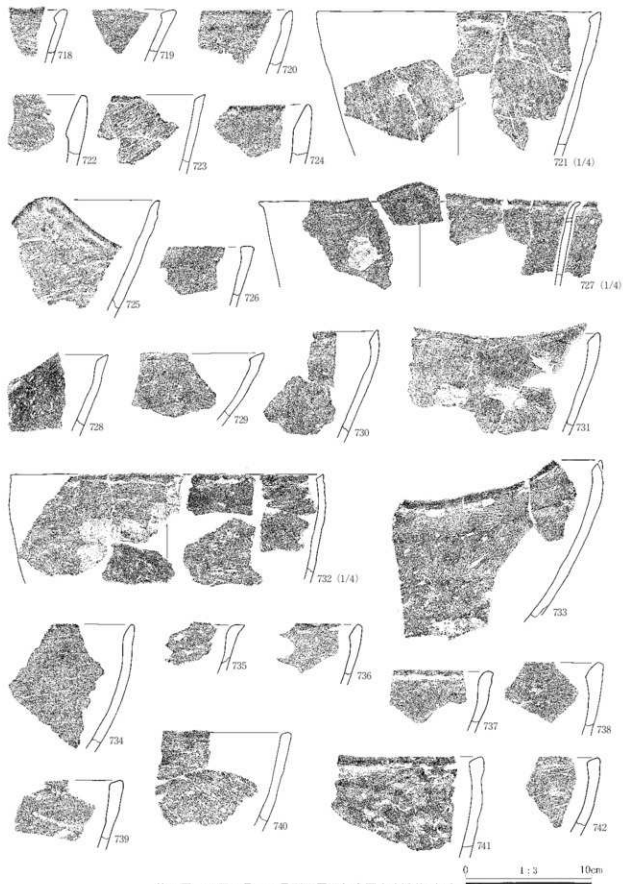


第78図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(28)



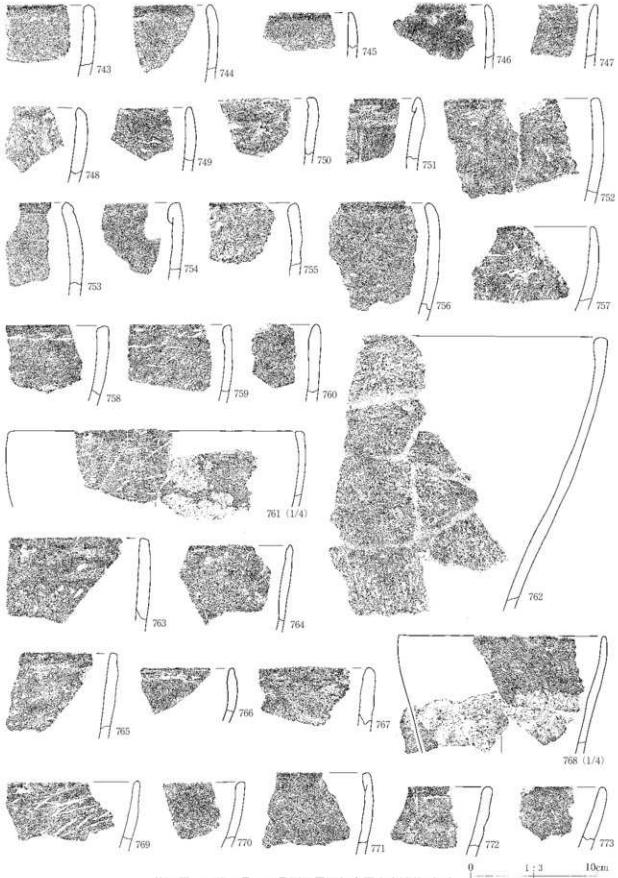
第79図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(29)

第3章 発見された遺構と遺物



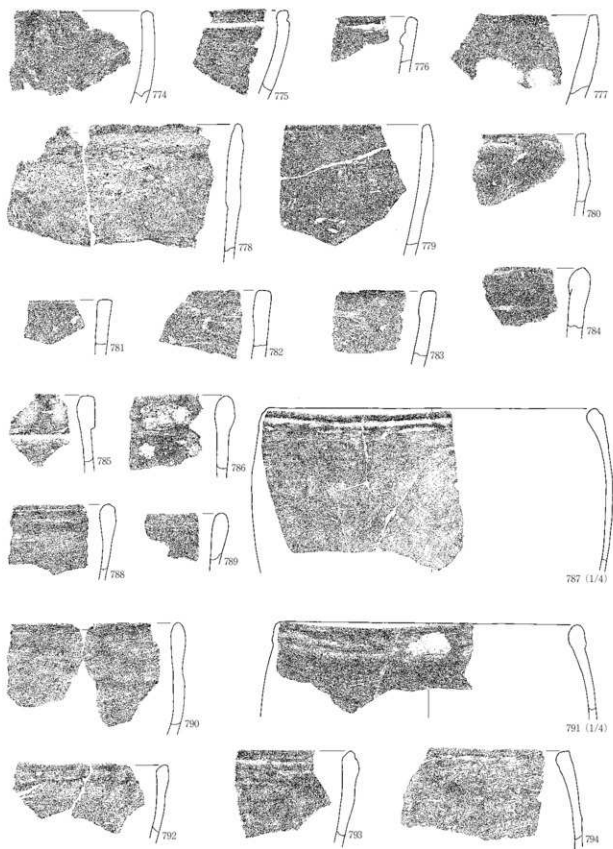
第80図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物 (30)

第3節 縄文時代の列石遺構



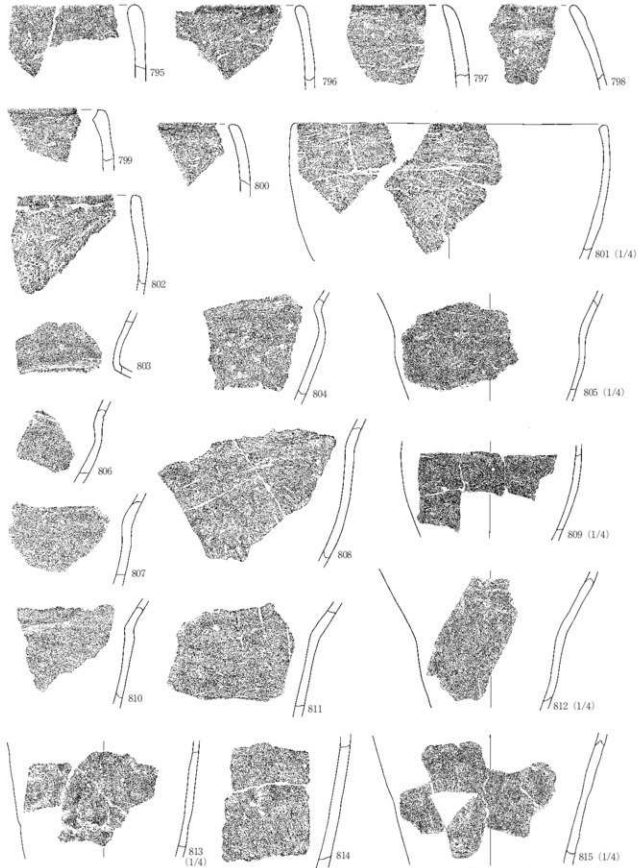
第81図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(31)

第3章 発見された遺構と遺物



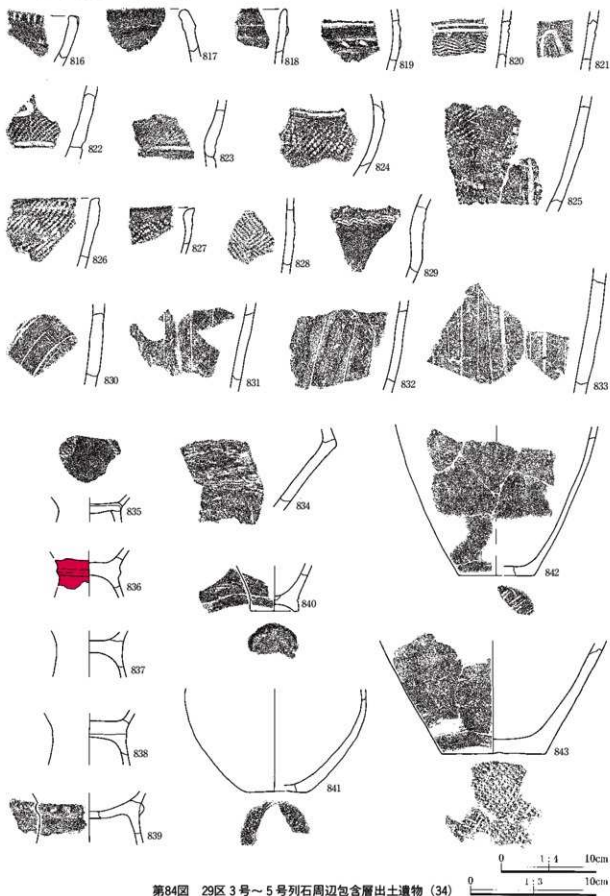
第82図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(32)

第3節 縄文時代の列石遺構

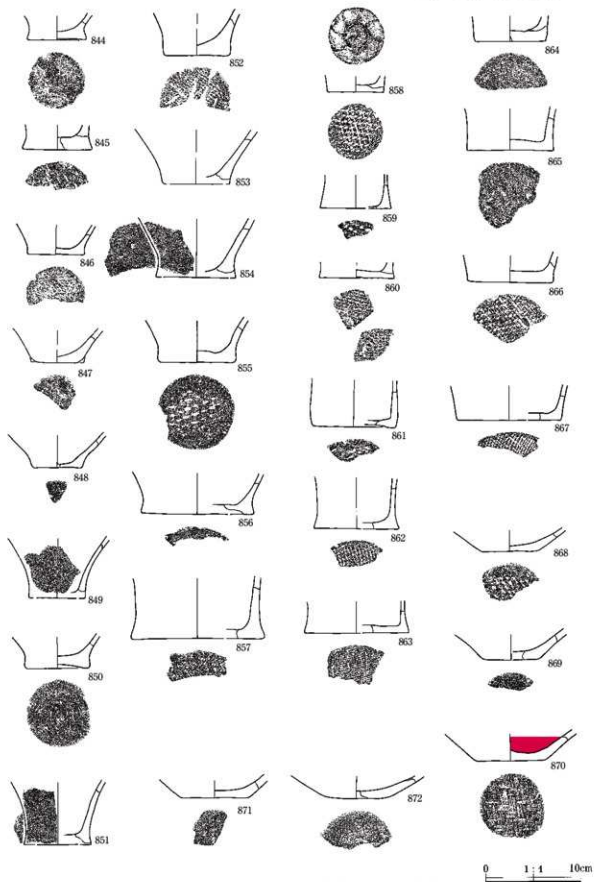


第83図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(33)

第3章 発見された遺構と遺物

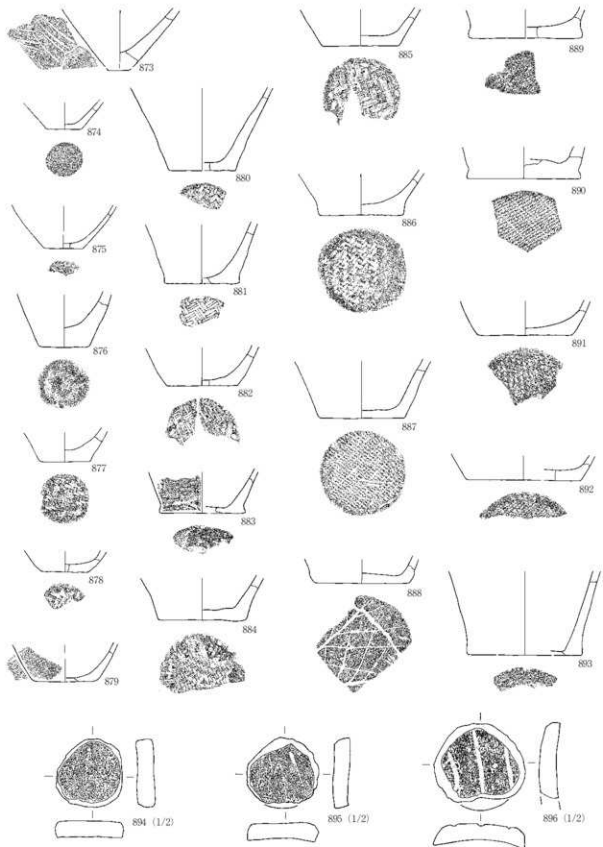


第84図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(34)



第85図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物(35)

第3章 発見された遺構と遺物



第86図 29区3号～5号列石周辺包含層出土遺物 (36)